
幻想世界の人形遊戯

ミナミナミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想世界の人形遊戯

【Nコード】

N9771K

【作者名】

ミナミナミ

【あらすじ】

事故で片目を失った少年は自分の眼を持っているという人形に出会う。

願いを叶え、持ち主と体を共有する人形とその所持者たちの戦いに、平凡を美德とする少年は巻き込まれていく。果たして彼の運命は。

序文（前書き）

あまり期待しないで読んでください。

序文

片目が無いというのはかなりの障害だ。

幼い頃に目を失ったので片目で物を見ることには慣れている。だから別に生活していくうえで不便という訳ではない。

しかし、片目を覆う黒い眼帯は嫌でも目立つ。それに集まる好奇心の視線と、事情を話した時の同情の視線はなかなか不快だ。

故に、片目が戻ってくると言われれば素直に喜ぶし、返してほしいとも思う。

そんな僕の前に僕の目を持つ何かが見れたことはどう受け取ればいいのだろうか？

序文（後書き）

はじめまして、ミナミナミです。

小説投稿はまだ慣れていませんのでミスは指摘していただけると嬉しいです。

ちなみに、私に定期更新なんて偉大なものは無理なのでそこは御留意ください。

さて、小説の話ですが今回は顔見せで序章ですらない序文です。そのため二百文字と規格外の短さですが、許していただけると幸いです。不快に感じた方はすいません。

へたレな無能ですが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします。

第一部 序章、その一

非常にシユールだ。

何がつて目の前で黙々とアイスを食べてるこの存在がだ。

「なあ、お前ら消化ってどうやってるの？」

別に人間の消化の仕組みについての学術的な見解を求めている訳じゃ無い。ただ、平和と平凡を是とする僕としては無機物が物を食べてどう消化するかが気になるだけだ。

そう、無機物。人形が何故食事をしているんだ。

「さあ、どうなってるのでしょうか？」

「そんなアバウトな行為の為に前は僕の財布の中身を危機的状況に追い込んでいるのか。」

「ええ、そうよ。それにアバウトも何も、私が動いてるといふその事実が既に謎じゃない。動く人形なんてなかなか珍しいでしょうに。そう思わない、蒼？」

動く人形、僕の日常が壊れるから本当にやめてほしい。まあ、こいつを追い出さないと決めたのは僕なただけど。

僕こと御任蒼^{みとうそら}は平凡な高校生のはずだった。たしかに幼少時に事故で片目を失うというまあ非凡なことを経験しているが、そこで一生分の非凡成分を使い果たしたはずだった。だったのだが、自らを『人形^{ドール}』だと言うこの少女に出会ってから再び僕の日常は少しずつ変化していくことになった。

「はあ、微妙に鬱だ」

あの時の僕はなんであんなにもあっさりこの人形の少女の話を受け入れたのだろう。テンションが高かった、正常な判断能力が失われていたと考えればそれで片付くのだがそれ以外に何かあるような気がしてならない。

「蒼、ゲーセン行かないか？」

「却下します」

「何故に」

「お前が嫌いだから」

「酷いな」

冗談だと思ったのかカラカラと無意味に爽やかに笑っているのは三谷圭吾、みたけいご 高身長、運動神経抜群、イケメン、成績上の下のリア充ボーイ。こいつがコマーシャルに出ればガムはめちやくちや売れると思う。

基本的にこういうタイプの人間は劣等感を感じるから苦手なのだが、圭吾の場合は根本に悪意というものが全く無いので邪険に出来ない。そのせいでまるで友人のような関係を築いてしまっている。

「で、実際は？」

「眠い」

「それも結構酷くないか？」

「課題が終わってないんだよ」

「ああ、そういうのはなるべく早くやったほうがいいぜ」

正論、しかし面倒なものは面倒というのも聞き直ってはいるが正論だと僕は思う。

「そういうことならしかたないか。じゃあな、また明日」

「はいはい」

今だからこそ出来る思考だが、ここでこいつと一緒にゲーセンに行けば未来は変わったのなんて現実逃避を試してみる。まあ実際のところあの事態は起こるべくして起こったものだし、僕が目標だったのだから避けられる訳が無い。

「御任君」

学校から出ようとしたところを呼び止められる。

「なんですか、先輩」

白神宮淡雪、しろかみのみやあわゆき 名前通りの触れれば消えてしまいそうなほど儂く美しい容姿の少女。

「今日は部活には出ないの？」

「ええ、ちよつとした用事があるので」

オカルト研究会、これが彼女と僕の所属する部活の名前だ。普通の学校なら忌避されるタイプの部活かもしれないが、うちの学校では部員も多く活動も活発で周囲からの認知度も高い。まあそれは淡雪先輩という類稀な美少女が部員にいるからかもしれないが。

「そう、気を付けてね。御任君、今日は危ないから」

「それはどっちですか？」

「勘の方」

「なら当たりますね」

オカルト研究会の活動は多岐にわたる。その中でも淡雪先輩は占いを専門としていてタロットやら何やらいろいろやるのだが絶望的なまでに当たらない。しかし、虫の知らせというか、なんとなく思ったことに関しては異様に当たるのである。今回はそれだということなら大なり小なり僕の身に何かが起こる可能性は極めて高いということだ。

「頑張つてね」

「あー…了解です」

嫌になる、本当に。

忠告通りにある程度周囲を警戒していたからかもしれないが特に何も起きずに無事家に到着。

「火音かおんいるか？」

無反応、どうやら妹はまだ帰って無いらしい。

荷物を置くために自分の部屋へ向かう。二階の奥にある部屋、入り口に洗濯物が掛けてあるあたり生活臭がプンプンだ。

ふと、違和感。父親の部屋が開いている、正確には父親の私物が置いてある倉庫のような部屋。僕の両親は高校一年の僕と中学二年生の妹を置いて単身赴任をしている。息子の僕から見ても駄目人間、まあ人のことを言えた義理は無いのだろうがそれでも彼等は問題あ

りだと思つ。

その父親の趣味の一つであるアンティークドール集めで、その人形が保管されている部屋の扉が開いている。家事全般を担当しているのは妹だがあの部屋だけは気味悪がつて入ろうとしないので掃除は僕の仕事だ。長々と説明したが要は今日はまだ僕はこの部屋の掃除をしていない、つまりこの部屋の扉が開いている道理は無いということだ。

「淡雪先輩の件もあるし、本当に鬱だ」

強盗だとしたら数分後に僕は脳漿やら内臓やらを撒き散らして死ぬ可能性もある。しかし、踏み込む。別に死にたいとかではなくて他に方法が無いのだ。

レベルで言うなら高校受験以上の緊張感、ジリジリと少しずつ部屋の奥を目指して進む。

注意はしていたはずだった、それなのに。

「片目が見えていない自覚はあるの？右側がガラガラよ」

「っ！」

予想していたのとは随分違う美しい声、振り向いた先にいたのはドレスによって飾られた人形じみた少女。その顔には異物、しかしそれは僕にとっては見慣れたものだった。

第一部 序章、その一（後書き）

話が細切れになり過ぎていたのでやや改造しました。

第一部 序章、その二

予想の斜め上に行く展開に上手く頭が回らない。誰だこいつは。何故ここにいる。どうやって入った。

「間抜け面の見本をしるとは誰も言っていないのだけど？」

「生憎、強盗に顔についてとやかく言われる筋合いは無いさ」

回らない頭に反比例するかのように口は無意味な言葉を紡ぐ。

「強盗？あんなセンスの無い存在と一緒にしないでくれるかしら」

勝手に人の家に侵入している人間は強盗、少なくとも不審者だとは思う。そもそも強盗にセンスとか関係あるのだろうか。

「私はあなたに害を成しに来た訳じゃ無い」

「僕はこの状況でその言葉を信じれるほど甘い人生を送ってきた訳じゃ無い」

「あら、そう。まあ右目が無いのもね、普通じゃないわよね」

右目が無い、僕は幼少時に事故で右目を失っている。

だがそれを言うならこの少女もだろう。体型的には小学生程度だが、そこら辺にいる子供とは容姿、声、服装、何から何まで違い過ぎる。その中でも特に異様な物が右目を覆う黒い眼帯、僕が異物と認識したもの。

それは僕が普段使用しているものにそっくりだ。彼女の修飾過多とも言える服装に比べて地味とも取れる黒いだけの無骨なデザイン。落ち着いてきたのか少女の外見を観察する余裕も出て来た。

「ねえ、あなたの右目がどうなっているか気にならない？」

「訳がわからないことを言わないでくれるか？」

ああ、どうやら突然出て来られたことと浮世離れた外見に惑わされていたようだ。近所のガキの悪戯、これが妥当な線だろう。

「全く、どうやって入ったのか知らないが悪戯は他所でやってくれ」
彼女の腕を掴み引きずり出す、多少乱暴になってしまふのはしかたないだろう。

ガチャ

人間を掴んだ時にはありえない感触と音。

「なんだ、これ……」

つい手を離してしまう。硬かった、ドレスの上から感じる、少女のかわいらしい外見とは真逆の硬質の触感。

「レディの体に不用意に触れるなんてあまりに失礼だと思わない？」
相も変わらずこいつはふざけたことを言っているが無視だ。

「お前は、何なんだ」

淡雪先輩の言葉が脳裏を過ぎる。下手をすれば強盗以上に異常な存在。

「はじめまして所有者様、あなたの『人形^{ドール}』です。こう名乗るのが儀礼的に正しいのかしら？」

「何を言っている」

「ああ、そういえばまだ何も言っていなかったわね。これからきちんと説明するから聞いておきなさい」

この訳のわからない状態の説明は望むところなのだが、現時点で信用出来るとは言えないこの少女に主導権を握られていいものか。

「あるところに人形職人がいました。彼は人間を作ることが夢でした」

僕が考えている間にも話は進む。

「彼は人形に意思を持たせることに成功しました。でも自立して動くだけでは人間じゃありません。人間を作るために必要なパーツを備えた人形、彼の研究は遂にそこまで辿り着きました」

意思を持ち人間からの干渉無しに自立する人形、魔術の一分野である自動人形^{オートマタ}。僕は仮にもオカルト研究会だ、その手の話には一般よりは詳しい。だからこそ、そんなものは幻想だと言い切れる。

だが、その人形が目の前にいる『これ』だとしたら。

「それが私達『人形^{ドール}』です。『人形』は人間の各パーツを一つずつ司っています。個別のパーツに対応した『人形』達はそれぞれ最高の部品を探しに旅立ちました」

部品、人間を一から作る素材ということか。なんだそれは、そんなものは例え完成したとしても人間じゃなくて化け物だ。

「まあ、こんな感じになるんだけど理解出来たかしら？」

物語を朗読するような口調から今までのものに戻る。

「君がその『人形』でいいのかな？」

「あら、思ったより順応早いのね。それとも実は何も考えてない？ 順応が早い訳でも、何も考えていない訳でも無い。この場を切り抜けるにはこの自称人形様の話に付き合うしかないから聞いているだけだ。」

「そんなことはいい、そんな君が」

「天」

突然台詞を遮られる。

「私の名前は天、君だとかなんだとか代名詞で呼ばれるのは気分が悪いわ」

「そんな天が僕に何の用なんだ？」

「さっきの話よ、私達『人形』はそもそも人間の部品を集める為に作られた。自分と適合する人間を探して、その人から人体のパーツを借り受ける」

「そのパーツを僕から奪うつもりか？当然却下だよ」

既に右目が無いのだ、これ以上体が欠けてたまるか。

「いいのよ、その作業はもう終わったから。私はしっかりあなたから貰ったわ」

「は？」

「さっき私は言ったわよね。あなたの右目がどうなっているか気にならないかって」

「まさか」

僕が失った目は右、そして天が眼帯を付けているのも右。

「そう、これはあなたの目。ありがたく使わせてもらってるわよ」

「趣味の悪い冗談っていうのは駄目かな？」

「駄目なんでしょうね」

言いながら天は眼帯を外す。間近で見れば精巧だが作り物である左目、そしてそれとは対照的に生氣に溢れた生物的な右目。

「あなたの目かは証明することが出来ないけど、これで信じる気になった？なんならここで全部脱いで体全体を見せてもいいけど」

「いや、別に、いいよ」

この天と名乗る少女、いや人形がどれだけおかしいかは理解した。そんなものに近くにいられても困るだけだ。今必要なのはこいつを追い出す方法を考えることのみ。

「で、僕の目くらいあげるから用が済んだならさっさと帰ってくれないか？」

「目くらいって、怒らないの？」

「両目が揃ってた時期があまりにも昔過ぎてね。その目が自分のものだって実感が湧かないんだよ」

その目に執着は無い。だから早く帰ってくれ、『人形』だかなんだか知らないけどそんな異分子が僕の生活に入り込むな。

「優しいのね。いや、変なのか。でも残念、説明はまだある」

「言ってみろ」

本当に気分が悪い、鬱になる。

「さつきから私は『人形』の所持者は体の一部を渡さなければならぬという話をしているわよね？」

「そうだね」

そして僕はその行程が終了していることも聞いた。

「でも、各『人形』が集めた人体のパーツを適当にくっつけて人間を作る訳ではないの。母体となる存在を決める必要がある」

どうやらその人形士というのは本格的な狂人のようだ。天の体に入っている目、あれをどうやって付けたのかは知らないが、人形をベースに人間のパーツを肉付けしていてもそれはまだ人形だろう。

「そこであなた達『人形』の持ち主が必要になる」

「僕は所持者なんかになつたつもりは無いんだけどな」

天の話は難解でまだ全てを理解しているとは言い難いが、確実に

何かよくないことに巻き込まれる。

「いいから話は最後まで聞きなさい」

おそらく聞いても僕の気持ちは変わらないだろう。

「所有者と『人形』のコンビによるバトルロワイヤル、これで母体を決める」

「今更こんなこと言っても無意味かもしれないけど、非現実的なのもいい加減にしてくれ。戦闘なんて馬鹿馬鹿しい、そんなものに誰が進んで参加するんだ」

「本当に今更ね。それに、参加者は結構いるのよ」

「平和と秩序を謡う現代にか？」

「ええ、もちろんタダで協力しろとは言わない、賞品がある」

「願いが叶うとかか？」

「こういう場合の王道だろう。」

「凄いわね、大正解。人間になった『人形』の所有者はなんでも一つ願いを叶えてもらえる」

「凄まじい胡散臭さだね」

「私もそう思うわ。ただ、一応理屈はあるみたいよ」

「どんな？」

理屈と言ってもどうせ科学的根拠が聞ける訳じゃないのだろうか
ら期待はしない。

「人形とは本来ごっこ遊びに使って遊ぶ物でしょ。ごっこ遊びって
いうのは自分の都合のいい世界で都合のいいストーリーを進行させ
る物、言ってしまうえば人形は世界創造、願望成就の道具なのよ」

「だから持ち主の願いを叶えるって？」

「ええ、人間として完成した『人形』は同時に完全な人形でもある
から」

悪い意味で期待以上、理屈じゃないとかそれ以前に一般人に理解
出来るものじゃない。頭の悪い中学生の妄想みたいに意味不明な設
定。

「次に」

「いや、もういいよ」

非日常はたくさんだ

「僕はそんなものには参加しない」

「あなたはいいかもしれないけど私はあなたと既に契約してるの、
勝手なこと言わないでくれるかしら」

明らかに勝手なのはそちらだろう。今なら怒っても文句は言われないはずだ。

「戦わなきゃいけないんだろ？そんな危険なものに参加する気は無い。契約した云々って言っても明らかに事後承諾だったじゃないか」
これだけ理論整然と説明すれば問題無いだろう。まあ今までの感じからいってこの天という人形には理屈なんて無意味かもしれないが。

「危険、確かに危険だわ。それを避けようとするあなたの姿勢は素晴らしいと思う。でもね、あなたは危険だからこそ参加するべきよ」

「君は一回理屈とか理論つてものをきちんと学ぶべきかもね」

大人びたというかあまり現代日本では聞かない言葉遣いだが、中は外見と同レベルくらいなのかもしれない。

「御任火音、いい娘よね。可愛いし、気も利く」

どうしてここで火音の名前が出て来る。おい神様、止める、止めるよ、火音を巻き込むなんて絶対に止めるよ。

「お前、それは脅迫か？」

「わかりやすく態度が変わるのね。でも違うわ、私が何かするんじゃないよ。あの娘が自分から戦場に入って来たの。何の準備も無いままに火事の現場に突入して助かる人間って、そんなにいないわよね」
「何が言いたい」

回りくどい例え話なんてやめろ。お前の話は長つたらしくて退屈なんだよ、要点纏めて話せ。

「あの娘も『人形』の所有者よ」

「そんな訳無い、火音に限ってそんな……」
火音に限ってそんなこと無いとでも？

兄のひいき目もあるのだろうが、火音は出来たやつだ。『人形』なんて異質な存在と関わったりはしていないと思う。

だが、万が一関わっていたとしたら、天の言うことが本当だとしたら火音の身に危険が及ぶ。

「何をさせたいんだ？」

「何のことかしら？」

「僕は何をすればいいんだ？」

やるしかないだろう。火音が火事の現場に突っ込んで行くというなら、僕が彼女に降りかかる火の粉を払う。

「何、簡単なことよ。私と一緒にいなさい。そうすれば敵は向こうから来るし、『人形』についても自ずとわかってくる」

「了解したよ」

「それじゃあ、以後よろしくね所有者様」

「ねえ、気になってるんだけどその所有者様って何？」

「あら、嫌？」

「僕には蒼って名前があるんだ。天じゃないけど所有者様なんて気分が悪い」

「私的には名前の読みが同じなのは気分が悪いのよね」
それはそちらの都合だろう。

「まあいいわ。よろしくね、蒼」

「よろしく」

本当に、どうしてこんなことになった、最悪だ。

第一部 序章、その二（後書き）

今回は説明多めです。こういうの嫌いな方はすいません。

そして作者は中二病です。作中で蒼君も言ってますが、中学生の妄想。YES、永遠の中学二年生の妄想ですので、御注意を。

ようやく序章が終わります。

まだ説明していない要素がありますが、ちよくちよくやっていきますね。

評価などいただければ作者が発狂しますのでお願いします。

第一部 一章、その一

天と出会ったその日の夜。

「たっだいまー！」

「お帰り、火音」

「遅くなっちゃってごめんね、お兄ちゃん」

「いや、問題無い」

「ここでご飯がもう出来ると評価高いよ」

「残念、僕に生活能力なんてものは無いよ」

「だよー、今から作るから待ってて」

「はいはい」

いつも通りの会話、おかしいところは何も無い。

階段を上り自分の部屋へ。

「蒼、前からわかってたけどあなたシスコンよね……」

「違います。そもそも天はなんで僕や火音についてもとから知ってたの？」

「自発的に契約した他の所有者と違ってあなたは巻き込まれただけ。何の材料も無しに説得出来るとは思えなかったから調べさせてもらったわ」

その結果火音が『人形』の所有者だとわかったのか。ならそれは僕にとつてもある意味僥倖。

「火音の体はぱつと見異常が無かったんだけど、所有者は体の一部をあげなきゃいけないんじゃないのか？」

「私達のケースが特殊なのよ。あなたは私に右目を完全に譲渡してるけど普通は共有でしかない、見た目に変化は起きないわ」

「共有っていうのがイマイチ理解出来ないんだけど」

「そうね、なんと言おうべきか。体の一部を共有しても人間には特に影響は無いわ。だけど『人形』は部分的とはいえ人間の体の力を行き出来るようになる」

「人間の体の力つて、たいしたこと出来ないだろ？」

「あのね、人間は神の模造品なのよ。自分達が理解してないだけでそのポテンシャルは計り知れないわ」

駄目だ、話がぶつ飛び過ぎていて限界間近。

「人間と体を共有した『人形』は共有した部位に合わせた異能を得る」

「それで戦うのか？」

母体となる『人形』を決める戦いに異能、ここまで来ればそれくらいしか選択肢が無いだろう。

「いえ、戦うのは基本的に所有者よ」

「異能は飾りか？」

核兵器じゃないんだからあるものは使え。

「この戦い、『遊戯』と呼ばれているんだけどね」

名称なんて大事なことをそんな思い出したように言わないでほしかった。

「『人形』が破壊されるとそこで失格なのよ」

まあその遊戯の目的が『人形』の中でも最高の一体を選別することが目的なら当然だろう。

「だから『人形』の異能も身を守るものが多い」

だからこそ人間が戦えつてことか。

「『人形』が破壊されると所有者にもペナルティーがあるの。『人形』と共有していた部位がなくなる」

「は？」

人間のパーツがなくなる。それがどれだけ不味いことが、わからない訳無い。

「『人形』は倒した『人形』の所有者の体のパーツを得て身体を作り替えていく。ほら、つまり最後に残った『人形』は人間になるわよね」

「なんだよ、それ」

人間になる為のバトルロワイヤル。勝者への景品は人体。

「でもよかつたじゃない、蒼はもう右目を完全に私に渡してるんだから影響無いわよ」

違う、そうじゃない。僕が遊戯に参加したのは自分の為じゃない。天、なんとか近くの『人形』を探せないか？」

「ちよつと、なんでそんなにやる気満々なのよ」

「もし火音が襲われでもしたら困るからだよ」

「落ち着きなさい、その火音が敵に回る可能性もあるのよ。その場合あなたは彼女の身を守りつつ彼女を殺さない程度に退けなければいけない」

確かにそうだ、まだ他の『人形』は見たことがないけど強敵であることが十分に予想される。

「君はいいのか」

「どういう思考を辿った結果その質問に到ったのか聞きたいわね」

「僕は火音を守る。だけどそれだと火音が『人形』と共有した部位と火音が他の『人形』から奪った部位が手に入らなくて天の目的とは合わないけど」

「別に私は人間に成りたいなんて思わないわ。私も蒼も遊戯本来の目的とはそぐわない目的を持っている、ピツタリの組み合わせじゃない」

「まあ、そうかもね」

天が火音を倒す気が無いというなら好都合。しかしそれなら天は何故所有者を欲していたのか。聞いてもいいが何となくはぐらかされそうだ。

「そういえば最初の質問はどうするのさどうやって敵を見つける？」

「それには答えたはずよ。落ち着いて、下手な動きをするのが一番不味いわ」

「そうは言っても…」

そんな受け身の姿勢で大丈夫なのか？

「お兄ちゃん、ご飯だよ。ごーはーん」

僕の不吉な思考を遮るように火音の声が響く。

「ほら、蒼の大好きな妹さんが呼んでるわよ。さっさと行ってきなさい、お兄ちゃん」

「だから僕はシスコンじゃない」

天のせいで僕の中で高まっていた緊張感が無くなってしまった。

「あー…」

翌日の教室、まだ朝早い教室には僕と圭吾が揃っていた。

「ん、どうした蒼お疲れか？」

「眠れなくてね」

火音と夕飯を食べて部屋に戻るとを天が僕のベッドで寝ていたので僕は床で寝るはめになった。しかも朝は朝で起きて来ないし、聞きたいことがまだ大量にあるのに何も聞けなかった。

「そうか、遂に蒼にも春が来たか」

「はい？」

いつもと変わらない爽やかスマイルでこいつは一体何を言っているのだろう。

「ん、そういう意味じゃないの？」

「違います」

「そうか、残念。だとするとあれか、昨日言ってた課題か？」

「あ…」

しまった、全くやってない。天の登場とかいう異常事態のせいで頭から抜け落ちていた。

「もしかして、やってないのか？」

「うん…」

「昨日はそれをする為に早く帰ったのに？」

「それ以上言わないでくれ…」

「いや、いいけどさ。どうする、提出日今日だぞ」

「やるしかない、やる、やらないと」

「修羅場か、なら俺は邪魔だな。頑張れよ」

そう、頑張った。僕は頑張ったんだけど。

「間に合わなかったんだよね」

「それを何故私に言うのかしら？」

「嫌味って言葉の意味わかる？」

「馬鹿馬鹿しい、そんなものやらなかったあなたが悪いんじゃない。私には関係無いわ」

まあたしかにただの八つ当たりなのだが。

「でも、天がいたから床で寝たのは事実だよ」

「客人にはきちんとしたもてなしをするべきよ」

「さいですか…」

客人も何も半ば以上に居候なのだがどうでもいいことか。

「全く使えないわね。いいわ、私が床で寝るから」

「いや、それは別にいいよ」

「たまにいるわよね、散々文句言っておきながら別にいいとか言うウザいのが」

「すみませんでした」

身に覚えがありまくる。

「まあでも、実際問題大丈夫だよ布団もあるし」

「昨日それをつかわなかった点は評価してあげてもいいわよ」

凄い。壮絶なまでの嫌味だ。

「昨日は火音がいたからしかたなかったんだよ。今日はもう布団を運びこんだから大丈夫」

さすがの火音も来客用の布団の数まで常時把握している訳では無いだろう。

「ふうん、まあバレなきゃいいけど。それで、聞きたいことがあるんでしょ」

「何が？」

「だから私にまだ質問したいことがあったんでしょ」

「ああ、それならもういいや」

「どうして？」

「天の言うように落ち着いてみようかなって」

昨日今日と火音と話してみte思った。まだ火音が所有者である明確な証拠がある訳でも無い、僕は焦り過ぎた。日常を大切にすあまりそれを壊してしまつては本末転倒だろう。

「そう、まあ私としても蒼が無意味に気合入っているのは望ましくないからちようどいいわ」

「そういえば、今日僕がいない間何してたんだ？」

話題が終わつたとみて新たな話題を提供する。

「ただ暇だっただけよ」

「ああ、それは悪かった」

だが、天が時間潰せそうなのは我が家には無い。そこは我慢してもらうしかないだろう。

「まったく、私が一人である間に襲われでもしたらどうするの？」

「それは考えてなかった」

「実はあなたつて馬鹿でしょ」

「襲われたら父の部屋にでも隠れたら？」

人形がいつぱいあつて天が隠れるのにはむいているはずだ。

「随分と投げやりね。まあいいわ、私にもちよつとした案があるし」

ここで僕はこの言葉にもう少し注目するべきだったのだ。創作と現実をごっちゃにしたりはしないが今は異常事態とも言つべきことが起こっている。ならば創作物の主人公たちがこういう場合どういう災難に見舞われているかを、もっとよく思い出しておくべきだったのだ。

第一部 一章、その一（後書き）

今回もぐだぐだしてます、作者が読んでも非常に微妙でした。シリアスなシーンにしる、日常のシーンにしる上手に書ける人が羨ましい今日この頃です。

第一部 一章、その二

漢文はいい、外国語を日本語に直して読もうという発想が素晴らしい。

故に、僕は眠さを押し殺して授業を真面目に聞いている。この眠気は次の英語の時間に全力で解放する予定だ。

「はい、授業終わり。礼はしなくていいから」

天と出会ってから二日目、何も起きないまま時間が経過している。天と出会ってから変化したことといえば僕の寝る場所が布団になったことくらいだろう。

授業が終わり、することも無いまま窓の外を見る。

「怠い」

非日常に憧れているなんてことはないのも何も起きないのは喜ぶべきことなのだが、何かあると言われて身構えているのに何も無いのは予想以上に気持ち悪い。なんと言えはいいのか、苛々する。

「眠そうだね、蒼」

「圭吾か、実際に眠いから」

「眠くはないけど僕は暇だよ。何か起きれば少しは楽しいんだけど」
だらけた空気を引き裂くように甲高い機械音が鳴る。

「初期設定のままって、味気無いな」

「わかりやすくていいんだよ」

「というか電話、出なくていいの」

「そうだった」

滅多に使用しない通話機能、表示されている番号は白神宮淡雪。

「なんでしよう、淡雪先輩」

「御任君、大事な話があるの。少し部室に来てくれる？」

「別にいいですけど、少し待っててください」

電話を切ると同時に立ち上がる。次の授業まで後五分、こんな時間に呼び出されるとは思ってたなかった。

「誰だった？」

「淡雪先輩」

「ああ、オカルト研の」

「じゃあちよっど行ってくる」

「時間間に合うのか？」

「無理かも」

「教師には？」

「下痢だと伝えて」

流れるような会話。知り合ってから一年経ってないがこういう時は素直にありがたい。

部室棟の三階にオカルト研の部室はある。部室棟に行くには一旦建物から出なくてはいけないので移動には不便だ。

「すいません、少し遅れました」

「大丈夫だよ御任君、むしろ予想通り」

「呼び出してから二分強、いや三分弱かしら。遅いわよ、蒼」

先輩の言葉に重なるように、最近聞く機会が多い生意気そうな声が発せられる。

「そ、天？」

「他に誰が？」

天と話しても時間がかかりそうだったので質問対象を先輩に変更する。

「なんで先輩が天を？」

「拾った」

そういえばこの人も不思議な人だった。

「もう少し、細部をお願いします」

「私が校内をうろろしてたら拾った」

「先輩って、二年生ですよね」

「そうだね」

受験生じゃないから死ぬ気でやれとは言わないが少しは真面目に

授業を受けるべきだと思う。

「お母さんみたいなこと言わないで」

いや、言ってます。

「予想出来る」

「そうですか。いや、そんなこといいんで拾ったってどういことですか？」

「だから私が校内を探検してたら拾ったの。君を探してるっていうから呼び出した」

「なるほど」

「感謝は？」

「何のことですか？」

「拾ってあげたことへの」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます淡雪様って言ってみて」

「ありがとうございます淡雪様」

「快感」

この人ただの変態だろ。

「でも実際、校内にこんな小さい女の子がいたからびっくりした」

「まあ、そうでしょうね」

天はこういう場所に溶け込むには些か以上に目立ち過ぎる。

「この娘は何なの、御任君は遂に妹だけじゃ飽き足りずリアル幼女に手を出したの？」

「基本的に皆の僕への視線ってそんな感じなんです…」

シスコンだとかロリコンだとか不名誉にも程がある。

「きっとそんなオーラを出しているんでしょうね」

「出してません。天は僕の親戚です」

本当のことを言う訳にもいかないので出任せを言うしかない。

「そうなの」

「そうなんです」

さてだいたい何があったかは把握した、残るは天だ。

「なんで来た」

しかも一日目じゃなくて出会ってから二日目に来るか、不意打ち
気味で予想出来なかった。

「お腹が空いたのよ」

「は？」

「だから、お腹が空いたの」

人形って腹減るのか。

「こんな可愛い娘にご飯をあげないなんて、そういうプレイ？」

「一回ロリコンから離れてみませんか？」

「だって、ゴスロリっていうんだっけ？こんなフリフリのドレスを
着させているうえに自分とお揃いの眼帯まで装着させているなんて
私は後輩の将来が心配です」

僕はそっち方向にしか考えられないあなたが心配です。

まあ言われてみれば天の黒を基調としたドレスはあまり見掛けな
い物だし、顔の眼帯も必要以上に目立ってはいる。

「これは私の趣味よ。目のことは、私も右目が弱い」

予想しなかった方向からのフォロ―。

「そうなの、いろいろ言っでごめんなさいね」

「別にいいわ。それより蒼、私はお腹が空いたと言っているのだけ
ど」

「はあ、わかったよ。何か食べたいってことね。そんなに我慢出来
ないなら今から行く？」

「ありがたいことね」

まったく、迷惑だ。そもそも何か食べられるんならそう言ってく
ればいいのに家にいる時はそんなこと一言も言わないし。突然学
校に来られて言われても困る。

「御任君、もう授業は始まってるけど荷物はどうするの？」

「あー、体調悪いって言っただけで早退します。すぐに戻るから天はここ
で待ってる」

「わかったわ」

笑顔で言われるとまあ可愛いかななんて思うのだが、普段のあれを思い出すとやはり嫌になる。

圭吾のサポートもあり早退に成功した僕は天を連れて街中を歩いてた。

「で、何が食べたいの？」

「そうね、何か甘い物が」

「甘い物、ね」

そんなんで腹が満たされるかは微妙だと思うが、本人が食べたいならしかたないだろう。

近所で人気のケーキ屋に行く。放課後は学生とかで結構混むのだが、今の時間はまだ空いているようだ。

「ご注文は何にいたしますか？」

他のテーブルの掃除をしていたウエイトレスが営業スマイルの見た本のような笑顔で聞いてくる。

「僕はいいけど天は決まった？」

「少し、考えさせて」

いつものように落ち着いて口調だが、反面その目は結構な度合いで輝いている。いつも生意気で無愛想、さらには小難しいことを言っているため可愛いげがないというか変に大人びている天だが、こうしているとなだの年相応の純粋な女の子にしか見えない。

「まだ悩んでいるなら、ここはチーズケーキが上手い。その系統の味がよっぽど嫌いじゃない限りハズレだとは感じないと思う」

「そう、ならそれにするわ」

「ならチーズケーキ二つに紅茶が二つで」

「はい、かしこまりました」

接客態度のよさもこの店の長所の一つだろう。

「それにしても意外ね」

「何が？」

「蒼がこういう店に詳しいのが」

「詳しいというか、火音が好きだからよく一緒に来てるしね。僕もどちらかといえば甘党だし。まあ、ここは有名な店だから、ミィハ―なだけだよ」

「ふうん」

「そういえば、天」

納得したのか、店内に視線を巡らせている天の注意をこちらに戻す。

「何かしら？」

「『人形』って食事が出来たの？」

「一応ね、人間目指して作られたのが私達『人形』だし」

言われてみれば天は睡眠も取っていたし、食事が出来てもおかしくはない。それにしても相変わらず不思議存在過ぎて定義やスペックの把握が難しい。

「『人形』ってさ所有者と体のパーツを共有したり、相手のパーツを奪ったりするんだよね？」

「そうね」

「なのに消化器を持ってない『人形』でも食事って出来るんだ」

「出来るわ。例えば私の右目はあなたのものだからもちろん見えるけど、左目も普通に見えるの」

確かに、右目を眼帯で隠している天が行動するにはそうではなくてはならないだろう。

「つまり私達の体は人間のものにしなくてもその機能は持っているよ。例えるなら私達の体は義手みたいなもの、人間のものではないけど機能はある」

「なるほどね」

わかったようなわからないような微妙な感じだが、たぶんわかったはずだ。

「ならば、食事が出るなら排泄も可能？」

「純粹な疑問、別に他意は無かったのだが。」

「な、な、な、何を言っているの！信じられない、少しはエチケット

トとかデリカシーを持ちなさいよ」

「いや、あ、ごめん」

たしかに今のは明らかにアウトだった。天が人形だとはいつても、人間と変わらない思考をしているならそこら辺はしつかりと気を遣うべきだろう。

「はあ、本当に失礼な男」

妙な沈黙が流れる。今だけは店内の静かな雰囲気は恨めしい。

「出来ないわよ」

「え？」

「だから排泄は出来ないと言っているの。美観の問題かは知らないけど、少なくとも私は出来ないわ」

早口でまくし立てる。そんなに恥ずかしかったなら言わなくてもよかったのと思うのは失礼なのだろうか？

「はあ」

沈黙、再臨。僕がなんとか会話を始めるきっかけを探していると「お待たせしました。紅茶とチーズケーキになります」

「あ、はい」

ありがとう、店員。僕の中でこの店への好感度が一段と上昇した。「なるほど、たしかに美味しそうね」

「事実、美味しい」

会話も自然と生まれ、あの状況をなんとか乗り切ることが出来たようだ。

会話もそこそこに二人して食べ始める。天なんて小さな口が内側から軽く膨らむ程詰め込んでいる。行儀の悪い食べ方なのだろうが、今まで見たこと無いような笑顔で食べている天を見ると注意する気が起きない。

「ふう、ごちそうさま」

「ごちそうさま」

「凄い、美味しかったわ」

「だね」

二人して余韻に浸る。

「お腹空いたって言ってたけど、足りた？」

「え、あの、いや」

珍しく口籠る天。

「すみません、追加で注文お願いします」

「かしこまりました」

「いや、だから」

「もっと食べたいんだろ」

「それは…」

「お金なら気にしなくていいから。ほら、また好きなもの頼んで

「ええ、わかったわ」

結局、悩み抜いた末に天はまたチーズケーキを注文した。

「相当気に入ったんだね」

「五月蠅いわね、別にいいじゃない」

「悪いとは言っていないさ。それにしてもそんなになるまでなんで我慢してたのさ。食事が出来るって言うてくれれば何か用意したのに」

「人間みたいに生きるうえで必要な訳じゃないから普段は食事はしなくても大丈夫なの。ただ、突然物凄くお腹が空くのよ」

「なるほどねえ」

それは下手すると人間より不便だろう。人形士だったか、『人形』の制作者は猛烈に悪趣味だと感じることもある。

「なら、今はいっぱい食べちゃってください」

先程と比べてかなり短い時間で注文したものが来る。

「ええ、そうさせていたたくわ」

天や火音を見ていると思うのだが、やはり小さな女の子は笑っているのが一番だ。

店から出て家に向かう。

「ねえ、蒼」

「何？」

「今日は、突然押しかけて迷惑だったかしら？」

「まあ、最初はそう思ったけどね」

「そう…」

視線を下に向ける天。

「ただ、楽しかったよ」

「え？」

「授業受けてるのよりはよっぽど楽しかった。また今度来ようか」

「そうね、うん、そうしましょう」

平和な一時、非日常的な存在である天が僕の中で日常に成りつつあるの感じていた。

第一部 一章、その二（後書き）

シリアスまだー？

はい、そんな訳で今回も日常ですよー

早く戦闘とか中二展開にしたいんですが、いかんせん執筆速度が、
ね。

それではまた次回お会いできれば、お願いしますー

第一部 一章、その三

「お邪魔するわ」

「自分が邪魔になつてゐるつて全く思つてないよね」

「ええ、そうね」

「別にいい、天ちゃん用のお茶菓子の代金は御任君持ちだし」

「お茶菓子なんて出してないじゃないですか…」

あるのは市販の微妙な茶葉だけだ。

あれ以来、天は気が向いたらオカルト研にやって来るようになってしまった。

「天ちゃん、小さい頃からこんな場所に慣れるといいこと無いよ」

「こんな場所というか、私はこの部屋であなた達以外を見たことが無いのだけど」

「ここは私と御任君の愛の巣だもの、しかたないよ」

「違います、愛の巣っていうより魔物の巣窟です」

オカルト研に入るような人間はだいたいが変人だ。そもそも僕と先輩がいつ愛を育んだ。

「いつも天ちゃんが来るのは昼休みとか授業中だから、部員はいなくてもおかしくない」

「今日は放課後に来たのだけど？」

放課後なんて言葉を天が知っていることが驚きだ。そういえば天は普通に会話しているがどこで言葉を学んだのだろうか？

「今日はあれ、皆事件の調査」

「事件？」

「連続腕切り魔」

「何よ、それ」

「何ですか、それ」

今まで半ば以上に聞き流していた二人の会話に聞き捨てならない単語が混じる。

「天ちゃんはともかく御任君が知らないのはおかしいと思う」

「腕切り魔は知ってますよ。そうじゃなくて、なんでそんな危ないものの調査をしてるんですか」

連続腕切り事件、被害者の腕を持ち去る連続殺人事件。

そんな猟奇殺人に関わるなんて、オカルト研はいつから探偵業務も引き受けるようになったんだ。

「私もグロいの嫌いだから反対したんだけど、出雲君がね」

「出雲か」

あの問題児ならしかたない。

「何か腕の切断面に特徴があつてそれにオカルト的要素があるかららしいけど」

「特徴？」

儀式殺人みたいなものだろうか？

「私はあんまり聞いてなかったからうる覚えだけど、人間の腕をあんなに綺麗に切れる程鋭利な刃物なんてこの世に存在しないのかなとか」

「はあ、じゃああれですか出雲はその綺麗過ぎる断面は幽霊やら妖怪やらのせいだと？」

「つて言つてたけど、たぶん事件に興味があるだけなんだと思う」

「まあ、出雲らしいと言えればいいですけどね」

所詮学生のお遊びだし事件の核心に迫ることも無いだろう、好きにやらせて問題無いか。

「淡雪、少しいいかしら？」

今まで黙つてた天が唐突に口を開く。

「ん？」

「その腕切り魔の被害者の死因つてわかる？」

「なんでそんなこと？」

「ちよつとね」

興味があるらしいが何が天の琴線に触れたのかわからない。

「死因はわからないけど、腕を切られたのは死後だつて出雲君は言

つてた気がする」

「そう、ありがとう」

「興味あるみたいだけど、天ちゃんみたいなのが関わるのはあまりオススメしないよ？」

「心遣いありがとう。でも大丈夫よ、私には蒼がいるから」

「御任君じゃ、無理だと思うけど」

「違うないわね」

「守れる自信は無いですけどそうはつきり言われると凹みます」

僕は決して自己評価が高い方ではないが他人から言われるの自分分と思うのでは随分と違う。

「妥当よ」

「妥当だと思う」

「すいませんでしたね」

あなた方は僕に恨みでもあるんですか。

「閑話及第よ、蒼。外に出るわ、連続腕切り魔について調べる」

「はいはい、仰せのままに」

「予想以上に御任君の奴隷っぷりも板に付いてきたね」

「死にたくなるのでその点についてはノーコメントです」

「ふうん、まあ何か調べるなら頑張つて」

「善処します」

「天、急にどうしたんだ？今のは淡雪先輩もさすがに不審に思っただろ」

猟奇的な殺人事件にいきなり興味を示し、僕を連れ出して調査をする。普通に考えて意味不明な行動だ。

「人間の腕をあんなに綺麗に切れる程鋭利な刃物なんてこの世に存在しない」

「淡雪先輩の言葉だけど、それがどうかした？」

「普通の人間が把握する世界なんて狭いものよね。その出雲とかいう人間の世界には存在しなくても私達の世界には存在しているもの

がある」

「『人形』か」

たしかにそれならなんでもありだろう。

「どうやったのかは知らないけど、その可能性は非常に高いわ」

「だからって無理矢理だったことに変わりはないと思うけど」

「大丈夫よ、淡雪は変わった人だから」

「それを言っちゃいますか…」

たしかに、いつも眠そうにしている淡雪先輩は不思議系と言って問題無いが、もう少しオブラートとか濁せるお茶とかいろいろ用意するべきだろ。

「まあいいや、『人形』がいるなら好都合」

今まで何も起きなかつたから逆に心配になっていたところだ。

「人死に出てるなら全力で止める。天、まずはどうするの？」

『人形』の探し方なんてわからない、これは僕にとっての初戦となる重要な戦いだ。

「わからないわ」

「はい？」

「わからないと言っているの」

「それで探すからついて来いとか言ったの？」

「ええ」

最悪、警察が見つけない殺人犯を探すなんて普通の高校生には無理だ。

「どうするのさ？」

「腕なんて集めてどうするのか知らないけど、『人形』なんだから基本は他の『人形』を狙うはずよ。辺りを探し回るしか無いわ」

「マジか…」

しかたがないとは思っけど、面倒だ。

「何よ、文句あるの？」

「いや、いいよ」

今日は遅くなる、火音にそう連絡しようと思っ携帯を取り出すのとは

ぼ同タイミングで着信。

電話相手は以前のように淡雪先輩。

「もしもし、御任君」

「何ですか？」

「結局、腕切り魔について調べてるの？」

「そうなりますね」

「ちっちゃい子の我が儘を聞かなきゃいけないなんてロリコンも大変な職業だよな」

「いい加減にそこから離れませんか？」

同じギャグを繰り返すのはよくない。

「このネタは御任君をからかいやすいからまだ使う。そんなことより、調べるのは止めた方がいいかもしれない」

「占いですか、今度はどっちですか？」

先輩の予感僕と天の出会いもきちんとしてる。『人形』絡みの今回の件も有効な結果を出す可能性は高い。

「ねえ、前から思ってたけどその質問は凄い失礼」

「だって普通に占うと全然当たらないじゃないですか」

「それはまだ私に合う占いが見付かってないだけ、私はやればできる子」

「その台詞出てる時点で既に駄目です」

やることも才能の一つなんだからやらないのは才能が無いということだ。

「御任君には言われたくない」

「はいはい、そうですね。それで、占いですか予感ですか？」

「御任君なんて、嫌い」

「拗ねないでください、今度何か奢りますから」

「財布の中身全部搾り取る」

「恐いですよ……」

ただでさえ時折空腹になる天のせいで金欠気味なのだ、必要以上に出費が高むのはいただけくない。

「本当に御任君は失礼」

「天にもよく言われます」

「開き直らないで」

事実を報告しただけなのだが。

「今回も予感、ただし前回よりも克明。というか予知夢」

「そんなもんまで見るんですね…」

予知夢が見れるなら普通に占って当たらないなんて無問題だろう。というか部室で寝るな。

「腕切り魔に御任君が関わった場合起きること、危険な目に合う、探し物が見付かる」

探し物とは天以外の『人形』のことだろうか？

「そして、親しい人との決別」

「っ！」

親しい人、火音が、火音のことなのか。いや、火音であるとは限らない。僕と親しい人、僕の日常を構成する要素の一つが欠けてしまふ。

「先輩の予知って、変えれますか？」

「未来は変わる。そもそも未来を知らない状態で迎えるの未来と、未来を知っている状態で迎える未来が同じになる訳が無い」

先輩にしは珍しい、力強い言葉。

「そうですね」

予知された未来を回避出来るというならば。

「他に予知は何か出ませんでしたか？」

虎穴に入らんずば虎兇を得ず、最高の結果を得つつ最悪の結果は回避する。そのためにあえて死地へ。

「妙にやる気だね、御任君」

「いろいろ事情があります」

「そう、これは教えないようにと思ってたんだけど、黒瀬最下層地
区ってわかる？」

「わかりますよ」

この街、黒瀬市に存在する荒廃した地区の通称。廃ビルが建ち並ぶこの地区は不良達のたまり場となっている。

「あそこにある第八ビルに行ってみて」

「何かあるんですか？」

「何かあるかはわからないけど何かある」

なるほど、行ってみる価値はありそうだ。

「住所とかは自分で調べてね」

「わかってますよ」

「それじゃあ、頑張ってるねロリコンさん」

「本当にそれ止めませんか？」

「う……」

携帯で住所を調べ第八ビルに向かった僕らを待っていたのは鉄と湿った臓物の臭い、そして腕の無い死体だった。

「情けないわね、この程度で気分が悪くなるなんて」

「生憎、平和ボケした現代日本人なもんでね。それに、そう言う天こそ駄目なんじゃないの？」

「私は慣れてるから」

慣れてる、遊戯とかいう『人形』同士の戦いでは珍しくもないことなのか、それともこんなのが日常茶飯事だった時代から存在しているのか。どちらにせよ気分のいい話ではない。

「まあ、淡雪先輩の予知は当たりだった訳だ。『人形』はいないみたいだけどね」

「そうね」

「そんなに『人形』に会いたいなら、会わせてやるよ」

響く第三者の声。向いた先にいたのは赤い髪の少女。

「やっぱり、お前達が犯人か。火音が嫌だって言うから今までは手を出さなかったけど、今日は許さない。ここで死ぬ！」

遊戯、開幕。

第一部 一章、その三（後書き）

昨日上げる予定だったけど間に合わなかった部分です。

ようやくシリアスモード突入。

出雲君は名前だけでしばらくは出てこない予定です。

あと、淡雪先輩が便利すぎるwww

今はただのチーと機能みたいになってますが、いつかちゃんと説明するはずなので御了承を。

作者の実力不足のためここら辺から無理矢理になっているところが増えてきますが、頑張りますので、出来れば今後も読んでいただけると嬉しいです。

第一部 一章、その四

その一撃を避けられたのは奇跡としか言いようが無い。

「なっ、速っ！」

残像が見える速さなんて、冗談じゃない。

漫画などでは速さの例えに風が使われるが、実際に見た異様な速度の持ち主はまさに風だった。敵意を持ってこちらを襲う様は破壊をもたらす暴風。

「天、伏せる！」

間一髪、天の頭上を敵が通過していく。

「赤は三倍速いつてことか？ふざけないでほしいよ」

いくらもとの質量が軽くても速度が異常ならダメージも大きい。

あんなの相手に生身の僕がどう戦えばいいんだ。

狭い室内というのもいけない、相手が壁を蹴って跳ね回るせいで攻撃が多角的になる。

分析とはいえ、戦闘中の無駄な思考は命取りだ。

気が付けば、相手がこちら目掛けて突っ込んで来ていた。

「『複写』、壁」

轟音、突如目の前にできた壁に相手が激突したようだ。

「これをやったのって、天？」

「そうよ」

「どうやったんだよ、こんなの」

「いろいろ聞きたいことはあるでしょうけど、今はこの敵を倒すのが先よ。『複写』クレイモア」

作り出されるのは両刃の大剣。鏢は刃に向かって反り返り、先端には飾りの輪がついている。

「これを使いなさい」

「いや、こんなの持てないよ」

「さっきも言ったでしょ、説明は後ですから今は戦いなさい」

「ああ、もう」

剣を手に取りつつ叫ぶ。理不尽な現象には慣れたつもりだっけど、ここまで訳わからないと本当に苛々する。

「相手の動きをよく見なさい、今のあなたなら少しは追えるはずよ」
再び部屋の中に風が吹き荒れる。壁にぶつかって自滅というのが一番楽だったのだが、そう上手く事は運ばないようだ。

天の言葉通り、相手の動きが少しずつ見えてくる。速いことに変わりはないが、目視できないレベルではない。

「呼吸を整えて、剣を構えて、タイミングを合わせる」

天に言われたことを反芻する。

「今！」

野球でバットを振るように、飛び込んできた『人形』に剣を振る。技術も何も無い武器の使い方だが、タイミングはぴったりのはず。

しかし、

「本当に、なんでもありか」

赤髪の『人形』は空気を蹴って無理矢理方向を変えていた。

「お前、『右目の人形』みぎめのドールだな」

「そうね」

睨み合う天ともう一人の『人形』。

「今日はこれまでにしといてやる」

「それは雑魚の台詞よ？」

「こら、天」

純粋な戦闘力が高いのはあちらだ。それが退いてくれると言っているのに挑発してどうする。

「うるさい、お前らみたいな奴らは許さないからな！」

風切り音と捨て台詞を残して飛び去って行く『人形』。

「はあ、終わった」

ヤバイ、緊張が抜けたら疲れがどつと来た。

「お疲れ様、初戦にしてはなかなかよかったわよ」

「何処がだよ」

あの『人形』加速が能力なのかは知らないが、動きに全く付いていけなかった。

「まあたしかにボロ負けだったわね。でも、私がよかったと言っているのはあなたの力への親和具合よ」

「力？」

頼むからこれ以上謎単語を増やさないでくれ。

「まあ順を追って説明するわね。まず一つ目、私が壁や剣を作った能力だけ」

「複写って言ってたやつか？」

そんな感じの言葉を呟いていた気がする。

「話を遮らないで」

「すいませんね」

「あれが私、『右目の人形』の異能『複写』よ」

何も無いところに何かを生み出す、たしかに凄いだろっが目は関係無いのではないか？

「自分が過去に見たことのあるものを作り出す能力」
なるほど、それで右目の異能か。

「なあ、ということは天はあの剣も見たことがあるのか？」

「ええ、あるわよ」

クレイモア、それを見たことがあるってことは少なくとも半世紀以上は生きていることになる。

「凄いな」

「褒めても何も出ないわよ」

天の能力を褒めている訳ではないのだが。

「次、『人形』と契約することによる所有者への影響について」

「ああ、それは聞こうと思ってた」

身体能力は平均以下の僕が、途中からやたら僕の視力がよくなったり、あんな重いはずの剣を軽々と扱ったりしていたのだから何かあるはずだ。

「前に『遊戯』^{ゲーム}では主に『人形』じゃなくて所有者が戦闘を行うっ

て話はしたわよね」

「そうだね」

「つまり所有者は『人形』の主でもあると同時に『人形』を守る騎士でもあるの」

僕が天を守る騎士、キャラに合わなさ過ぎて気持ち悪い。

「その為に所有者には二つの影響が表れる。一つは身体能力の向上、そしてもう一つは所有者の願いを元にした異能を得ること」

「僕も二つ質問いいかな。僕はさっき所有者になってから初めて自分の体の動きのおかしさに気が付いた。ついでに、完全な『人形』じゃないと願いは叶えられないんじゃないの？」

天と会ってからしばらく経ったが、自分がそんな人外のスペックになっていた実感は無い。

「もつともな疑問ね」

「そりやどうも」

「褒めてないわよ」

「さいですか」

「身体能力の向上は契約してから少しずつ進んでいくのだけど」

「ん、僕と天はかなり前から契約していたんじゃないの？」

「なし崩し的に契約を結ぶのが嫌だったから蒼からきちんと同意が得られるまでは契約してなかったわ」

「そうなのか」

あの時は強引だと感じたが、意外とそこら辺は真面目なのかもしれない。

「それで少しずつ能力を上げて所有者を慣らしていくところを危なかつたから一気に解放したの。初戦にしては上々というのはそういう意味よ」

「なるほどね」

試しに近くの柱を殴りつけてみる。ベキョっという嫌な音と共にコンクリートの柱が陥没した。

「これは、ちょっと恐いな」

普段生活する時には気を付けなくてはならないだろう。

「もう一つの質問に答えるわね。所有者の願いが叶うのではなくて、願いを元にした能力が使えるようになるのよ」

「微妙な違いだね。ていうかそんな焦らすみたいなの…」

「こんな馬鹿みたいな戦いに参加してまで叶えたい願い、それが中途半端に叶うなんて本人からしてみれば苦痛でしかないだろう。」

「どうしようもないわ、そういうものなんだから」

「まあ、それもそうかもね。それで、その能力はどうやって使うの？」

「知らないわよ」

「え？」

「だから知らない」

「それならどうやってあの『人形』に勝つんだよ…」

「さっきの感じでは普通に戦ったら勝ち目が無さそうなので自分の能力に期待していたのだが。」

「体でも鍛えたら？」

「人事みたいに言わないでくれるかな」

「私がおか言つてどうこうなる問題でも無いでしょ」

「まあそうなんだけどさ」

あの『人形』の他にも所有者がいる。攻略方法を考えなくてはいけないだろう。

「まあいい、なるようになるさ」

「意外に楽観的なのね」

「というより話が理解出来る範囲を超えてて真面目に考える気が失せた」

「まあ、それも才能のうちなのかしら？」

「やっぱり、お兄ちゃんが…」

「火音、あんなやつ殺しちゃうのが一番だよ」

「でも…」

「火音が嫌なら私だけでやる。大丈夫、あいつら弱っちかったもん」

「駄目っ、お兄ちゃんのこと私がケリをつけるから」

「火音がそう言うなら…」

自分を変えたいと願った少女、彼女の選択は最悪のすれ違いを生んでしまった。そのズレをどう処理するのか、頑張りたまえよ少年。私は君に期待しているんだ。自分の願いを貫き通すことが重要、面白い遊戯を見せてくれ。

第一部 一章、その四（後書き）

今回は本当に酷いです。

ただ、設定の説明は今回でほぼ終わりなのでだんだんすつきりしてくるはずですよ。

本当にかんばりますので、どうか温かい目で見守ってください。

MINAMIGAWAという名前でツイッターしてしますので、興味のある方はどうぞ〜

第一部 二章、その一

「先輩、何してるんですか？」

「静かに」

「はあ」

放課後、いつものように部室に向かうと知らない少女と先輩が向き合って座っていた。

「蒼、お帰りなさい」

「別に帰宅した訳じゃないんだけどね」

「あなたが私をほぼ一日中こんな場所に閉じ込めていたせいで私にとってはここが家みたいなものよ」

別の『人形』が現れた今、僕と天がバラけて行動するのは危険だ。だから天は朝からずっとオカルト研の部室にいてもらっている。さすがに教室に連れていく訳にはいかないがせめて同じ学校内においてほしい。

「なるほどね、彼氏が唐突に別れを切り出してきたと」

淡雪先輩の方から聞いてはいけない発言が聞こえた気がする。

「あの、すいません。だから何やってるんですか？」

新入部員と話していたにしては空気が重い。

「性犯罪者のロリコンペド野郎は黙ってて」

「ちよっとずつ罵倒の内容が酷くなっていますよね」

「読者は新鮮な悪罵を求めているから」

「毎回似た内容なので新鮮味は無いと思いますが」

「私は彼女の相談にのっていたの」

「唐突に話戻しましたね」

会話進行のテンポがいいのは喜ばしいことだが、今のは一瞬付いていけなかった。

「初めまして、小賀浦祈咲こがうらのほのかです」

「御任蒼です、宜しく願います」

礼儀正しい人、こんなことを言っただけでは失礼だがオカルト研に相談を持ち掛けるタイプには見えない。

「相談つて、どうしてうちに？」

「祈咲、これでも部員だから話してみたら？」

「簡単に言つと彼氏に別れを切り出されたんです…」

「重いな…」

さっきのは聞き間違いではなかったようだ。

「でもそれならオカルト研より先に行くところがあるんじゃない？」

「というかうちの部員は恋愛みたいな人間の心の機微には馬鹿みたいに疎い。」

「別れることはしかたがたがなくなってるんですけど、おまじないか何かで気分を上げたいなって」

「なるほど」

今時珍しいほどオカルトを正しく認識している人だ。あくまでも占いやおまじないというのは自分の気持ちを整理するためにある。

まあ、実際問題この世には『人形』や淡雪先輩の予知のように真に怪現象と読んで差し支えないものもあるので世間一般のオカルトのイメージも間違っているとは言えないのだが。

「わかった？つまり今の御任君はかなり邪魔なの」

「帰れと？」

「うん」

「わかりましたよ。天、行こう」

「ええ」

会釈をしつつ部室から出る。今日は部室で時間を潰すつもりだったのだが、予定が狂ってしまった。

「どうしたもんかね」

「どうしたもんかねというか、あなたには考えるべきことがたくさんあるような気がするのだけだ」

「赤い髪の『人形』についてとか？」

「そうね」

よく聞き取れなかったのだがあの『人形』は火音と言っていないか
つたか？

「大問題、だね」

「むしろ今までそのことに気が付かなかった蒼に驚きよ」

気が付かなかった訳ではない、目を逸らしていただけだ。火音を
助ける為に『遊戯』に参加したというのになんて様、情けないにも
程がある。

「火音が所有者ってというのは決定かな」

「そうね、可能性は高いと思うわ」

「連続腕切り魔の犯人をあの『人形』も探してみたいだけだ」

「それが嘘で犯人はあいつの可能性もあるけど、たぶん違うわね」

よかった、火音があんな事件の犯人だったとしたら発狂していた
ところだ。

「むしろ私達があちらに犯人認定されている」

「つまり火音との衝突は必至か」

前回は『人形』だけだったが、本気で僕達を倒すつもりなら所有
者である火音も出張ってくるだろう。そしてそれはたかが『人形』
一体にも苦戦していた僕の敗北を意味する。

僕自身は負けてもいい。だけど、そのせいで天が壊されたり、い
ざという時に火音を守れなくなるのは嫌だ。

「何か策は無いの？」

「無い。それに私の『複写』はどちらかと言えばサポート向きよ。

対して相手の『加速』の能力は本来は逃走用の能力なんだけど」

「今はガチガチの戦闘型か」

速さは強さ。相手の攻撃なんてものは当たらなければ恐くないし、
こちらの攻撃を相手が避けられないならダメージは確実に入る。

「ええ、所有者無しであそこまで戦える『人形』なんてあれくらい
しかないんじゃないかしら？」

「相変わらずくじ運は悪いみたいだ」

初戦でそんな化け物みたいな性能のやつに当たるとは。

「対策はぼちぼち考えていくとして。後は僕自身の強化かな」

「何かする気なの？」

「いや、したいんだけどね」

オーソドックスにランニングをしたいのだが、同居人である火音から狙われている状況で天一人を家に残すのは危険だ。

かといって天と一緒に走らせる訳にもいかない。こんなフリフリ
の服で辺りを走る幼い少女、普通に不審だ。

「なら、後は僕の能力とかかな」

「使えるようになる方法は私にもわからないと言ったはずだけど」

「わからないから使えないままって訳にもいかないだろ。僕なりに
方法を探すさ」

「そもそも蒼に何か願いつてあるのかしら？」

「日常を普通に平和に過ごしたいかな」

「地味な願いね」

「そんなこと無いと思う」

前にも天と同じことを言ってた人がいたことがある。その人にも
言ったことだが。

「月並みな意見になるけど、世界がまだ決して平和とは言えない中
で日常が過ごせるっていうのは凄いことだと思う。似たようなこと
を繰り返すのは飽きたとか言う人がいるけど、それは慣れちゃった
だけで日常も結構楽しいよ」

事実、火音やオカルト研の皆と過ごすのは本当に楽しい。

「たしかに自分で言うように月並みね。まあでも、悪くはないと思
うわ」

「ありがとう」

しかし、自分の願いを自覚してみたところですぐに能力が使える
ようになったりはしないみたいだ。

「そう上手くはいかない、か」

「それこそあなたの言うようにぼちぼちやっていくしかないでしょ
う」

結局何も出来ないということか。

「にしても本格的に暇になつてきたな」

家に帰って何かやってもいいけど、生憎そんな気分じゃない。

「こういう時に何も出来ない男は嫌われるわよ」

「そうなんだろうけどね……」

これが圭吾とかならゲーセンに直行で無問題だから楽なのだが。女性が相手となると桃色な経験は皆無な僕では手も足も出ない。

世間一般でデートと言うとやることは食事とかか？いや、天とは前にもケーキを食べている、毎回食べ物では天に失礼だ。

ならば買物。そういえば天が今のゴスロリ以外を着ているのを見たことが無い。むしろそれは問題じゃないのか。人形であるといえ天の服だつて汚れるし、本人だつてたまには別の服が着たいだろう。

「天、服買いに行こう」

「え？」

「いいから付いて着て」

「蒼、だからあなた何勝手に」

困惑する天の手を握って先導していく。

「到着」

「ご苦労様、私を引きずっていたからさぞかし疲れたでしょう？」

天の嫌みを無視して店内を歩く。市内でも屈指のサイズを誇る複合型洋服店、女性の服には疎い僕だがここなら天に合う服も見付かるだろう。

「天のサイズだと小児用かな？」

「馬鹿にしないで、私があなたの何倍生きてると思ってるの？」

「いや、それはそうだけど」

成長しないから年齢は関係無いし、天はどつからどう見ても子供サイズだろう。異様に細いからダバダバにならないかだけが心配だ。「大丈夫、最近は何歳少女もストライクゾーンの人は多いみたいだ

から」

「あなたは何を言っているの?…」

僕にもわかりません。

「さて、じゃあ回っていくか」

数分後。

「これも、微妙ね」

「まあ、たしかにイメージに合わないしなあ」
手に持っていたTシャツを元の場所に戻す。

「どうしたものか…」

普段着ているゴスロリのイメージが強過ぎて普通の服を着るとどこか違和感を感じてしまう。どれも似合ってはいるのだが結局まだ一着も買えていなかった。

「これなんかどう?」

白いワンピースを手を取ってみる。

「少し着てみてよ」

「だから私は服なんて」

「いいから着て」

無理矢理試着室に押し込む。店員に見繕ってもらってもいいのだが、天の異様な格好に近寄ってこない。それに下手に店員に見せて人間じゃないことがバレても困る。

「着たわよ」

「お、いいじゃん」

服の白色に天の黒髪が栄えている。

「こうするとなんかお嬢様みたいだ」

ダメージなんて知らないかのように輝きを放つ黒の長髪に清楚なワンピース、さらにはもともとから天が持つ気品が金持ちの令嬢じみた雰囲気醸し出している。

「それは今までで一番似合ってるな」

「そう、私は別に普通だと思うけど」

「まあいい、それは購入ね」

既に女性用下着などが入っている籠に投入する。ここはこの建物の中でも最も大きい店なのだが、値段が手頃なうえにだいたい物が置いてあるので非常に便利だ。

「普通だつて言ってるのに…」

「僕が気に入ったからいいんだ」

「我儘ね、占有欲が強いと嫌われるわよ」

「それなら僕に占有されてくれる人を探すまでさ」

天の毒舌の受け流し方も覚えてきたしいい感じだ。こんなことしてる場合じゃないのかもしれないが非常時にこそ余裕は大事だ。

「で、これでいいんでしょ？」

「そうだね、この店はもうあらかた見終わったし別の店行こうか」

「帰るといふ選択肢はあなたには無いの？」

「さあね」

まあ興味が無いところにずっと居させられるのが苦痛だというのは理解できる。

「天…？」

帰るかと聞こうとしたのだが、何かの店の前で立ち止まっている。

「何してるんだつて、ああ」

天が立ち止まっていたのはゴシッククロリータの服を扱う店の前だった。この間のケーキの時もそうだが、天は一部の物事に対してだけは見た目相応の幼さを出すときがある。

「見る？」

「別に…」

「僕も興味あるし、見よう」

「蒼が興味あるのは不味いと思うのだけど」

まあ実際にあつたら不味いだろう。それにしても顧客のニーズに応えるのは店の義務だがゴスロリ専門店まで置くとなるとさすがに珍しい。どれだけ広い範囲の人間の希望に応える気なのだろうか。

「こんななののか」

案のじょう人はいない。

「おーあー…」

ふと気になつて捲つた値札に書かれていた値段に何も言えない。手がかかっているのはわかるが何故こんなに高い。

「そ、蒼」

「ん？」

「こ、これなんてどうかしら？」

恥ずかしがる天、珍しいを通り越して雪が降りそうだ。

「似合うと思うよ」

事実、その黒を基調とした服は天に似合うだろう。だがしかし、その拘束服のような外見は普通に着て歩くものではない。そもそもそれは本当にゴスロリなのか？

「まあ、その、なんとというか、鎖というか拘束服というか…」

「駄目かしら？」

「駄目というか…」

「そう…」

僕の良心が悲鳴を上げているのだがどうすればいいのだろうか？

「それ買っていいよ」

「別に私は欲しいなんて」

「欲しいんですよ」

奇抜なデザインではあるがとても似合っているのだし。

「ありがとうね、蒼」

「どういたしまして」

正直財布にもキツイ打撃だったが喜んでもらえたならそれでいいか。

「にしても、鎖ね…」

第一部 二章、その一（後書き）

シリアスさいなら！

再び私の趣味前回です。

言い訳をさせていただきますと、最近はやや頭が痛いうえで忙しくてまともに小説を書けないのですよ。なので以後更新がめちゃくちゃ遅れます。

今回も特に最後の方が酷いです…

いろいろといたらず見苦しい作品ですが、以後も読んでいただけると嬉しいです。

第一部 二章、その二

「剣を短期間で扱えるようになるにはどうすればいいかって？」

剣道の授業からの帰り道、僕は圭吾に剣の扱い方について質問していた。赤い髪の『人形』攻略のきっかけは昨日思い付いたが、まず何にせよ基礎的な能力が低いのでは話にならない。

「どうしてまたそんな？」

「漫画の主人公がかっこよくてさ」

「それで納得すると思ってる？」

「いや、思ってる」

「じゃあ言わないでよ…」

質問に何か返さなければいけない気がしたのだからしかたない。

「というか僕が剣道部だからその質問をしたのかもしれないけど」「そうなるね」

天がこの間『複製』した武器はクレイモアが案外使いやすいのでこれ以降も使ってみることにする。まあ刀身だけでもメートル以上ある大剣を片手で扱える方がおもしろいのだが。

閑話及第、要は剣を上手く使いたいなら普段から使ってる人間に聞いてみようということだ。幸い、僕の近くには全国クラスの選手である圭吾がいる。

「剣道がある程度やっているからこそ蒼の望む答えは返せないよ」

「というと？」

「剣道は一朝一夕で身に付くものじゃない。要は反復練習だからそれにかけた時間が大事なんだよ」
「なるほど」

現実には甘くない、天に会ってからよく思う言葉だがここでもか。まあ天に言わせれば僕はかなり運がいいというか上手くいつている部類らしいが。

「まあ短期間でどれだけ物になるかはわからないけど、やっぱり素

振りかな。型とか別に気にせず、体に剣を馴染ませる感じで」

「なるほど、ありがとう」

それならば家の裏で出来るだろう。

「そういえば蒼が使いたい剣って、竹刀？」

「クレイモア」

「それで納得すると思ってる？」

「いや、思っていない」

「じゃあ言わないですよ…」

今度は紛れも無い事実なのだが。

「あ…」

「小賀浦先輩でしたよね？」

声がしたので振り向くとそこには見知った顔が立っていた。

「うん、御任君だよ。この間はお邪魔しました」

「いえ、あの後はどうでした？」

「凄いやね、淡雪の占い。話には聞いてたけどあんなに本格的なんて」

「見た目だけです、あの人の占って百発百中で外れますよ。うちの部員の間では逆占いななんて呼ばれてます」

「結果と逆のことが起きるから？」

「そうですね。小賀浦先輩の結果はどうでした？」

たしか彼氏に別れを切り出されたとかいう重い話だったはずだ。

「淡雪の結果では別れない方がいいって。でも、逆なのか…」

「いや、その…」

別れない方がいいということは別れた結果起きる出来事が凶であるという意味であり、その逆は起こるのは吉の出来事だということ。つまり先輩の占いの結果は小賀浦先輩の行動の正しさを証明しているのだが、一般人にそれを説明してもわからないだろう。

「いいの、私は別れる踏ん切りをつけたかっただけだから」

「そうですね」

しかしまあ気まずいことには変わりが無い。

「それじゃあ御任君、勉強頑張つてね」

「それは淡雪先輩にどうぞ」

二年生とはいえ高校生が丸一日サボりは出席日数が不味い。

「淡雪に伝えておく」

「祈咲に会ったんだね、御任君」

「廊下ですれ違ってその時に少し話をしただけですよ」

「何処で会ったかなんていいの、随分と余計なことをしてくれたね」

普段から表情に乏しい淡雪先輩がギリギリ判別出来るレベルで表情を作っているなんて非常に珍しい。

「そんな開始数分でやられる敵キャラみたいなこと言わなくても」

そもそも僕は何か怒られるようなことをしただろうか。小賀浦先輩に対する敬語がなつてなかったとかか？

「私がつつかく占いの結果を改竄までしたのに…」

「もしかして、逆占いのこと教えたのが駄目でしたか？」

「その名で呼ばない！」

「そんなに怒らなくても…」

実際問題面白いように外れるのだから文句はご自分をお願いしたい。

「世の中には触れてはいけない場所があるの」

「それには心から同意しますけど」

「とにかく、御任君のせいで私の労働は無意味なものになったの」

「はあ、というか労働って何したんですか？」

そこまで言うなら非常に大事な何かだったのだろう。むしろそうでなくて僕が怒られ損だ。

「祈咲は彼氏と別れるきっかけが欲しかったみたいだけどそれはいけないと思うの」

「そんなのは個人の解釈しだいですよ」

小賀浦先輩の物語では脇役以下の僕達が口出しをするようなこと

ではない。

「でも彼氏さんとは簡単な喧嘩をしただけみたいだし、そんなことで別れるのは…」

「淡雪先輩は時々妙に熱血ですよ。冷静になってください」

他人の色恋沙汰など関わって良いことは無い。友好関係を保つ為に関わるならまだしも深く関われば日常を壊すことになる。同じことを繰り返したいなんて病んだことは言わないが、過ぎたるは及ばざるが如し、過度のハプニングは暇以上に恐ろしい。

「私は冷静です。とにかく私の占いでは別れるべきだと出ただけど逆を言ったの」

「ああ、それで改竄ですか」

つまり僕が淡雪先輩の占いは必ず逆が出ると伝えたことで先輩の思惑は外れた訳だ。

「私が言いたいのとはこういうこと」

「なんで怒ってるかは理解しましたけど、そもそも淡雪先輩の行動は根底にある発想からして間違ってると思いますよ」

「余計な口出しだったってこと？」

「そうですね。さつきも言いましたけどこれはあくまで小賀浦先輩達の問題です。僕達は無関係」

「それでも、私は少しも話し合わないで恋人同士がバラバラになっちゃうのはおかしいと思う」

「そうは僕も思いますよ」

一度は好き合った仲だ、ちょっとしたこと疎遠になるのはもったいない。

「だけど今は話す場所が違う。それが駄目かじゃなくて僕達に関わるべきじゃないと言っているんです」

「冷たい」

「よく言われますよ」

「冷血人間」

「さつきと言っていることが大して変わってません」

「御任君の馬鹿」

「あなたは小学生ですか」

「そんなことな…イ」

突然頭を抑える先輩。

「ちよつと先輩？大丈夫ですか？淡雪先輩？」

「大丈夫？」

離れたソファ―に座って本を読んでいた天も駆け寄ってくる。

「五月蠅い、頭に響くから静かにして」

「五月蠅いって、本当に大丈夫なんですか」

「無理はよくないわよ。自分の体調を偽るのは結果的に自分にも周りにも不利益をもたらすわ」

「わかつてる、予感が来る前にたまにあるから、慣れてる、だから平気」

そんな風に途切れ途切れに言われても信じられない。それ以前に先輩の予感にこんな副作用があつたなんて。

「とりあえず水よ、飲みなさい」

「ありがとう、天ちゃん」

「病人を看病するのは当然よ」

「だから病人じゃないって…痛っ」

「その様子は問題無く病人です。ちよつと横になってください」

部員の誰かが持ち込んでいた簡易ベッドに先輩を横たえる。

「御任君、日本語が変」

「そんなこと今は関係無いですよね。ていうか毎回こんな発作みたいなことが起きてるんですか？」

先輩の予感はそのなりの頻度で出ている。その度にこんなことが起きているのだとしたら非常に辛いだろう。

「違うの、今まではこんなに酷いのは無かった。頭痛は起きない場合の方が多いし」

「なるほど、まあ今はおとなしく休んでいてくださいね」

数分経つと先輩の発作は落ち着いてきた。

「もう大丈夫みたい。御任君、天ちゃん、ありがとう」

「別に問題無いけど、そこまでして出した占いがどんな結果だったかは非常に興味があるわね」

「凶」

「どつという意味？」

「もともと私のこの予感はずいぶん吉凶を伝えてくるものだったんだけど、ここまでわかりやすい結果は初めて」

「つまり、どういうことですか？」

先輩のあの苦しみ様に、わかりやすい凶という結果、嫌な予感しかない。

「祈咲が彼氏と別れると圧倒的なまでの凶事が起きるみたい」

もしかしたら僕は相当不味いことをしてしまったのかもしれない。

「淡雪先輩の話、どう思う？」

大事を取って先輩が家に帰ると言うので僕と天も帰路に付いていた。

「さあ？まだ何も言えないわね」

「そうか…」

「蒼はうじうじと悩み過ぎよ」

たしかにそうかもしれない。

「でも普段の腑抜けっぷりの割には時々物凄い頑固になるわよね」

「例えば？」

「私が火音の話を出した時とか、後は今日とかかしら」

「ああそれは」

「日常、ってこと？」

答えを先に言われる。前に僕がそれをしてたら天に怒られた気がするのだが、理不尽だ。

「たしか前も自分の夢は普通の日常を普通に過ごすことだって言っていたわね。そんなに日常が大事なの？」

「大事だよ、意外？」

「ええ、何回も言うけど普段の蒼からすると人が変わったみたいになるわね」

さつきから天に言いたい放題言われているが、普段の僕はそこま
でなよなよした人間ではないはずだと思いたい。

「まあそれを言うなら今日の淡雪の態度も意外だったわ。彼女は冷
めたというか不思議な人だと思っっていたけど」

「先輩は結構熱血なんだよ、特に恋愛に関しては」

「あなたにしる淡雪にしるキャラが崩壊気味ね」

「キャラ崩壊って…」

漫画や小説の登場人物じゃないんだから崩壊も何も無いだろう。

「でもそうでしょ？」

「別に僕も先輩も理由無くそんな考え方をしている訳じゃないよ」

「理由？」

「聞きたい？」

「興味はあるわね」

人様に大声で語って聞かせるような話じゃないけど。

「簡単な話、僕も先輩も幼少期にほったらかしにされてたんだよ」

「ありきたりね」

「ありきたりだよ」

陳腐でありふれた悲劇程人間の生に影響を与えるものは無い。

「僕の場合はほったらかしにされてたとはちよつと違うんだけどね、
淡雪先輩は親に構ってもらえなかった。ああ見えて先輩はお嬢様な
んだよ。だから小さい頃は両親は忙しくて不在、使用人はころころ
変わる。要は一人の人間から明確な形の愛を注いでもらえなかった」
先輩の両親も彼女を愛していなかった訳では無いだろうが直接的
な表現でなければ子供には伝わらない。

「だから先輩にとって恋愛による繋がりにていうのはある意味最後
の希望なんだよ」

かなり大袈裟な言い方かもしれないが、家族間の繋がりを感じら
れなかった淡雪先輩からすれば恋愛による繋がりは数少ない聖域で

ある。だから小賀浦先輩の淡泊さが許せなかった。

「難儀なことね。それで、あなたは？」

「記憶が無い」

「どうしてこうも私の周りには前置きを飛ばして話を進める人間が多いの？」

僕からすれば天もそうなのだが自覚が無い奴に言っても無意味だろう。

「僕は右目が無いっていうのは知ってるよね。昔事故で失ったらしいんだけどその事故以前の記憶が無いんだ」

「な……」

そういえば天は僕の右目を持っている。それならば僕と天は昔会ったことがあるのかも知れない。

「それ以降は普通に暮らしているんだけどね。非日常を経験しているから日常を大事にしたい」

日常の経験、つまり記憶が無い僕は普段積み重ねていく日常がどれだけ大事か身に染みている。

「蒼も淡雪もわかりやすく結構なことね」

「だからありきたりだって言っただじゃん」

聞いても面白い話ではない。むしろつまらない部類に入るだろう。

「でもね、私にも少し理解出来るわ」

「と言うと？」

「私は人形士に作られたと言ったわよね。私は自身の親であるその人を知らない」

今更その人形士の性根が腐っていることなど説明されなくてもわかっている。しかし、意思を持つ存在である天を作ったまま放置するか。

「気が付いた時には何をすればいいかわかっていた。だけど周りには人形士も、他の『人形』も、誰もいなかったわ。少し、寂しかったのよ」

普通以上に繊細な天にすればそれは辛かっただろう。でも。

「今は、僕がいるじゃないか」

「え？」

「今の天には所有者である僕がいるだろ。つまり天は一人じゃない」

「カッコつけないでよ、気持ち悪いわね」

「たまにはいいじゃないか」

「言わなきゃいけない気がした。それに、僕にとって天はかなり大きな存在になっている。そんな天に僕の存在を無視されるのは嫌だった。」

「本当に、蒼のくせに」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

第一部 二章、その二（後書き）

物凄い機関空きました、すいません。

それにしても時間と反比例するかのように話がつまらない。

皆、オラに才能を分けてくれ。

とりあえず、こつこつ頑張ります

第一部 二章、その三（前書き）

遅れました…

第一部 二章、その三

「この数日間で十人か」

「ちよつと多過ぎるわね」

連続腕切り事件が活発化している。発生頻度は以前の約六倍にもなり、さすがに放置する訳にはいなくなってきた。

「止めないと」

「そうは言っても犯人の目星は全く付いてないわ。それに、こうなれば蒼の妹さん達も動くだろうし」

火音が腕切り事件の犯人を僕だと思っっている以上、事件が活発化すれば火音と戦闘になる確率も上昇する。

「向こうの『人形』対策は考えたけど、火音の能力は未知数だし僕もまだ無能力、勝てる確率は万分の一くらいかな」

「それでも多いくらいよ。だから私達がすべきことは」

「真犯人を捜し当て、自分の無罪を証明すること」

「そうね、さすがに犯人が妹さんのペアより強いなんてことは無いと思うわ」

そこまで火音の『人形』が厄介だということだろう。襲われれば逃げられないし、逃げられれば追い付けない。撤退も奇襲も効果無し、正攻法での戦闘以外行えない。そして相手が最も強いのが正攻法での戦闘だなんてゲームバランスが崩壊している。

「あれを真正面から攻略するとして、ああいうタイプには広範囲に効果を発揮する能力が効果的よ」

「都合よく僕のが能力がそうだったりするといんだけど」

まあ今は無いものかを考えた意味が無い。常に最低のことを考えておけば不測の事態なんて存在しなくなる。

「それにしてもわざわざ一般人を襲う理由なんてあるのか？」

「『人形』の所有者が犯罪に手を染めるのは別に珍しいことでも何でも無いわよ」

身体能力の著しい上昇に異能の会得、たしかにそれさえあれば何でも出来る気分になるだろう。

「今回もそれか」

「いえ、自分で言っておいてなんだけど他の可能性もあるわ。例えば能力の使用に死体が必要だとか、殺人を行うことで何らかの能力を得るとか、可能性だけを考えるならキリが無い」

「ある程度『人形』同士で相手の能力を知ってたりしないの？」

その中に該当するやつがいればそこで終了だ。

「何体か有名なのがいるけどそれ以外は全然わからないわ」

「なるほどね…」

やはりそう楽にはいかないか。

「まあ今は犯人を捜す方法を考えよう」

「それがベストね」

「じゃあそろそろ授業だから行くね」

話が一段落付いた所で切り上げる。最近はずと話していてホームルームに遅れることが多くて担任に目を付けられているので急がなくては。

「毎回毎回独りぼっちで部屋に閉じ込められてる私は本当に可哀相よね」

「何が言いたい」

「たまにはここに残ってもいいんじゃないかしら」

「学生の本分は勉強です」

僕が時々授業をサボっているのは気にしないのがベスト。

「真面目な話になるけど、私と共に『遊戯』に参加する以上、学校とかがおろそかになってしまつのはしかたのないことよ」

「それを僕に言うかい」

天にはもう話したはずだ、僕の願いを。

「平和な日々が脅かされることなく延々と続けばいい。何を願おうが勝手だけど、過去の記憶が無いからってそこまで気に病む必要無いと思うけど」

「人格を形成するのは記憶だよ。その記憶が無い僕にとっては今の日常っていうのは大事なものなんだよ」

「それも聞いたわ。ただ、今が幸せなら過去が無いことをそんなに気にかける必要は無いと言ってるだけよ」

「過去の記憶、つまり過去の日常が無いからこそ今と未来に続いていく日常に消えてほしくない。僕も天も言ってることは変わらない」
「そうなのかしらね」

「そうなんだよ」

誰かに理解してほしいなんて思っていないからわからないならそれでいい。ただ、僕の日常である火音を守る為に一緒に戦ってもらう天には少しは知っておいてほしい。

「さて、長々と話しちゃったね。つまらない話に付き合わせて悪かった」

「いえ、私が聞いたんだから問題無いわ。ただ、蒼はもう少し言いたいことを纏めてから話す練習をするべきね」

たしかに同じようなことを何度も言っていた気がする。まあ、なんとなく思っている日常が大事という気持ちに無理矢理理由付けしようとしたからだろう。

「ていうかそろそろ本当に時間無いから行くね」

「結局私は置いてかれるのね」

「しかたないじゃないか」

今日の天はやたらと絡んでくる。まあ連日こんな場所に軟禁じみたことをされれば気が滅入るのも普通か。

「昼休みとかにはまた来るから」

僕以外にも部室には部員が時々来るのでそれがちよつとした暇潰しになってくれるといいんだけど。

淡雪先輩に説明したように僕の親戚とされている天は女子部員から異様に可愛がられているので人さえいれば退屈はしないはずだ。むしろ過剰にスキンシップをとられて天が人形である事実がいつかバレるんじゃないかというのが最近の悩みになっている。

「そうね、この間みたいな面白いのを頼むわ」

淡雪先輩の僕がロリコンだという発言が天のせいであんな信憑性を持ってしまい、部員に僕が物凄いからかわれてしまった事件は記憶に新しい。

「何回も言うけど俺は別にロリコンじゃないし…」

「簡単に信じるとでも？」

「そうしてくれると助かる」

「というか急いでいるんじゃないの？さっきからかなり時間が経っているけど」

時計をチエック、先程はかなり余裕のあった時間も今は間に合うか間に合わないかの瀬戸際といった所か。

「教えてくれてありがとう。じゃあ行ってくるね、天」

「教えなければよかったわ」

「火音達の誤解を解いたらまた出掛けるから拗ねないで」

天には迷惑をかけているので埋め合わせは今すぐにでもしたかったが、下手に人の多い場所に行けば必要の無い被害を生みかねない。それならばきちんと安全を確保してから打ち上げも兼ねて天への埋め合わせとすべきだ。

「物で釣ろうとしないでくれる？」

「拗ねてるのは否定しないんだ」

「五月蠅いわね、時間が無いなら早く行きなさいよ」

うん、やっぱり天は『人形』などに纏わる話をしている時よりこっぴどいところとめもない話をしている時の方が子供らしくて可愛い。

でもまあ話を聞く限り天は軽く一世紀以上は生きてるはずなので子供らしいというのも失礼な話だが。

「了解、了解、今度こそ行ってくるよ」

「あなたなんて遅刻が多くて留年してしまえばいいんだわ」

一部の教科の点数が異様に低い僕からすれば笑えない話だ。

天の呪いかどうかは知らないが僕は結局今日も遅刻してしまった。

今の担任はホームルームなどの態度も自分が受け持つ教科の平常点として加味するので、もともと苦手な英語が今回は絶望的だ。

「どうしたの、元気無いね」

「ん、ああ、圭吾ね、おはよう」

こいつから見た僕は毎回元気が無いように見えるのだろうか。

「はいはい、おそよう。で、お疲れ気味かな？」

「それなりに」

「聞いたよ、オカルト研の部室に小さな女の子を連れ込んでるんだって？ 犯罪はよくないと思うよ」

こいつまでそんなことを言い出すか。

「噂になってるの？」

「俺はオカルト研に何人か親しいのがいるからそいつらから聞いただけだよ」

よかつた、天のことが学内で話題になってしまえばいろいろと面倒なことになる。むしろオカルト研の部員に触られただけで嫌がる天がそんな動物園の動物みたいな扱いを快く思うはずが無い。

「で、その娘はどんな感じなの？」

「どんなって？」

「可愛いとか優しいとか」

天の容姿と性格か。

「見た目は人形みたいでめちゃくちゃ可愛い」

人形みたいというか実際人形なのだが。そういえば天は日本人のような外見とは逆に着ている服や住んでいたらしい場所は全て欧州だ。

こういうアンティークドールというと金髪碧眼の人形を思い浮かべるが製作者は何故黒髪黒目という姿にしたのだろうか。そういえば火音の所の『人形』は赤髪だし、案外『人形』の製作者は凄興趣味をしていたのかもしれない。

「性格は、まあ意地っ張りではあるよ。でも、なんだかんだいって可愛い」

会った直後は厄介事を運んできたうえに態度のデカイ糞餓鬼かと思っていたが、今はそれなりに可愛く思える。特に天の過去を少しといえ話してもらったのが大きいのだろうか。

誰とも関わらず、寂しかった。普段の天から想像出来ない状態だが、実はかなり繊細なやつなのでしかたないのかもしれない。

「蒼、否定してるけどお前はやっぱりロリコンにしか見えないよ…」
「そんなことない」

「いや、その親戚の娘について話してる時だけ凄く楽しそうだよ」
「それは…」

ロリコンというよりも父や兄が娘や妹に抱く気持ちというか保護者的な目線であってやましい意味は無い。

「結局は蒼はその娘をどう思ってる訳？」
「どうって？」

「好きか、嫌いか。幼女を愛する嗜好があるなら言っちゃっても問題無いよ。俺はそういうのには寛大だから」

圭吾ってこんな人間だったか？もはや一種の面のようになっている爽やかスマイルはいいとして、中身が随分と変わってきた気がする。

「だから単なる保護者的な気持ちだって…」
本当にそうなのか？

さつきから僕は天について好意的な気持ちしか抱いていない。でも天は非日常だ。火音が『遊戯』なんて馬鹿みたいな遊びに巻き込まれたことには天は全く関係無い。でも、ある意味では天が来たことによつて僕の日常が壊れたと言っても問題無いんじゃないか？

そんな天を、僕は何故許せる？いくら火音の為とはいえ日常が破壊されることを僕が良しとする訳が無い。

「ん、冗談だったんだけど真面目にそういう性癖かい？」
「少し黙ってる」

「はいはい」

僕は天をどう思っているのか、それだけじゃないいざとなれば闘

わなければいけない火音のことも。周りにあるものについて僕はもう少し気持ちを整理するべきかもしれない。

天は大事だ。彼女が僕の忌む非日常だというのは理解出来るが、今や天がない方が不自然だ。それに、今は僕がいるなんて臭い台詞を言ってしまった。責任は最後まで取らなければ。

次に火音、あの赤髪の『人形』と遭遇して以来家でも殆ど話していない。僕の日常の象徴、彼女を守る為に僕は『遊戯』に参加したんだ。火音が何処で『人形』と知り合い何故契約したかはわからない。でもとりあえず、火音に危険が及ぶことは避けたい。

なんだ、意外と楽じゃないか。

「おい、蒼君。自分の世界に入り込まないでくれ」

「ああ、悪い」

「ニヤニヤしているお前って予想以上に恐いのな……」

ニヤついていたのだろうか、それは恥ずかしい。

「何かあったの？」

「ちよつとね」

天も火音も僕にとって大事な存在、それさえ決まれば後は簡単だ。なんとしてでも腕切り事件の犯人を捕まえる。これ以上僕の日常を侵食されてたまるか。

「なんか最近の蒼は少し変わったな」

「いい意味で？」

「わからない」

なら良い方に解釈しておこう。

第一部 二章、その三（後書き）

簡単に言う文化祭と風邪です。さらには定期テストも待っています。超遅れました、本当に申し訳ないです。

でも最初に定期更新しないって言ったもんね！

言いましたよね…？

すいません、石を投げないください。

とにかく、頑張りますので応援お願いします。

第一部 二章、その四（前書き）

今回は特に酷いです。本当にすみません、お気を付けください。

第一部 二章、その四

「今日も収穫無し、か」

「そうね」

放課後、ここ最近続けている犯人の捜査を切り上げ夕暮れの街を歩く。

「警察もまだ犯人を特定出来てないんだから僕達じゃしかたないとはいえ、ここまで見付からないか」

警察の捜査がどの程度の進展しているかは知らないが、決定的な情報は掴んでいないだろう。何しろ相手は人間離れした動きの所有者に、そもそも戸籍に乗っていない『人形』だ。一般常識に当て嵌めた普通の捜査では見付からないだろう。

まあしかし、だからといって一介の高校生である僕より捜査が出来るという訳では無いだろう。何しろ向こうは人数が多い、腕切り魔がまだこのペースで事件を起こすなら見付かってもおかしくは無い。

だけど、それじゃ駄目なのだ。下手に警察が犯人に接触すると全滅なんてこともある。警察より早く僕達が、正確に言つと誰よりも早く僕達が真犯人を見付けなければならぬ。

「厳しいとかそういうレベルじゃないよ……」

「そうでもないかもしれないわよ」

「どうして？天もここ数日間捜しているんだから大変さはわかるだろ」

「そうね。風漬しに捜して見付けるのは至難の技だし、かと言って私達にそれ以外の方法があるかと聞かれれば無い」

「ほぼ手詰まりじゃないか」

「私達が捜すだけじゃね。なら、向こうからも捜してくれたらどうなのかしらね？」

「それって……」

「この『遊戯』最大の目的は『人形』なら人間になることで、所有者は願いを叶えること。戦闘を避ける『人形』なんていないわ」

「つまり僕達自身が犯人を釣る餌？」

「そういうことよ」

あまり気分のいい話ではないが背に腹はかえられない。確かに天の言う通り、それならこのただ歩き回る捜査にも意味が出て来る。

「唯一の問題点はあなたが相手に勝てるかよ」

「あ……」

僕の能力は使用出来ないままだし、天に戦闘力は無い。今のところ僕はこの身一つで戦わなくてはいけない。

「なんとかなるほど甘くはないんだろうな」

「当然よ。所有者達は負ければ体の一部を失うわ。それに願いが叶うなら叶えたいのも人間。そもそも右目を私が持っていて負けた場合のペナルティーが無いうえに戦う目的が無い蒼とは基本的に入れ込み具合が違うわ」

右目を天が持っている。僕は過去に事故で右目を失ったらしいが何故それを天が持っている？僕には目を失う前の記憶が無い、事故というのが嘘の可能性もある。なんで気が付かなかったんだ、天が普通じゃないレベルで怪しいことに。

「なあ、天はどうやって僕の目を手に入れたんだ？」

「どういう意味？」

核心に迫る質問、僕の右目を奪った事故は天によるものなのではないかという疑問。本来ならあの日僕の家で出会った時にしなければいけなかった質問。

「僕には僕の目を失った時の記憶が無い。僕の目は天に……」

「その質問は止めておきたまえよ、少年」

「え？」

僕も天も気が付かなかった、帰り道の普通の住宅街。その道に、誰か。

「逢魔が時、我ながら狙ったような登場になってしまって恥ずかし

「限りだ」

本人が言うように黄昏れ時の中ボロボロの黒衣を身に纏う男はまるで歌劇の一場面の様に完成していた。現実から剥離したような異質な空気。

「そんな評価を下してもらえない程の者ではないよ。本来ならここで出て来るつもりは無かったのだが、君達が予想以上に苦戦しているようだし、そちらの少年の疑問にも答えてあげようと思ってね」

敵意は無い、そう言いたいのか。でも、天と違ってこの男は。「信用出来ないわね」

そう天の言うようにこの男は何処か信用出来ない。

「随分と厳しいね、『右目』」

「その発言が既に信用ならないの。それにさっきからあなたの話の方は何、劇か何かのつもり？芝居懸かっついていて気味が悪いわ」

「そういう性分なんでね、許してもらえると助かる」

「あなたより『口の人形』の方がまだマシな喋り方よ。そんな奴と話す気は無い」

「あれはあれで自分なりに真摯に語っているのだよ」

「そう、ならあなたは真摯に話していないという認識でいいのかしら？」

二人の会話についていけない僕としては横から眺めているしかない。

「どうにも分が悪い。ただ、本当に私は君達に害を成すつもりは無い。言うならばアドバイスをしに来ただけだ」

「アドバイス？『人形』の分際で何を言っているの」

「そもそもその認識こそが誤解の第一歩になっているようだ。私は『遊戯』の参加者ではない。強いて言うならちよつとした裏技みたいなものなのだよ」

「その裏技様が私達に何の用かしら？」

「先程も言ったように、君達へのアドバイスと忠告。私は君達には期待している、本命と言っても過言ではない程にね」

「ありがたいことね」

「なるほど、強情だ。これならば『遊戯』でも心強い。そうは思わないかね、少年？」

「僕ですか」

唐突に話を振られて頭が働かない。

「君は先程自分の『人形』に対して不信任を抱いていたようだが、これを見てもそう思うかね。そもそも君は、本当に彼女を疑っているのか？」

僕が天を疑っているか否か、理論的に考えれば僕の右目の件で最も怪しいのは天だ。だけど、どうにも疑いきれない、天が僕から無理矢理目を奪うイメージが湧かない。

「よかつたじゃなく、『右目』彼は君を信じてくれたようだよ」

「普段の行いの賜物ね」

「正にそうなのだろうね。私は君程献身的な『人形』を他に知らないよ」

「あなたが言うのと馬鹿にしているようにしか聞こえないわ」

「そう受け取られるということはそのつもりが無くてもそうなのだろう。どうやら私は謝罪を述べなくてはいけないようだ」

「本当にどこまでも馬鹿にして…」

「天、落ち着いて」

「わかってるわよ」

「あなたも、さつきから何が言いたいかよくわからないんですよ」
本人は裏技と言っているがこんな裏技ならあっても無くても変わらない。

「その評価は不当だよ。君にはヒントを与えているはずだ。それを生かしていないのは君達であって、私に文句を言われても困る」
「いい加減にきなさい」

眼帯で隠された天の目、そこに秘められた異能が開放される。

「『複写』クレイモア。任せたわよ、蒼」

「相変わらず無茶振りだよ」

圭吾に言われたその日から素振りは毎日欠かさずに行っている。まともな拳動になつたなんて思っていないが、前と比べるとこの剣も随分馴染んできた。

「『右目』の『複写』か、悪い能力ではないが所有者が弱い」

踏み込みで道路のコンクリートを削る程の会心の一撃、剣が相手の体をすり抜ける。

「失敬、それ以前に今の私には誰も触れられないのだったよ。安心したまえ、こちらにも触れられないのは同じ、一方的に攻撃したりはしないよ」

「蒼、離れて！」

「攻撃は出来ないと言っているのに、そこまで信用が無い、か」

「当たり前よ、こちらがそちらにダメージを与えられない状態で不意打ちなんか喰らつたら洒落にならないわ」

「不意打ちなどする必要は無いよ。今の君達ではどんな『人形』にも勝てない」

「そんなのは！」

「やってみなければわからない、そう言うつもりかね。希望があるというのは素晴らしいことだが、あまりに樂觀的なのは感心しないな。それに、君の所有者は私の言ったことを理解しているようだが」
「本当に、唐突にこちらに話を振るのは止めてもらえませんか？ びつくりするので」

「以後気を付けるとしよう」

「蒼、どうしたのよ？」

「こいつが言ったように今の僕達じゃこいつに勝てない」

ならばこんな馬鹿みたいに不吉な気を放ってる相手と真面目に向き合う必要は無い。今までこいつと相對している緊張で動かなかつた頭が動くようになってくる。

「戦う気は無い、僕達に害を成すつもりも無い、アドバイスをしに来ただけ。それなら早くお願いします」

「急に開き直るか。少年、君は一つのことを引きずる人間だと思っ

ていたのだが評価を改めなくてはいけないらしい」

「『人形』、『遊戯』、『異能』、これだけたくさんの不思議現象を見れば諦めもよくなりますよ」

「なるほど、理解が出来ないならしようとするのを止めればいい、重要なことだ」

天があんなに不機嫌だった理由もわかる。特に面白い訳でも無い長広舌、精神を逆撫でされる。

「どうやら私は邪魔なだけのようだ、望まれていない役者は舞台から降りるべき。そろそろ私は退場させてもらおう」

「アドバイスだなんだと言っておいて結局何もしないのね？」

「既にヒントは十分出したと言っただろう。君達の気概を信じて、不粹な手出しなどしないことにしたのだよ」

「私達を馬鹿にするのもいい加減にしなさい」

「これでも褒めているのだよ。それではまた機会があれば」

血染めの赤色を誇る黄昏の空、辺りがぼやけて見えるその中で黒衣の男の姿は薄れていった。

第一部 二章、その四（後書き）

前書きでも書きましたが、今回は非常に酷い内容です。

前にちよこつと出したラスボス風味のキャラが登場なんですけど、自分がこういうキャラを書くときと暴走しやすいのを忘れていたらと書いてしまいました。

もしかしたら変更版を出すかもしれません。

そもそもこの話自体が急展開で意味不明な部分があるので、たぶん夏休みになったら本格的な改定作業に入ります。

どうかそれまで御指導御鞭撻のほどをお願いいたします。

というかお気に入り登録をしてくださっている方、最近は更新も遅く内容も酷くて本当に申し訳ありません。

言い訳ですが、テストや体調不良などもありまして最近本格的にキツイのです。

細々とはいえ頑張りますので、見捨てないてください。

第一部二章、その五（前書き）

長かった！

遂に第二章完結、そして連載再開です

第一部二章、その五

「なんだったんだろうな、昨日のあれは」

「気味が悪かった。天の神秘的な雰囲気とも火音の赤髪の『人形』の徹底的な荒々しさとも違う、未知の気配。」

「ヒントだのアドバイスだの言ってる結局は何もせずには帰ったし、その気配もさることながら言動も意味不明だ。」

「いや、一つだけならしたのか。天が僕の目を奪ったんじゃないかという疑問、それへの答え。僕は天を本当に疑っているのか、あの時も自分に問い掛けたことだが答えは否。天と出会ってからまだ一ヶ月程しか経っていないのにこの入れ込み具合。」

「天に知られたらまたいろいろと言われそうだ」

「彼女ならいつも通りのわかりやすい罵倒を投げ掛けてくれるだろう。まあそちらの方が気が引き締まって僕にはいいのかもしれないが。」

「御任君」

廊下の先からこちらに手を振ってくる人が一名。

「小賀浦先輩、おはようございます」

「もう昼だけだね」

「ああ、時間感覚が狂ってました」

「登校時から昼休みまでずっと部室で天の話に付き合わされていたんだからしかたない。まあ今回はあの黒衣の男が出て来たことで一種の緊急事態だったから文句は言わないが。」

「なるほどなるほど、この間の親戚の子かな？」

「なんで知ってるんですか？」

「圭吾は違うと言っていたがもしや本当に噂になってるのだろうか。淡雪から聞いたの。淡雪ったら御任君がその親戚の子ばかり見てるっていつも愚痴ってるんだよ」

「親戚の子ばかり見てるって、別にそんなつもりは無いんですけど」

たしかに最近では放課後なかなか部室にいられないとはいえ、部室に淡雪先輩がいる場合はいつも話している。

「それを私に言われてもねー」

落ち着かないのか左右に揺れながら話す小賀浦先輩、前に会った時と比べると随分と拳動不審だ。

「なんか嬉しそうですね」

表情は笑顔なので落ち着きが無い原因はおそらく不安ではなくて喜びだろう。

「あ、わかる？」

それでわからないのは異常な程他人に無関心な人間が相当の馬鹿だ。

「何かあったんですか？」

特にすることも無いので暇潰しにはちょうどいい話題だ。こう言う随分上から目線に聞こえるが実際に興味もある。

「この間淡雪とか御任君に相談したでしょ」

「僕は別に何もしませんでしたけど」

ただ立って話を聞いて追い出されただけだ。

「そんな瑣末な問題は放っておいて。それで相談して、占ってもらって、別れる決心をして、実際に別れた」

僕はそんな風に一々区切らないと言葉が通じないくらい残念なやつだと思われているのだろうか。

「それで今は自分なりに努力中なの。このままの私だとまともな恋も出来そうにないから。目標を達成して、それから恋をする」

ネガティブなんだかポジティブなんだかよくわからない思考だが行動力があるというのは称賛されるべきだろう。

「目標ってなんですか？」

「それは秘密」

個人的には多くの方が一番気になるのがそこだと思つ。

「はあ、まあとにかく小賀浦先輩は心機一転頑張ることを決めて、だからテンションが上がっていると」

「そうだね」

恋愛が成就してテンションが上がるのではなく失礼してテンションが上がる人も珍しい。

「おめでとうございます？頑張ってください？」

口に出してしまったがどれもおかしい気がする。

「なんとなく気持ちは伝わったから大丈夫だよ」

「なんかすいません」

こういう時は自分の語彙の少なさが恨めしい。

「だから大丈夫だって、それじゃあまたね」

「はい、それではまた」

テンプレートな別れの挨拶を交わして互いの目的地に進む。

「小賀浦祈咲先輩、あの人と知り合いなの？」

廊下の曲がり角からいきなり現れた圭吾が聞いてくる。

「横から急に顔を突き出すのは止めてほしいんだけど」

知人と別れた直後に再び知人来襲、用事なんて何も無いが物凄く時間を使っている気がする。

「近かったね、ごめん、ごめん。とは言っても十字路の真ん中に立ってる蒼も蒼だよ」

「人通りが少なかったから」

「結局俺が来たじゃん」

「圭吾は人間じゃないし」

「随分と使い古された返しだね」

僕が淡雪先輩によく言っている言葉、まさか自分に返ってくるとは思っただけだった。

「それで？結局語彙が貧弱な蒼は小賀浦先輩と知り合いなの？」

「やけにこだわるんだな、何かあったのか？」

そういえば異性からの人気は高いはずの圭吾が誰かと付き合ってるなんて話は聞いたことが無い。ベタな展開だが圭吾は小賀浦先輩が好きとかだろうか。

「あの人に関わるのはオススメしないよ」

一瞬、その言葉と小賀浦先輩が結び付かなかった。

「なんでまた？淡雪先輩の紹介で知り合ったんだけど、あの人は普通がいい人だよ」

「普段はな」

「勿体振らないで教えてくれ」

「何て言うか、あの人はストーカー気質なんだよ」

「意味がよくわからないんだけど…」

さつきから頭の回転が状況の展開に追いつかない。端から見れば今の僕はさぞかし馬鹿っぽいだろう。

「剣道部の先輩に昔小賀浦先輩とつきあった人がいるんだけど、つきあい始めるともつずつとベタベタらしい」

「そのくらいならただの愛情表現が過剰な人だろ、特殊だけど異常じゃない」

「それを特殊の一言で済ますことが出来る蒼も十分特殊だと思うけどね」

余計なお世話だ。

「でもまあ違うんだよ。小賀浦先輩が恐いのはここから。さすがにその先輩も嫌になって小賀浦先輩と別れようとしたらいいんだけど、その後はつきあってる時以上のストーカーキングが待ってたらしい」

「それで関わらない方がいいって？」

「大正解、その剣道部の先輩以外にも何人か被害にあった人がいるらしい」

「とは言われてもね…」

小賀浦先輩は僕を好きな訳では無いので無関係だし、目標を達成するまで恋愛しないと言うならばしくは被害者も出ないだろう。

そもそも小賀浦先輩の言っていた今の私ではまともな恋は出来ないと言うのは自身のストーカー体質を指している気がする。

「まあ実際被害を受けてないからなんとも言えないってのはわかるよ。ストーカーの話だって男の側が話を大きくして話してるのかもしれないし」

「結局どつちなんだよ…」

僕と先輩を関わらせたくないとか言っておきながら先輩を弁護しだすし、何がしたかったのかがいまいちわからない。

「だから気をつけておけってこと。蒼が結構言ってるじゃないか、最悪を想定しておけば予想よりはマシな結果しか起きないって」

「わかった、頭に入れておくよ」

「そうしておいて」

まあ頭に入れておくとは言ってもそこまで重要な案件ではない。個人的にはやはり未だに何の手掛かりも無い腕切り魔と、不自然なまでに何も仕掛けて来ない火音についてが気掛かりだ。

「御任君」

「なんですか、淡雪先輩」

「三谷君からの話聞いた？」

「と、言いますと？」

「わかって言ってるでしょ」

何故わかった。話を長引かせるのも、少しズレた思考をするのも会話を面白くする為だ。決して僕が素で変な人である訳ではない。

「小賀浦先輩についてですよね」

「そう、聞いてどう思った？」

小賀浦先輩と淡雪先輩経由で知り合ったと僕が言ったからか、圭吾律儀に淡雪先輩にも話しに行ったらしい。

「むしろ僕としては淡雪先輩がそのことを知っていたのかを知りたいですね」

ストーリー気質を知っていて友人と認定していたか否か。そこは重要なポイントだろう。

「別れた後もストーリーカーしてたのは知らなかった。でも、祈咲の愛情表現が少し変なのと惚れっぽいのは知ってた」

知っていたのか、意外だ。まあでもこの人の恋愛観も結構異様だからしかたないのかもしれない。

「で、その、知ったうえで御任君は…」

「先輩が口籠るなんて珍しいですね」

「そういうことを言っちゃうから御任君は嫌われる」

「友人が少ないのは否定しませんが」

むしる否定出来ない。

「真面目な話をしようとしてるのわかってる？」

「はい、それはもう切実に」

「御任君は先輩をもっと敬うべき」

「なら淡雪先輩は敬えるようなことをしてくださいよ」

何がいけなかったのかいつもならかなり続く会話の調子が出ない。

「横から見ててかなり面白いわよ、あなた達」

小賀浦先輩の話題が出ている時の常として黙々と読書をしたいた天が突然口を出してきた。

「蒼は話題をいつものふざけたものにしたい。淡雪はその気遣いに気が付きつつもいつものテンションに戻れないでいる。互いの好意が空回りする、関係の無い私からしてみればちよつとした喜劇より面白いわ」

「何か不機嫌？」

天の言葉の端々に棘が感じられる。

「仮に私が不機嫌なんだとしたらそれは十割あなたのせいね」

「天ちゃん、ヤキモチ」

「相変わらず頭の中身が愉快なことになっているのね」

「じゃあ私は御任君との話を続けるから」

「ええ、益の無い会話をお楽しみあれ」

先生、空気が重いです。

「とにかく、僕は小賀浦先輩の件でとやかく言うつもりは無いですよ」
「よ」

「そう、よかった」

「というか先輩は少しなら知ってたんですよね。なんでそんなことになったのか理由わかりませんか？」

目標があつて努力でそれを達成するまでは自分ではまともな恋愛は出来ない。自分のストーカー体質にある程度以上の自覚が無いと出ない発言だろう。要は先天的なものではなく後天的な性質だということになり、それなら何か理由があるはずだ。

「詳しくは知らないんだけど、昔つきあつてた彼氏に浮気されたとかだつたはず」

「それはまた」

下手すると僕や淡雪先輩以上にありふれている。

「だったら小賀浦先輩の言つていた目標はそのトラウマを乗り越えるつてことですかね」

「そういえばこれが終わつたらようやく願いが叶うみたいなことを言つてたと思う」

僕に話すくらいだから淡雪先輩には話しているだろうと予想していたが、案の定話していたらしい。

「願いが叶う、ね」

やはり皆何かしらの願いや思いを抱えながら生きているのだろうか。ならばそれを叶えるチャンスが目の前にあるのに喰い付かない僕はある意味で不届き者に分類されるのかもしれない。

しかし、僕の願いと『遊戯』で勝利することは二律背反、同時に絶対になり立たない。ならば僕は僕なりの方法で願いを叶えようとしている訳だ。

「願いが叶うつて随分大袈裟な表現だけど、祈咲もなんかやる気になつたみたい」

「たしかに大袈裟ですよね」

日常生活で登場する表現としては些か不自然なくらいに。

そう、不自然、非日常。

何かがひつかかる、喉から小骨が抜けられないような気持ちの悪さ。

ここ最近の淡雪先輩の予知は『人形』に纏わる重要な事柄を百発百中で当てている。なら、その淡雪先輩の予知で小賀浦先輩は彼氏と別れない方がいいて出たのはどういう意味だ？

それに加えて、腕切り魔を予測するヒントは十分にあるはずという黒衣の男の発言。

考えたくない、しかし異様な程多い符合点。これが偶然なら僕は今頃宝くじで数百万円くらいなら当てている。

「先輩つ、まだ小賀浦先輩って学校にいますか？」

「わからないけど、確認してみる？」

「お願いします」

先輩が電話を耳に当てている間、緊張感だけが異様に高まる。

「祈咲？そう、うん、御任君が話があるらしいから替わるけどいい？」

先輩は常と変わらない無表情と抑揚の無い声で電話している。白神宮淡雪の対応は能面じみていると誰かが言っていたが、悪口としか取れないそれも少しは認めざるをえない。

「お電話替わりました、御任蒼です」

「御任君なんかサラリーマンみたい」

「よく言われます」

「それで、サラリーマンな御任君が何の用？」

「今学校にいるならこれから少し会ってほしいんですけど」

「愛の告白？」

「否定も肯定も、むしろ返事すらしません」

「返事はしてるよ」

「それで結局？」

「いいよ」

「じゃあ今から十分後に校舎裏に」

「了解」

とりあえず、第一段階はクリア。少々というかかなり不自然だった気もするがいたしかない。

「という訳で天、今から校舎裏に行くよ」

荷物を纏めつつ、もはや置物に見えるレベルで動きが無い天に声をかける。退屈だったなら非常に申し訳ない。ただこっから先は僕

の大嫌いな非日常だ、天が退屈することは無いだろう。

「ちよつと待つて、状況が飲み込めない」

「淡雪先輩、事情説明は省きますがかなり大事な話なんです」

「駄目、最近の御任君の部活への参加態度は悪過ぎる。部長として許せるものじゃない」

「本当にすいません。でも行かなきゃ駄目なんですよ」

そして本当のことを言う訳にもいかない。

「それはあれ、世界が滅びるレベルなの？」

「否定も肯定も」

「返事もしない、一回使ったギャグを連発しない」

「はい、はい」

「はいは一回」

大変だ、淡雪先輩がお怒りになられている。

「まあとにかく、僕は行きますよ」

普段なら大歓迎の無駄話なのだが生憎時間が無い。僕は嫌なことはサクサク済ませる主義なのだ。言わば苺を残しておくのではなく生クリームを先に処理するという考え方であり、今はさっさと生クリームを排除しに行きたい。

まあ個人的に言わせてもらえばショートケーキは苺より生クリームの方が美味しい。

「また馬鹿なことを考えてる顔、やる気ある？」

「満ち溢れていますよ」

「そうやって真面目な所で茶化すのは駄目な癖。しかも御任君はそれで自分まで騙そうとしてる、本当は熱血君なのに」

「その発想はありませんでした」

僕が熱血なら世界の平均気温はもっと高い、むしろ人なんて生きられないくらいの焦熱地獄だろう。

「はあ、本当に馬鹿らしくなる」

「そう言われまして……」

自重は出来るがする気が無い。むしろ生来の癖みたいなものなの

で矯正し辛いのだ。

「行つていい」

「え？」

「だから行つていい。御任君に真面目に話しても無意味」

「ありがとうございます」

最近の僕の行動が酷いというのは先輩の偽らざる本心だろう。そこを抑えて行かせてくれるというのは非常にありがたい。

「褒めてない」

「知らないですよ、そんな」

「無駄話してていいの？呼び出しておいて遅刻は最低だよ」

「そうですね。じゃあ天、行くよ」

「ええ、わかつたわ」

纏めた荷物はこれからのことを考え置いていくことにする。

「御任君」

「どうしました、淡雪先輩？」

「最近なんか変だよ。さっきも言ったけど御任君は自分で思うよりずっと善人、あんまり面倒事に首を突っ込まないで」

「善処します」

「確約しなさい」

「出来ません」

したらそれは嘘になってしまふ。

「それじゃあ淡雪先輩、行つてきます」

時間が無いので早足で校舎に向かう。あまりにも速く歩いているのを見られるのはマズイが、いくら早足をしても尽きない体力は素晴らしい。こういう時は『人形』と契約してよかったと心から思う。まあ天に会わなければこうして急がなくてはいけない事態にはならなかっただろうが。

「天、状況を説明するけど」

「あなたの言動を見ていれば何が起きてるかくらいわかるわ」

「さすがだね」

「馬鹿にしてるの？」

「いや、純粹に褒めてるよ」

伊達に長年生きてないということなのだろうが天の頭の回転はかなりいい方だ。それを幼い少女の外見でやられるのだから異様な貫禄というかオーラがある。

「さて、着いたよ」

人は、いない。

「小賀浦先輩はまだ来てないのか」

「そうみたいね」

「今来たからね」

僕達の後ろから声がかげられる。

「ちよっと遅れちゃったかな、ごめんごめん」

「いえ、呼び出したのはこっちですから」

「だね、愛の告白に校舎裏なんてベタ過ぎて今時する人いないよ？」

「僕の場合告白は屋上ですね。校舎裏に呼び出していうとそれは別の意味に感じます」

「何？」

「挑戦状というかなんというか、要は喧嘩のお誘いです」

「あら、それは怖い」

「ですね」

現に僕の心臓は毛穴という毛穴から血を噴き出しそうなくらいの速度で血液を全身に送っている。

「つまり御任君は私と喧嘩する気なの？」

「ええ」

喧嘩なんて平和なもので済むとは思ってないが。

「だって小賀浦先輩、『人形』の所有者ですよ」

これを否定されると僕にはさらに追及する材料が無いし、そもそも小賀浦先輩が本当に『人形』とは無関係の可能性もある。しかし、ただの勘だが当たっているという確信がある。

互いにだんまり、空気が重量を持ち体に絡み付くような嫌な沈黙が流れる。

「なんでバレちゃうかなあ」

「単純に運ですよ」

淡雪先輩の予知と『人形』の関係性、たまたまそれに気が付けたというだけだ。

「運も実力のうちって言うよ」

「それはどうも。さて、もう一つ質問いいですか？」

「何？」

「連続腕切り魔、わかります？」

「うん」

「あなたですか？」

「さあ？」

異質な会話の中で小賀浦先輩の笑顔だけがいつもと変わらない、それこそ非日常。僕が小賀浦先輩と知り合ってからあまり時間は経ってないが彼女は僕の日常の一部だった。

そこに入り込む非日常、気持ち悪い。いや、小賀浦先輩は僕と知り合った時には既に『人形』の所有者で異端だったのか。気が付かないうちにそんなものを僕の日常に侵入させてしまっていた。

「本当に、早く気が付けてよかった」

願いが叶うなんて言葉がきっかけてそこまでの発想に至れたのは我ながら奇跡だ。

「なんか私を犯人だって決め付けてない？」

「違います？」

「どっちだと思う？」

「禅問答をするつもりは無いんです、さっさと話してください」

「なら、捕まえてみて」

突然反転し走り出す先輩、所有者としての力を遺憾無く発揮しているらしくその速度は人間離れしている。

「天、追うから」

天を抱えて走り出す。『人形』の身体能力は所有者よりも低い。つまり天の存在はこの追走において邪魔以外の何ものでもない。

鉄柵を越えて道路、しばらく走り路地裏へ、少しずつ誘導されているのはわかるが速度の僅かな差が故に追い付けない。

「最悪だ、見失った」

例の廃ビルが立ち並ぶ区画、本当にこの市はきちんとこういう場所の整理をすべきだ。

「蒼、気をつけて」

「わかつてる」

逃げる先輩を追うことに集中し過ぎてカウンターを喰らうのは洒落にならない。まだ先輩の『人形』も確認出来ていないし油断は禁物だ。

「何を探してるのか知らないけど、無駄だ。お前達は今日こそここで死ぬんだから」

声は上空から、そちらを向けば紅い疾風。

「またここで会ったな。今日こそ許さない、殺してやる」

遭遇は二度目、力量差は歴然。御任火音の赤髪の『人形』だった。

第一部二章、その五（後書き）

今回はかなりの急展開になってしまいました、不自然かもなあ…

途切れていた連載が再開しますのでまたよろしくお願いします。

第一部 三章、その一

「なんでこのタイミングで出て来るんだよ」

小賀浦先輩を追わなきゃいけないのにこんな所で無駄な時間を使うことになるなんて。

「蒼、片手間にやって勝てる相手ではないわ。今は目の前の敵に集中しよう」

「わかった」

天の発言にも一理ある。小賀浦先輩の漁夫の利を狙った攻撃というのが恐い訳では無いが、眼前の赤髪の人形もかなりの脅威だ。

「前に話したあれでいいよね」

「ええ、問題無いわ」

天と考えた異様な速度で動き回る敵への対処法、効果があるかどうかは不明だがそれに賭けるしかない。

「火音はやっぱりまだ迷ったままだから。火音に辛い思いはさせない、私がお前を殺す」

「やっぱり君は火音の『人形』か」

前回の遭遇時の発言からほぼ確定に近い形で予想はついていたが、改めてその事実を突き付けられるのはなかなか精神的にクるものがある。

「言っても信じてもらえないかもしれないけど、僕達は殺人事件の犯人じゃないよ」

「じゃあなんで現場にいた」

「それは君と同じで犯人探し……」

「うるさい！いいから死んじゃえ！」

相手から感じる荒々しい殺意、それがまるで物質としての質量を持ったかの如く押し寄せる。

否、押し寄せているのは風。一瞬で最高速度に達した敵が生み出す人工的な空気の対流。

「『複写』壁」

天がギリギリで壁を作るが敵には何の障害にもならない。地面から突き出す壁を避け、天の元へ。

「ふ、『複写』」

「遅い！」

単純な戦闘能力は所有者よりも『人形』の方が低い。そして相手の『人形』を破壊した時点で勝利確定、故に相手の行動は理に適い過ぎてると言ってもよいくらい理に適っている。

「そっちが速過ぎるだけだと思っけど」

それを守るのが僕の役目。こんな役目は僕の日常に入る予定は無かったはずなのだが、しばらく一緒に過ごした相手を見捨てるのなんてそれこそ異常だ。

天が作った壁を砕いて破片を辺りに撒き散らす。

「っ！」

相手が離れた隙に天を回収。

「あれが私に当たったらどうするつもりだったの」

「開口一番それがくるかな、普通。もう少し褒めてくれても神様は怒らないよ」

「その台詞は相手を倒してからにしないで、来るわよ」

「はいはい」

「『複写』クレイモア」

実戦での使用は黒衣の男との戦闘を含めて三回目、もはや愛剣と言えるレベルだ。

「そんなデカイだけの武器が私に当たる訳ないだろ！」

この『人形』かなり感情的なタイプらしい。だが、戦い方は自分の強味を理解した非常に理論的なものだ。これがあくまで平和な国の一高校生である僕と『人形』の差か。

こちらの気が緩むのを待っているのか以前と同じように辺りを跳ね回り続ける相手、相変わらず嫌になる速さだ。

この戦い、こちらが勝つ方法が無い訳では無い。

天が言うには相手の『脚の人形』はかなり有名な部類に入る『人形』らしい。曰く、あまりに極端なスペックを持つ『人形』。

兵器や何かの世界でもよくあることだが、速さを追究するあまり防御力を疎かにした設計になってしまう。

まあそれでも普通の人間よりはよっぽど頑丈に出来ているが、化け物クラスがうじゃうじゃしている『遊戯』においては致命的な弱み、アキレス腱となる。

「まあ、相手に当てられないんじゃない意味無いけど」
そこをどうにかするための策だが、効果の程は未だ不明だ。

「無駄話はいいから、蒼」
「わかつてる」

会話を隙と見たかこちらに飛び掛かってくる相手に剣を振る。相手の姿は殆ど視認出来ないから勘で補う。

「無駄！」
前回と同じ空気を蹴つての跳躍、さらに今回は近くの壁を使い別の角度から連続的な攻撃。

直撃、内臓や脳みそその他諸々が掻き回される感覚。天と出会って『遊戯』に参加するようになったと言ってもここまで本格的なダメージを受けたのはこれが初めてだ。

そうか、これが、今まではなんとなくそれっぽいことをしてきたにすぎない。これこそが真の意味での死合、死を覚悟するなんて領域はとつくに越えている。既に死んでいるんじゃないかという錯覚すら覚える程に辺りにバラ撒かれる死の臭い。

「そうか、そうなのか」
「な、なんだよ、急に」
「いやいや、ちよつとね」

何を思っただ火音が『遊戯』に参加したかは知らないがこれは駄目だ。こんな非日常を越えた非日常、僕からすれば最大限に忌避しなくてはならない場所に火音がいていいはずがない。

本人の意思なんて関係無い、僕が危険だと判断したからその危険

を排除する。人間なんてそんなものだろう。いや、全ての人間がそうだとはいわれないが僕のような人間はこれくらいが妥当だ。

「ほら、かかって来なよ」

開始数分、一撃喰らっただけでダウン寸前だがそれを表に出したら終わりだ。

「そ、蒼、何かいつもと雰囲気違うわよ?」

「うん、まあね」

脳からアドレナリンが発散されるのが手に取るようにわかる。全身の血流が感じられ、無いはずの右眼が熱い。

戦いの高揚感と、怒りが混じり合って手が着けられない。

「とりあえず天、あれお願い」

「了解よ」

まだ用意した策は試していない、さっきやったことは前回と同じなのだから避けられるのもわかっていた。まあ、まさかあそこまでキツイ反撃を喰らうとは思ってなかったが。

「何をしても無駄だ!」

「やってみなければ」

「わからないわよ」

『人形』と所有者のシンクロ度合いは肉体の共有率で決まる。正確には共有率ではなくて所有者がどこまでのレベルで自分の体を『人形』に供給しているかで決まるのだが、右目の全てを天に完全譲渡している僕の場合シンクロの度合いは最高クラスになっている。故に、所有者の身体能力、『人形』の異能、所有者の能力の基本スペックは他の『遊戯』参加者達の中でも最強級。この赤髪の『人形』にも勝てない訳が無い。

意識を集中、特に死角となっている右目側からの攻撃に気を付ける。

「何度やっても意味無い!」

二度あることはなんとやら、思い切り振った剣はまたしてもかわされる。

「今！」

こちらから相手に触れることは出来ない。しかし、相手からこちらに触れてくれるならどうだろうか？

内臓を刳られるような敵のタツクルを耐え、相手を拘束する。

「気持ち悪い手で触るな」

ギリギリで掴めない、それも予想通り。策が二段構えなんて基本中の基本だろう。

「『複写』『鎖』」

僕ごと敵を縛るように現れる鎖、僕が天にあげた服から考えた策だが策のメインは鎖ではなく鎖を出すタイミングだろう。

僕は完全に囷、敵の一発目の攻撃に対してこれを使わなかったのはタイミングを計るのと相手を油断させるため。これでもかというくらいありふれた作戦だが、使われやすいということは汎用性が高く便利だということだ。

「これで、チエックメイトだ」

僕の手を避ける為にバランスを崩した相手はこの鎖を抜けられない。

「『加速』」

暴風、暴れる風と書くが今通ったものはまさにそう。敵の速さとそれに伴う風は今までの戦いで散々経験した、そう思っていた。だけど、違う。

体全体を鏢にかけられるような痛みが走る。高速で流動する風に乗った砂は刃物と変わらない。

「予想より強いから驚いた、次からは本気で殺す」

火音が買い与えたものだろうか、趣味のよい快活そうな服はズタズタに、皮は一部が剥け、天とは趣の異なる健康的な色合いの肌には切り傷が。傷口にうつすらと血が滲む様は人形だとは思えない。

「そうは言っても僕よりボロボロだよ」

「うるさい、火音を苦しめる馬鹿兄の癖に」

「それでも僕を火音の兄とは認めてくれるんだね、君は」

「ヘル」

「ん？」

「私の名前」

『人形』というのは相手に伝わり難いように名乗らなくてはならないというルールでもあるのだろうか。

「お前はそこそこ強いみたいだから教えてやる」

「そりゃどうも」

騎士道精神というか武士道精神というか、随分と礼節を重んじるようだ。僕達を眼の敵にするのも正義感と火音を思っでの行動のようだし、本来なら友好的な関係を築きたい相手ではあるのだが致し方ない。

「僕の名前は」

「知ってる！」

戦闘再開、今までの倍以上の速度で跳ね回るヘル、目で追うことすら辛い。

「天、さっきのもう一回行くよ」

「でも、さっきは」

「いいから」

やるしかない。もともと分の悪い勝負だったのだ、それがまた少し不利になったくらいでどうこう言ってもしょうがない。

「そういうのは馬鹿の一つ覚えと言っのよ、蒼」

「馬鹿力って言葉もあるだろ？」

実際、効かないとわかった行動を何回もするなど馬鹿以外の何物でもない。

「それでも、やるしかない」

先程の思考と同じ言葉を口にする。自分に言い聞かせるように、自分に命令するように。

僕は平凡で平穩で平和な生活がグダグタと飽きる程に続けばいいと願う人間だ。一般からすれば気持ち悪いことこの上ない思考で異常かもしれないけど、異常が日常を願っちゃいけない道理は無い。

ただ、至高の平穩を、日常の蔓延を、異端の滅殺を。

思考が単一化してくる。ただ目の前の異端を排除せよと脳ではなく空洞となつて右の眼窩が叫ぶ。

「相変わらず、遅い！」

いつ後ろに来たのだらう、自身すら削る神速は他の追隨を許さない。

ヘル、名は体を表すというが彼女の場合は正にそうだらう。あまりにも、ただあまりにも速い彼女。その一撃は不可避であり、誰も彼女に追いつけない。

死、死としか表現出来ない絶対的な能力。

そんな速度の攻撃を直前まで思考に没頭していた僕が避けられるはずも無く。

「蒼っ！」

左肩の肉を抉られる。

「問題無いよ」

天の『複写』による鎖の生成はヘルを倒す為の肝だ。下手にこちらに気を取られて肝心な時に能力が使えなくては困る。

「でも…」

「いいから、来る」

先程と比べて攻撃と攻撃の間隔が短くなっている。やはり能力を使用するヘルからしても『加速』の能力はダメージが大きいらしい。

相手が早期決着を狙うなら僕は耐えればいい訳なのだが、既に体がポロポロな以上こちらでも長期戦は勘弁だ。

「相手の土俵に合わせるしかない、か」

僕らの反撃を警戒してだらうか、初期段階と違いヘルは僕に直接ぶつかってダメージを与えるというよりも体を少しずつ削る攻撃をしてきている。

その、攻撃にわざと当たりに行く。僕の役割はヘルの攻撃を受けることによりヘルの動きを止めることだ。敵もそれをわかって僕の肩などをちまちま削る方式に変えたのだらうが、そうはさせない。

例えば自分が瀕死になるのが、止める。肉を切らせて骨を断つ。いや、骨を断たせて肉を切る、か。

割に合わないダメージを受けようが何しようが神速を誇るこの相手に攻撃を当てるのが最重要課題。

「止まった、な」

ヘルは攻撃は僕の腹部にクリーンヒットしている。あたかも飛び付いてきたヘルを僕が抱きしめついているかのような体勢。

「『複写』『鎖』」

ほぼ確実に相手は止めた、天のタイミングも完璧、相手の体勢も逃げには向かない。今度こそ、とった。

「『加速』『加速』『加速』『加速』『加速』『加速』」

とったはずだったが、抜けられた。能力使用では明らかにこちらが速かった。ヘルは意図せず僕にぶつかり体勢を崩したはずだったが。しかし、それでも、鎖の生成すら間に合わなかった。

確かに天の能力は使用してから物体が完成するまでに多少のラグがある。それは決して小さいとは言えないだろう。

だがそれでも、今のはおかしい。

今で駄目ならどうやって勝つ。いや、勝つ以前にどうやって攻撃すればいい？

何をしても、どうやっても、ダメージを与えることが出来ない。

なんだその理不尽は。

火音を守りたいのに、その『人形』にすら勝てない。なんだそのふがいなさは。

僕の日常が汚され続ける。なんだその吐き気を催す事実は。

そんなこと全て、あってはならない。存在しちゃいけない。

だから僕はここで倒れる訳にはいかない。ヘルを止めるために喰らったダメージは小さくないし、さっきの理不尽な『加速』に巻き込まれたことでさらに傷を負った。それがどうした？

あの紅い死を止めるしかない。逃れられない、触れられない、そんなこと認めてたまるか。

「天、まだ大丈夫？」

「さつきから攻撃を受けてるのはあなたの方なのよ。なんで私がへばらなきゃいけないの？馬鹿にしてるの？まあ、ヘタレな蒼がここで倒れても私は何も驚かないけど。だからさつきと倒れちゃっていいのよ。私が壊されても既に目を失ってるあなたにこれ以上のペナルティーは無いんだから」

「なんだ、心配してくれてるの？」

「違うわよ」

「まあ、でも、ここで負ける訳にはいかないよ」

先も言ったように。

「ここから先は矜持の問題だ。僕の日常を守る、それを達成出来るか否かの問題だ。既に天はもう僕の日常というか守らなきゃいけないものだからね、死なせはしないよ」

天がいなくなつて『人形』の所有者じゃなくなれば火音を守れないというのも少なからずあるのだからけど、まだ会って間もない天をどういう訳か守らなきゃいけない気がする。

「なら、せいぜい頑張りなさい。あのブンブン五月蠅く飛び回る羽虫を、落とすわよ」

「了解」

思考がクリアになる。視界がクリアになる。

ただ白熱し、暴走するだけだった感情が指向性を持つ。

天とダイレクトに繋がる感覚。彼女の冷静さが僕を程よくクールダウンさせる。

「今なら、見える」

あまりの速さに自身の身を削り、その髪の色と同色の血液を撒き散らしながら進むヘル。その姿がかつてない程綺麗に、確実に、的確に目視出来る。

風切り音、これなら、かわせる。

「そんな、ありえない！」

避けた。

高速を、神速を、最速を誇り死の名を持つ『脚の人形』の攻撃を。絶対不可避、放たれば避けることが出来ないその一撃を、避けた。

「おかしい、おかしい、おかしい、私が一番速いんだ！こんなありえない！」

ありえないはこちらの台詞だ。

今までで最高のコンディション。おそらく、『人形』と所有者の共鳴度合いのハイエンド。そんな状態ですら、避けるのがギリギリだなんて。

「天、やっぱり避けたくえで反撃しようなんて虫が良すぎたみたいだ。今まで通り体を張るよ」

「別に、あなたの好きなようにしなさい」

「そうさせていただきますよ」

「ごちゃごちゃ喋るな、さつさと死んじやえ！」

背後からの攻撃、死角からの攻撃ではあったが『右目』で追えてたから問題は無い。

辺りの状態がなんとなくだが把握出来る。無いはずの目で『視ている』気がする。

「今度こそ捕まえ、た」

反転して、受け止める。

「『複製』」

「『加速』」

ああ、また捕らえられない。また逃した。それでも、さつきまでよりは惜しかった。

「次！」

「馬鹿に、するなっ！」

冷静さを失っていたのだろうか、それとも限界が近かったのだろうか。まあそれはどちらでもいいことだけど、今までの様子見を捨て、すぐさま次の攻撃に移ったヘルの姿は僕には非常に遅く見えた。足は走る為にあるという理念を表すかのような、制作者の狂気を

誇示するかのようなその『人形』。何者よりも『加速』して、何物だろつと追い付けない。

そんな存在が、僕からすれば非常に腹の立つ非日常が、あたかも普通の少女が頑張つて走っているかのような速度に見えたのはさすがにおかしいだろつ。

希望的観測で、自分の能力を過信した思い上がりで、未熟さ故の勘違いだろつ。

とにかく、何度目だろつか、何度目の正直かも、何度あることが何度あったのかもわからないが。その時僕はようやく『脚の人形』へルを、倒したのだ。

第一部 三章、その一（後書き）

ようやく次話投稿出来ましたあああああつあああつあああああああ
あああああああああ！！！！！！！！！

三か月ぶり、ですかね…

不定期更新とは言いましたけどあまりに酷いですね。

この場を借りて謝罪します本当に申し訳ありませんでした。

さて、話の方はようやく戦闘というかに入ります。

ただし、作者やキャラクターの暴走もさらに酷くなっていくと思いますのでどうか生温かい目で見守っていただけると幸いです。

また、罵倒でもいいので感想や意見を頂けると私が発狂します。

では、また次回お会いしましょう。（もう会いたくねーよとかいう

声は華麗にスル）

第一部 三章、その二

「私達の勝ちね」

「そんな、ありえない、なんで……」

茫然と呟く言葉、最後の方は声が小さくて聞き取れない。

まあ、僕から見ても勝てたのが不思議なくらいなのだ。自分の能力に自信があつたであろうヘルからすればその屈辱はいかほどか。

「それで、まあ僕達が勝つた訳だから」

「早く壊せ……」

「いや……」

「私がお前達に負けたのは事実、早く壊せばいいだろ！」

戦闘中の貫禄は何処へ行ったのか、子供が駄々をこねているようにしか見えない。

「いや、だから話を……」

火音の『人形』であるヘルを破壊するということは則ち、二人の共有部位である両脚を火音から奪うことになる。そんなこと僕がする訳が無い。

「いいから早く壊せって言ってるだろ！」

「敗者は破壊される以外にも勝者の言いなりになるつても王道じゃないか。いいから話を聞いてくれ」

「……」

沈黙を返されても困る。

「だから……」

「違つよ」

背後から声。

「まだ私がいる」

そうだ、所有物を倒したら持ち主が現れるのが道理。いや、素直に『人形』を破壊すればそんなことは起きないのだが僕はそうしなかつた。

「まだ負けてない」

ならば、ヘルを倒したら誰が来る？

「なんでヘルを壊さなかったかはわからないけど」

いや、そんな風に考えなくても声でわかってしまう。

こここのところは意図的に遠ざけているとはいえ一緒に暮らしている相手だ、聞き慣れている。

「第二ラウンド開始だよ、お兄ちゃん」

それでも、最愛の妹　御任火音と対峙している現実から逃避したとしても罰はあたるまい。

「それにしても、相変わらずお兄ちゃんはヘタレだね。せつかく倒した『人形』を壊さないなんて」

「否定はしないさ」

下手をすれば脚どころか命を失いかねない環境に火音を置き続けるのは僕のエゴだ。日常を維持したいというエゴだ。

「まったくヘルも、駄目って言ったのに単独行動しちゃうし。私の周りにはどうしてこんなに手が掛かる人しかいないのやら」

軽口、普段通りの特に意味も無く思い付きで話しているような言葉。僕が愛して止まず、永遠に続けばいいと思う物。

「いやいや、錯乱し過ぎだ。こんなのは、違う」

異常の中での正常、異端の中での平凡、非日常の中での、日常。そんなものが僕の求めている物な訳無い。

「お兄ちゃん、独り言？前からそういうのは止めてって言うてるでしょ」

「悪い悪い、つい癖で。おいおい直してくよ」

「そうやって毎回ごまかす」

「今回は本当だよ、心からの言葉」

「胡散臭いなあ、もう。まあいいや。じゃあさ、独り言止めるついでに人殺しも止めない？」

ああ、もう、だから嫌だったんだ。くるりと反転する、コインの

裏と表のように。

日常から非日常が沸いて来る。

「まあ、今回は流されて普通に会話しちゃった僕も悪いのかな」

「いきなり独り言してるじゃん。で、どうなの？お兄ちゃん的には止める気あるの？」

「何を？」

「殺人、連続腕切り事件」

「火音、話を聞いてくれないか」

「蒼、無駄よ」

唐突に話に割り込んでくる天、随分と刺々しい口調だ。まあこんな状況でピリピリするなという方が無理か。

「いや、でも誤解をとけるかもしれないじゃないか」

猪突猛進を体言したかのようなヘルはまだしも、火音なら十分に上には話は通じるはずだ。

「そもそもあの子、火音は自分から『遊戯』に参加した。なら、何かしらの目的があるはずよ」

「だから戦闘は避けられないって？」

「ええ、そうね」

それは短絡的な思考だろう。事実、ヘルは『人形』として『遊戯』のルールに従ったというよりは純粹に正義感から僕達を敵視していたようだし。

「もういいよ、お兄ちゃん」

「どういう意味？」

「もうわかってるから」

決意を秘めた顔。ああ、その雰囲気には覚えがある。覚えがあるも何も、僕だ。ただひたすらに日常を願い、他を省みない僕。言うてしまえば、異端。

「その『人形』がいけないんですよ。お兄ちゃんが悪くないとは言わないけど、お兄ちゃんは自分から人殺しするような人じゃないし。だから、『遊戯』をしよう。私がお兄ちゃんをこんな馬鹿馬鹿しい

戦いから解放してあげるよ」

光が凝縮しだす。火音の背後に集まって、形を成す。

「蒼、マズいわよ」

マズい？何が？

あの光か？ああ、確かに。あれは駄目だ。あんな物、おかしいじゃないか。

あんな物は、おかしい。おかしい物は無い。おかしい物は見えない。おかしい物は、あっちゃいけない。

記憶の無い僕だが、実は一つだけ覚えていることがある。僕が記憶を失ったのは五歳にもならない時のはずらしいので。正常な記憶の持ち主でもその辺りの記憶があるのは珍しいだろう。

場所はわからないけど、空。雲一つ無い蒼空。

雲量で言うならば確実に零だろうし、天気は確実に快晴。

空なんて覚えていても何の役にも立たないじゃないかなんて言われそうだが、美しい物はそれだけで十分に価値がある。

そう、美しかったのだ。澄み切った空は本当に美しかった。蒼と書いて『そら』と読む僕の名前、その変わった読みの意味を簡単に納得出来てしまうような蒼色の美しさ。

故に、あれは僕の日常の象徴だ。僕が日常を愛する理由である記憶喪失、その中でも消えなかった唯一の『記憶』。

あの美しい空を、あの澄み切った『蒼空』を誰にも汚させはしない。

「そつだ、あんな物、認めない」

空を汚す異端は排除する。

そして紡がれるは世界創造の歌。

「無限に広がる蒼空よ」

それは何への呼び掛けか。

「あなたは不変、あなたは不朽」

己が内に眠る渴望、それを叶える為に呼び掛ける対象は一体何なのか。

「どんな汚れも寄せ付けず、永劫たる輝きで私を包む」

わからない。たがしかし、確かに言えることがある。

「誰もあなたを傷付けられず、誰もあなたに触れられない」

この願いは確かに自分の物である。「空」を汚させない、その渴望が満たされるならば悪魔に魂を売ることすら厭わない。

『甘美なる悠久の蒼空』シェーンヒンメル・レーディング

今、蒼空の世界が現れる。

「子供時代の人形遊び、あれには私も心躍った」

廃ビル街の一角、今にも倒壊しそうなビルの屋上にその男はいた。

「なんせ全て自分の思うままなのだから！ 姫を救う英雄となるも、

庶民として妻と平和に暮らすも自由。武道だろうが魔導だろうが一瞬で極めることが出来る」

誰に語りかけるでもなく黒衣の男は言葉を紡ぐ。

「そこでは私が神だった。あれは確かに私の世界だった」

陶酔に浸っているように見えるがその眼は冷めているようにも見える。

いや、今現在黒衣の男を見ている人間なんて一人もいないのだからどう見えるかなんて関係無いし、不確定だ

「人形遊びは世界を創る儀式、己の願いを一時的にとはいえ叶える物。ならば至高の人形は持ち主の願いを完全に叶える道具だし、それに近いものも程度の差はあれ願いを具現化させるくらいなら到るだろう」

だからこそ『人形』の所有者達はわざわざ危険な戦いに身を投じる。

「君の願いは特に面白いよ、御任蒼」

この近くで今も戦っているであろう少年へ。

「非日常を認めない、異端を許さない。この眼に写る美しい空に異

物なんて存在しない。馬鹿馬鹿しいまでの現実逃避だ。コインの裏を見て傷付くことを恐れて、裏を見ようとしない。表しかないコインなんてそれこそ不自然極まりない異端だというのに」

面白いなどの言いながら、漏らす言葉の内容は願いの否定、矛盾の指摘以外の何物でもない。

「君は気付いてないかもしれないが君の願いは逃避だよ。許さない、空を汚させないなんて言っているがまだ弱い。否定には届かない、君は見たくない物を見ないようにしているだけだ。故に君の能力は『最弱の鎖』^{レディング}」

その能力ではまだ弱いと。

「確かに今のままでも十分に魅力的だ。逃避はその弱さ故に強いし、醜さ故に美しい。ただ、そのままでは生き残れないだろう」

この極限の遊びの中では、いずれ通用しなくなる。

「さあ、『遊戯』もようやく本番だ。何度も言うように私は君に期待しているんだよ御任蒼。私を、楽しませてくれ」

常時ニヤニヤと笑っていた男の笑みがさらに深くなる。

風が吹くとそこに男はもういなかった。

火音の後ろに集まった光がどんどんその明度を落とし消えていく。

「蒼、あなた……」

「たぶん、これが僕的能力」

僕にとって認め難い非日常が、消える。

「なるほど、さっきヘルを倒せたのもあなたの能力が少し発動していたのね」

「みたいだね」

最後の最後でヘルの動きを遅く感じたのは勘違いじゃなくて実際に遅くなっていたということか。

何はともあれ、おそらくこれで詰みだ。火音に僕を攻撃する術はもう無い。

「火音、話を聞いてくれ」

「いいよ」

「僕は連続腕切り事件の犯人じゃない」

日常を愛する僕がわざわざそんなことをする意味が無い。

「信じられないよ」

「僕をそんなに信じられない？」

「お兄ちゃんを責めてる訳じゃないんだよ。その『人形』が悪いんでしょ？お兄ちゃんはそいつに唆されたんじゃないの？」

なんでそんなことを思い付く。僕を犯人と疑うなら、同じ『人形』の所有者だからわからなくもない。その疑いをなんでわざわざ天の責任にする。

不自然だ。ならば、何かあったのか？

「火音、お前……」

「それは違うよ」

僕の言葉を遮る言葉。僕と火音の間に入る人影。

「なかなか追って来ないから、こっちから来ちゃったよ御任君」

ニコニコしながらさも楽しそうに言う先輩。だけどこの人が今ここに現れたということは。

「蒼っ！」

「わかつてる、『甘美なる悠久の蒼空』」

相手の能力は未知数だが、弱体化くらいは出来るはず。

「自分の世界に異物を許さない、強い能力だけどその異物を認識出来ないと意味無いんじゃないかな？」

「お兄ちゃん、後ろ！」

僕は今まで三回、黒衣の男を入れれば四回の戦闘をしている訳だがその全てが相手は一人だった。だがしかし、本来の『遊戯』は二対二の戦いなのだ。それを失念していたのは過去最悪のミスだ。

頭部に強い衝撃を受ける。世界が揺れる。火音と天が何か叫んでいる気がするが聞こえない。意識が、落ちる。その際に。

「お兄さんの心配してる場合？」

その言葉がどういう状況で誰に向かって放たれたかなんて考える

までもない。

火音を守る、それが『遊戯』に参加した理由のはずなのに。何も、出来ない。

第一部 三章、その二（後書き）

またまたお久しぶりです！

更新遅いのはデフォです！

はい、言い訳終わり！

そういえばツイッターをしてるので興味のある方は是非どうぞ！

後、いつものように感想くれたら発狂します。

ID名はMINAMIGAWAです。

第一部 三章、その三

声が響く、寝起きでぼやけた視界に味気の無い天井が広がる。

「起きなさい、起きなさいよ、馬鹿蒼」

「もう起きてるよ」

「ええそう、なら状況はわかる？」

起きた直後の朦朧とした頭と、そこに響く吐き気を催す程の痛みで思考が上手く纏まらない。

「ここは……」

「わかったわ、あなたに期待したのが間違이었다。説明が必要みたいね」

もう少しオブラートに包んでほしくはあるが、テキパキと話を進めてくれるのはありがたい。

「ここはあなたの部屋よ。あの時あなたは奇襲を受けて気絶した。

それに気を取られたあなたの妹もやられて」

「そうだ！火音は？火音はどうなった！」

「生きてる。とりあえず、生きてはいるみたいだ。私は火音の『人形』だからわかる」

部屋の隅で小さくなっていたヘルが言う。

「どうしてヘルがここにいる？そもそもなんでまだ誰も殺されていない？」

捕まった火音にしろ、あの場で気絶した僕にしろ小賀浦先輩にすれば邪魔物を始末する絶好のチャンスだっただろう。

「逃がしてくれたのよ、ヘルが。私と蒼を抱えて逃げてくれたの。

さすがに最速の『人形』には追い付けなかったみたいね」

『人形』の異能は身を守る為にある。ヘルの『加速』も本来は相手から逃げるために使うものだ。だが。

「お前は、火音を見捨てたのか！自分の所有者を！あの『加速』があれば火音を助けることも出来たんじゃないのか！？」

「黙りなさい！」

一喝、沈黙が生まれる。わかっている、ヘルは何も悪くない。彼女に当たってもそれは八つ当たりにはかならない。

「いくら速いといってもあの状況で彼女を助けるのはほぼ無理よ。それだったら、一旦引いて態勢を立て直すのが最善。ヘルはそれをわかって行動していたわ。それに対してあなたは何？新しく手に入れた力を過信して周辺の警戒という超基本事項を怠った。情けないわ蒼。あなたも、そして私もあまりに締まらない」

「わかってる」

「ええ、だったらどうするの？」

それを僕に聞くのか。

「お願いだ、御任蒼。火音を助けてくれ。話は『右眼』から全部聞いた。私達の勘違いだ。私は何をされてもいいから、だから火音を」

だからそんなに何度も言わなくてもわかっている。

「私は何をされてもいいって、そんなわざわざ取って喰ったりしないよ。火音は僕の大事な妹だ。何がなんでも助け出す」

そうだ、言っただろう守るって。

「僕の『空』は汚させない」

「よく言ったわ。このつまらない茶番劇をさっさと終わらせましよう」

「でも、相手の場所はわからないんじゃない」

やる気になったところで悪いが、相手の場所がわからないのではどうしようもない。

「いえ、わかるわ」

「それもまた『人形』のビックリ能力か何か？」

「あら、日常日常言う割には蒼も随分『遊戯』に慣れてきたじゃない。でも違っわ、今回は何かの能力じゃなくて単なる文明の力よ」

「まあ、これだけ色々起きれば多少は慣れるよ。それで、文明っていうのは？」

「これよ」

僕の携帯、何かストラップを付けるでもなく色も無難な黒。そんな味気無い携帯の画面を見せられる。

受信メールの確認画面、携帯の画面の中ではおそらく最も見ているであろうもの。

メールの差出人は、小賀浦祈咲。

「挑戦状とはまた粋な計らいだね」

「そうね、楽しみになってきたわ」

「それじゃあ」

「ええ、行きましょう」

「結構早かったね、御任君」

「大事な妹を誘拐されたんだから当然ですよ」

「大丈夫、まだ妹さんは無事よ」

「まだが付いてる時点で安心出来ません」

話ながらも辺りを伺う、前回の二の舞にはならない。

「そんなに警戒しなくてもいいのに。今回は真正面から行くから」

「ありがたいことです」

「いえいえ、どうも」

普段と変わらないはずの先輩から感じる微かな違和感。この人はこんな人だったか、こんな口調だったか。小賀浦祈咲という人間のとなりが掴めなくなる。それはやはり先輩がどうしようもなく異常な人間だということだ。

会話が途切れ、数瞬の間。

「無限に広がる蒼空よ」

「あなたの腕で抱いてほしい」

同時に始まる詠唱、そうだ小賀浦先輩もなんらかの能力を持っていてもおかしくない。

「あなたは不変、あなたは不朽」

「私もあなたを抱きしめるから」

「どんな汚れも寄せ付けず、永劫たる輝きで私を包む」

「もう離れる必要は無い」

互いの詠唱を塗り潰すように歌い合う。己の渴望こそが正義だと、部外者は黙っている。

「誰もあなたを傷付けられず、誰もあなたに触れられない」

「ただ永遠に抱き合いましょ」

醜いエゴの押し付け合いで構わない。それで火音が救えるのなら。

『甘美なる悠久の蒼空』

『死屍狂宴 魔の軍勢』
レギオンスタンスマカブル

この『遊戯』に、今度こそ決着を付けよう。

無音、互いに必殺の技を発動したにも関わらず一切の音が無い。

「勝った」

僕の能力は相手の弱体化だ、所有者や『人形』の異能どころか身体能力にすら影響を及ぼす。

その最終的な効果は相手の能力の無効化、ならば今の無音は小賀浦先輩の能力が発動しなかったと考えるべきだ。

「天、畳み掛けるぞ」

「待つて、あれ」

真正面から行くと言った割には姿を見せてなかった先輩の『人形』、天が指差した先にはおそらくそれらしきものがあつた。

「ビックリした？ちよっとしたドッキリで隠れてもらつてたんだよ」

ビックリというかドッキリというかそんなこと関係無くただ感じたのは、気持ち悪い。

「あんまり反応よくないね、残念」

反応してない訳ではない、目の前の物体があまりに常識外れなので反応出来ないだけだ。

「それは『人形』なの？……」

天の言いたいことはよくわかる。僕の出会った『人形』は天にしるヘルにしる人の形をしていた。そもそも、『人形』が人を目指して作られたのだから当然だろう。

しかし目の前のあれは違う。腕の塊。ありとあらゆる場所から腕が生え、蠢き、掴み合う。あまりに密集しているせいで球体じみて見える物体。

「うん、私の『人形』」

「そんな、さっきの姿とは全然違うじゃない」

「そうか、天は前にあの『人形』の姿を見ているのか。」

「だってこれが私の能力だもん」

「『複写』」

「倒れる」

話の途中だが関係無い。先輩の言葉に感じた悪寒、あれは駄目だ。それに相手の能力が無事に発動している時点で火音より格上の相手だ。

「効かないよ」

効かない、冗談がキツイ。剣を受け止めたうえでへし折るというのはむしろこちらにダメージだ。

「逃げて、蒼」

「わかってるけどっ」

「避けられないよね」

速さという点ではヘルには遠く及ばないが、重く、数が多い。

大量の腕による打撃、強化された肉体であるはずなのに突き抜けるような痛みが走る。

「なんで、どうして弱くならない？なんで僕の世界にいる」

いくら強力な『人形』と所有者でも僕の能力を喰らって影響が出ない訳が無い。弱くなるはずなのに、今の攻撃はヘルのそれよりも強い。

「手を繋いでいるから」

「は？」

「もう皆私から離れていかないの、ずっと手を繋いで皆で抱き合い踊り明かす」

「やっぱり、その腕は」

「そう、皆の腕」

「正確に言くと被害者の腕ね、趣味が悪い」

腕を必要とする能力、天に覚えが無い訳だ。それは『人形』じゃなくて人間の方の力だったのだから。

「手を組むとか手を結ぶって言うでしょう？皆私の仲間だから、私に力を貸してくれるの」

強化の能力、それが僕の弱体化と打ち消しあっているのか。それに集めた腕の分だけ力が強くなるのだとすれば、相手はかなり殺している。

「愛されない故の愛されたいという願い、直接的で直情的ね。馬鹿馬鹿しいし、そもそもあなたのそれは自業自得でしょう？」

「所詮作られただけの人形にはわからないよ」

「言ってくれるわね。その人形に願いを叶えてもらってるだけの癖に」

「そう、でも今はこの子もちゃんと私の言うことを聞いてくれるよ」「それはどういう」

「天、あの『人形』なんで喋らない？」

小賀浦先輩の能力であるはずの腕が本人ではなくその『人形』に現れている。そこから考えられるのは。

「仲間の腕は私の腕、共有でいっぱいあげたら壊れちゃった。事故だったんだけどね、まあ結果オーライかなって。いやいや、普段の行いがいいといういろいろ良いことあるね」

だからどいつもこいつも突然冗談を混ぜながら話すのを止める。

気持ち悪い、気味が悪い。明らかに異常とわかるはずにそれが何処か正常と被って見える。それどころかそれが本来の姿だったように思えてくる。

「下種ね」

「何？」

「うちの蒼もかなりの間抜けだけどあなたよりはマシよ。蒼の『人形』でよかったわ。さっきのあなたの言葉を借りるなら、普段の行

「いいいろいろ良いことあるわね」

「そんな私にここで殺されるんだよ？」

「ありえないわ。あなたと蒼なら蒼の方が強い。というか、あなたがフラれてばかりいるって聞いて同じ女として少しは同情したけど、やっぱり完全な自業自得じゃない」

「同じ、女だって……馬鹿にしないでよ、変態の趣味で生まれた作り物風情が偉そうに喋らないでよ」

「天が先輩の気を引いてくれるのはありがたいが、これはわかりやすくピンチだ。」

「死ね」

「無理な相談ね」

「天の前に入る、『複写』を使う暇が無いので素手だが仕方ない。瞬間、衝撃。」

「簡単に言うなら、ヘルクラスの速度でさっきの『人形』レベルの重さの攻撃を喰らうとどうなる？」

「天、言い過ぎだよ」

「あら、蒼が必ず守ってくれるんでしょう？」

「こついつ時だけ信頼が重いよ」

「まあでも役にたったでしょう？」

「腕一本は辛いけどね」

「そう、先輩の攻撃を受け止めたことで既に左手の感覚は無くなっている。」

「何の話してるの？」

「時間稼ぎに成功したけど、その代償が腕一本はキツイという話ですよ、先輩」

「え？……」

「忘れましたか、僕達には最速がついている」

「完全に頼り切ってる癖にカッコつけても無駄よ」

「頼り切ってるんじゃないわ。まあ、分業ってやつだよ。ね、ヘル」
「そっだな」

恐ろしい敵程味方になれば心強い。これほどわかりやすい理屈もあるまい。

「火音、大丈夫か？」

「平気だよ、ヘル。ありがとう」

声を聞く限り無事らしい、よかった。

声の主の姿が目に入る。先程俺を襲った時とは違ういつもの姿。

「火音」

「お兄ちゃん。うん、わかってる」

「協力してくれるか？」

「もちろん、早く終わらせて一緒にご飯食べようねお兄ちゃん？」

「上等」

第一部 三章、その三（後書き）

皆さんお久しぶりです？

いや、更新が遅いのは…

いつものことですよ、はい！

そんなこんななミナミガワですが、これからも宜しくお願いします

第一部 三章、その四

「ああ、しまった。妹さんを放置しておくべきじゃなかったね」

「放置も何も、もともと大して気にかけてなかったじゃないか」

「何のことかな？」

「私が助けに行った時、火音は軽く縛られて意識が無かっただけだった。あんなの火音の意識が戻れば簡単に解かれる」

「確かに、大して警戒してなかったかもね」

「余裕ですか、先輩」

二人、正確には四体を同時に相手に出来るだなんて舐め過ぎだ。

「違うよ。だって御任君、君がいる限り火音ちゃんは戦力外でしょ？」

「……」

「否定しないの？さつきはあんなに共闘すり気満々だったじゃない。実は私の読みが外れたんじゃないかって不安だったんだよ？」

確かにこの場は火音と協力しなければ切り抜けられないこともわかってる。火音が来てくれて嬉しかったことも事実。だがしかし、僕が認めない物を無かったことにするという僕的能力が火音の能力の発動を許すのか。

「僕は……」

僕は『火音』を受け入れられるのか？

「お兄ちゃん。昔からお兄ちゃんは変わった人だったよね」

沈黙を保っていた火音が口を開く。

「昔話？いいよ、待つてあげる」

ニヤニヤしながら立つ小賀浦先輩、その後ろに立つ腕の塊のような『人形』、厳しい顔で先輩を睨む天、不安そうな顔で自分の所有者を見上げるヘル。そして、その視線の先にはこの場に最もいてほしくない火音。

異常な光景、異質な風景。でも、全員に全員の願いがあって、理

由があつてここにいる。

「私は、自分でもわかるけど少し精神的に幼い部分があるし、両親があんなだから昔から同級生とかに意地悪されちゃったりしてた」
そんな光景の中で、火音が語るのとは何か。

自分は弱い。それが御任火音の最初の自己分析だ。メンタルにするバイタルにしる、人並みの強さが無い、人並みの弱さしか無い。もちろん当時はそこまではつきりと考えていた訳ではないけど、とにかく弱いということはわかっていた。

何故そう思つたか、おそらく軽いイジメのようなものを受けていたのもその要因の一つだろう。

「私は、自分でもわかるけど少し精神的に幼い部分があるし、両親があんなだから昔から同級生とかに意地悪されちゃったりしてた」
今まで、誰にも話したことが無い秘密を話す。

でもそれは辛かつたから話さなかつたんじゃない。話さなかつたのはあくまで兄が心配するからで、火音にとってこの出来事は思い出したいくない類の物では無い。

「でも辛くはなかつた」
何故なら。

「だつてお兄ちゃんが守ってくれたから」 言葉からも拳からも、自分の身が傷付くのなんて全く気にしないで。

「私にとつてお兄ちゃんは光なんだよ」

いつでも何処でも、自分を照らして守ってくれるもの。

「お兄ちゃんは強かつた」
だから届かない。

ありふれた弱さを、異常なまでの強さで塗り潰してそこにいる兄には。

「だけど私は弱い」

どんなに必死に走つても、光には届かない。いや、そもそも天高く輝く光を地上を走って捕まえられないはずが無い。

「嫌だった」

翼が欲しい。地を駆けるんじゃ届かない、光を掴む為に天を翔ける翼が必要だ。

「だってお兄ちゃん、いつも苦しそうなんだもん……」
その光が常に苦勞し、歎き、傷付いていることを私は知ってるから。

「守られるだけは嫌で……」

同じステージに立ちたい。助けられ、守られ、救われて、相手の足を掬う羽目になるのはもうたくさんだ。

「だからお兄ちゃんを、今度は私が守る！」

私は、光を守る光になりたい。

「光は常にそこにあるもの」

美しくも冷たい排他の空とも、狂しく犯しい魔軍の輪舞とも違う。

「遍く光は世界を照らし、穢れを払う」

見るものに祝福を与えるような優しくも力強い光。

「永劫変わらぬ光の中で私はあなただけを守り続けよう」

その光を纏う少女にあえて言葉を当てるならば。

「其は光速にして神速、恵を与える光の先兵」

天使、というしか無いだろう。

「『天翔け守護する光の徒』グロリアスライト・ヴァーチューズ！」

「皮肉なことね」

火音の背から現れる光の翼を見ながら天が言う。

「あなたを守る力が欲しくて『遊戯』に参加したあなたの妹。そのせいであなた自身が『遊戯』に身を投じることになってしまったなんて」

「全く、その通りだよ。どうしてくれるんだ」

「なら、それは何かしら？」

「水だよ。目から水が出てる」

「それは涙というのよ」

「みたいだね」

ああそうだ。正直言つて馬鹿馬鹿しい。僕の願いに反するし、火音が自分から危険に関わるなら止めるべきなのだろう。

でも、そうだとしても、僕のこの気持ちは嘘偽ざる本心だし、僕の『蒼空』も火音の異能を認めてしまった。

「まあ、あんなこと言われて嬉しくない兄なんていないさ」

「まさか御任君のシスコンさで私の計画が狂うなんてなあ」

「信頼つて言つてほしいですね」

これは火音の説得あつてこそその結果であり、そこはやはり先輩の僕達いや、火音への認識が甘かつたのだろう。

「でも、いくら増えても関係無いよ」

「馬鹿にしないでください」

光を纏つた火音が翔ける。正確には翔たのだろう、意識を外していた一瞬のうちに先輩にその翼を叩き込んでいる。

「自分の『人形』より速いんじゃない？全然見えなかった」

「いつも危なっかしいお兄ちゃんの危機に翔け付けなきゃいけないんだから当然です」

「でも、周りは見なきゃ」

「お前もなっ！」

火音を狙つていた先輩の『人形』とヘルが空中で衝突する。

「主も『人形』もこんなに速いとか、冗談きついなあ」

「あなたも堅すぎだし、力強過ぎますよ」 泥試合では先輩達には勝てない。しかし、わざわざ相手に合わせて戦う馬鹿が何処にいる？

最速を誇る死の暴風に神速の力天使、速さに重点を置いた二者が疾る。

さつき僕は先輩の攻撃をヘルと同格と評したが、実物と比べるとそんな言葉は全く出て来ない。

格が違うなんて領域はとうに出ている。比べることがおこがましい、張り合うことがみすばらしい。

単発の威力がなんだ、当たらなければ問題無い。避けて、除けて、逃げて、躲す。

「これなら、いける」

「いや、駄目よ

依然として天の顔は厳しい。

「効いてない」

「悪くないよ、妹さん。悪くないけど、強くない」

先輩が嗤う。荒れ狂う攻撃の嵐さえものともしない。

「千日手よ。いえ、それは希望的観測ね。あの二人の速さは身を削る。単純なスタミナの問題以前に、文字通り自身の生み出す衝撃波に身を刻まれる。所有者の方は大して問題無いみたいだけど、千日ならまだしも万日や億日かければ天秤は傾くわよ」

「じゃあどうしろって……」

僕だつて今この瞬間に何もしてない訳ではない。出来る限り強力に『蒼空』を展開している。

「あの女は所有者との身体共有と言ったわよね」

「ああ」

だからこそ先輩の能力たる腕が『人形』の方に発現している。

「体の共有率は『人形』がどれだけ人間に近づいているかを示すものよ。それはそのまま所有者と『人形』の基礎スペックに繋がるわ。正攻法なら指定部位を完全譲渡している私と蒼以上の共有率は無い。ただ」

「ただ裏技ならそれが出来る。そしてその裏技が先輩の『軍勢』か」

「ええ、奪った腕を使って無理矢理共有率を上げ、さらに能力本来の力である強化を使うことによつてその力は跳ね上がる」

何かを倍にする時、その元の数字が大きければ大きい程に効果は大きい。だからこそそのあの破壊力と防御力。

「でもそれなら、弱点はある。あの『人形』の腕を壊す。そうすれば先輩は一気に弱くなる」

「それがベストね。そもそもあなた達は忘れてるようだけど『遊

戯』は『人形』を破壊すれば勝ちなのよ」

「そうだったね。なら僕がすべきことは」

あの気持ち悪い外見の『人形』の腕を叩き壊す。

だが、僕に出来るのか？ さつきは先輩どころかあの『人形』にも一撃で武器を壊され、全く歯が立たなかった僕が。

「心配そうね」

「バレちゃったか」

「本当にヘタレね」

「返す言葉も無いよ」

心配どころか僕は今恐い。自分が死ぬのも、他の人が死ぬのも。

誰か一人でも失えば僕の日常は壊れてしまう。

初めは火音を守ればよかった。でも天が現れ、ヘルが現れ、守りたかった火音も僕が知るのとは少し違うことを知った。

守りたいものが増えていく。自分で背負うと決めたのに、それを取りこぼすのが何より恐い。

「さつきのことなら大丈夫よ。とりあえず、武器を選びなさい」

天の周りの地面に十種類もの武器が現れる。

「壊されるようが、折られようが、潰されようが関係無いわ。無いなら創るし、壊されたらもう一回創ればいいだけのことよ。上手くいくまで、結果が出るまで何回でも何回でも繰り返す。至高の試行を施行する永久の模倣機関、それが『複写』の真骨頂。今まで見せられなくてごめんなさいね、私ああい相手の方が得意なのよ」

「頼もしいね」

「当然よ、だって私はあなたの『人形』なんだから」

そうだ、守るとか、背負うとか言ってるけどこの場で一番役に立っていないのは僕じゃないか。

取りこぼすだなんて、思い上がりも甚だしい。

「じゃあ武器は任せるよ」

いつものクレイモアに加えて使えそうな物をいくつか掴む。『人

形』所有者として強化されているから出来る強引な多刀流。

「ええ、任されたわ」

守るといふならば、守れ。大きい口を叩くならまずは実績を作れ。今日この瞬間まで僕は後手に回り続けてきた。だが、今は違う。

言っただろ、『空』を汚させないと。

改めて宣言しよう。

「僕はこんな馬鹿げた戦いはさっさと終わらせて、日常に帰るんだ」

第一部 三章、その四（後書き）

また遅れてしまった……
でも今回は中間試験だったんですよ……

ぶっちゃけた話、お気に入り登録が二名ほど減ってしまつという惨劇が展開されたので、今度こそちゃんと書きます。待たせてしまつた方申し訳ありませんでした。

さて、内容の話。今回はまあ火音イケメン回ということとどうでしょうか？

でもまあ実は自分的には天の台詞の方が好きだったりするんですが、舞台と役者は揃いました。この「人形遊戯」の第一部はもうすぐ完結します。

こんな筆者ですが、お付き合いいただけると嬉しいです。あ、相変わらず感想は待ってますよ。感想いただけると踊り狂います。

P・S 実は最近、戯言シリーズのSSを書き始めました。そのうち投稿すると思うので読んでいただけると嬉しいです。

第一部 三章、その五

「つつ！」

ヘルに実戦経験は全くと言っていい程無い。だがそれでもわかる。今相對しているこいつはおかしい。硬い、堅い、難い。

「このつ、さつさと死ね！」

叫ぶもヘルの体は既に大量の裂傷に覆われている。敵の攻撃ではなく自身の生み出す衝撃波を受け続けた結果だ。

天の読み通りヘルは既に限界に近い。

「ヘル、下がれ」

先程まで敵だった男の声、でも。

「任せた」

「任せた」

「了解」

意識を集中、空をイメージ。一瞬だけでいい、相手の堅さを削り取る。

「潰れる」

直撃したのはハルバード、その重さで叩き斬る武器。もとの使用用途故耐久性はあるはずのその刃にヒビが入る。

だが、関係無い。

「『複写』」

パートナーが次を用意してくれる。

今度は二本の片手剣。少しだけ、ほんの少しだけ出来た傷口にそれを差し込む。

「ア、アア、アアア、アアアアアア、ア、ア、ア、ア、ア」

先輩の『人形』が吠える。まだ一本、だが確実に先輩の『軍勢』（のつりよく）に打撃を与えた。

「私の『軍勢』（なかま）に何をするのっ！」

「じゃああなたは私のお兄ちゃんに何をしようとしてるんですか！
向かって来る先輩を火音が止める。

「こっちは私に任せて、お兄ちゃん」

「っ……」

「蒼、仮にもあなたの妹なんだから信じてやりなさい」

「わかってる」

そうだ、この状況は僕一人じゃ切り抜けられない。それに、神速の天使なんて頼もしいじゃないか。

僕は僕のすべきことをしよう。

僕の敵は、あれだ。

「なんだ、自我を塗り潰されたって言うってたけど、あるじゃないか
無数の腕の間から覗く双眼が怒りで猛っている。

「でも僕も、負けられない」

「『コウソク』」

壊れたラジオから聞こえて来るようなヒビ割れた声。しかし、それは確実にある単語を呟いている。

「ボサツとするな」

火音に首元を捕まれて引きずられる。先刻まで僕がいた場所には
二本の腕。

「『拘束』、か」

おそらくそれが『腕の人形』の異能。

「主従揃ってねちっこいやつだな」

そう言うヘルも火音と能力は近い。『人形』と所有者の異能は似
るのだろうか。

「まあ、今は考えてる場合じゃないか」

あの『拘束』に捕まると厄介だ。だがあれを避けようとするれば攻
撃のタイミングを逸すことになる。

「私が気を引くからその隙にまた攻撃しろ」

「そうだね」

それが最善。むしろそれ以外は考えられないくらいだろう。

「天」

「わかつてるわよ、『複写』」

「やっぱりこれが一番馴染むな」

最初から使い続けているクレイモア。大振りの両手剣を構える。数瞬後、僕の隣を風が駆け抜ける。

「『コウソク』」

「『加速』」

地面から乱立する腕を全て躲す。いくら拘束が厄介な力でも捕まらなければ問題無い。

「まあそんなことが出来るやつは少ないだろうけど」

自分の走るルートを読まれようが関係無い。先手に勝る後手、徹底的なまでの理不尽。

「そして、僕がいる」

後ろからの斬撃、単純明快な不意打ち。

剣を防御されたら蹴りを叩き込む。蹴りを防がれたらその腕に剣を振るう。防御は考えない。いや考える必要が無い。何故なら。

「後ろががら空きだぞ」

敵の反撃のタイミングでヘルムの攻撃が炸裂する。無制限にスピードが跳ね上がる助走、そこから繰り出されるタックルは当然のように強力だ。

二対一だからこそその連携。天が背後にいる状態でのそれとはまた違う、互いが互いをカバーする感覚。

「これで、三本目！」

相手の持つ総数からすれば些細な数。しかし、敵の能力を考えれば数を減らせば減らすほど戦い易くなる。

「このまま、押し切れる」

「油断するな、馬鹿」

ヘルムの助けを借りて再び『拘束』を回避。

「何度も私に引きずられて恥ずかしくないのか？」

「大丈夫だよ、信じてるから」

「そういう問題じゃ無いだろ」

戦闘中とは思えないふざけた会話。でも、そこからイメージ出来る。『蒼空』を、僕の愛する日常を。

「行ける！」

未だかつて無い能力の発動度合い。相手の力を削るのがわかる。

「ガアアアアアアアアアア」

「叫んでばかりで、五月蠅いよ」

どれだけ相手が喚こうが、手は抜けない。この戦いは渴望の押し付け合い、誰の願いが最も強いか決めるものだから。

斬撃、今までと比べて圧倒的に手応えが無い。弱い、弱い、勝てない相手じゃない

「蒼後ろ！」

「きゃっ」

「火音！？」

吹き飛んできた火音を受け止める。外傷は

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。ちょっと避け損なっただけだから。お兄ちゃんが相手を弱くしてくれてたおかげで、ダメージは無いよ」

「でも…」

むしろ、その弱体化した状態で火音に攻撃を与えたことがおかしいんじゃないか？

「やってくれたね、御任君」

手を挙げ、自身の『人形』を呼び戻しながら先輩が笑う。

「小賀浦先輩、このままやれば僕達の勝ちです。諦めてください」

本音を言えば、ここで先輩には諦めてもらうのが一番いい。火音を戦わせてしまっている以上余計な戦闘はししないのが吉だ。

「相変わらず御任君は冗談が上手いなあ」

「それはど」

「でも、人を怒らせるのも上手だよね」

「だからってこのまま続けても互いに得は無いですよ」

確かに、得は無い。だが、この発想に至ったということは僕はま

だ『遊戯』というものを舐めていたのだろう。

「得は無い、かぁ。確かにこのまま続けても私は勝てないだろうし、妹さんに攻撃を当てられたのも偶然なんだろうけど」

殊勝な言葉、余裕に満ち溢れていた先程からは想像も出来ない。

「だったら」

「でもね、御任君。君もわかってるでしょ？これは違つんだよ」

「何を……」

「ねえ、あげるよ」

「は？」

僕への言葉だと思っていた。けど、違つ。

「私の腕を、あげるよ」

あまりに普通に発せられた言葉の意味を理解するまでの時間はほんの僅かなもの。だけど、それが命取りとなる。

「ふふっ……」

先輩の腕が、なくなる。

血は出ない、音もしない、先輩は顔色一つ変えない。それでも、目の前では凄まじい変化が起きている。

「私は、もう一人になりたくない。絶対に離さない、手を離してほしくない」

その為なら、何だつてする。

聞き取れなかったはずの言葉がわかる。何故なら僕もそうだから。自分で言つたじゃないか、これは渴望の押し付け合い。どちらの願いを叶えるかを決める『遊戯』。

その戦いで、相手が諦める訳が無いだろう。

「共有部位の、完全譲渡……」

天が唸る。

「さあ、もう一回始めよう」

無いはずの腕を広げるように先輩が高らかに宣言する。

「まだ、『遊戯』は終わってない」

舞台上踊る役者の如く。

「『死屍狂宴 魔の軍勢』」

「『コウソク』」

演者の声が重なる。物語のクライマックス、その瞬間を歌い上げる。

ステージを彩るは無数の亡者の腕。他者を求め、温もりを求め、手を伸ばす。

迫り来る白い屍肉に気圧され、動けない。

「なんで、急にこんなに」

先輩達の強さはあの大量に共有した腕によって支えられていたはずだ。それが今更二本増えた程度で何故ここまで強化されるのか。

「偽物と本物だったらやつぱり本物がいいってこてね。この展開が予想出来なかった自分が呪わしいわ」

「なるほど、そういうことか」

逃げられない、真正面から破壊するにも数が多過ぎる。

「少なくとも」

少なくとも後ろにいる天や火音は守らなければ。

「天、僕の後ろに」

「なら、お兄ちゃんは私の後ろにいて」

「駄目だ。いくら『拘束』が単純に相手を捕まえる技だったとしてもあの量に飲み込まれたら圧死してもおかしくない」

それに今の相手の力は未知数だ。先程と違い腕は使用者の足元から同心円状に発生してこちらに迫っているし、他にどんな能力の變化が起きているかわからない。

「だからこそだよ。単体での戦闘力は私の方が高いんだから。役割分担、さっきもしたでしょ」

「でも……」

「でもないよ、相変わらずお兄ちゃんは優柔不断なんだから。

大丈夫、私に任せて。もう時間も無いし」

腕の群との距離はもうほとんど無い。これでも相手の移動はかなり遅かった方なのだからラッキーだろう。だからこそ、今は選ばな

ければいけない。

「わかった、任せる」

大丈夫だとは思う。さっきの先輩とのタイムマンすら切り抜けた火音だ、そう簡単にやられるはずがない。でも不安は拭えない。

「うん。じゃあ私が道を作るから、ヘルはお兄ちゃんと『人形』さんを運んで」

「わかった」

「わかったわ」

ヘルと天が頷く。

「ほら、お兄ちゃんも返事」

「わかったよ」

渋々ながら僕も続く。

火音が『遊戯』に参加した理由が僕に守られるだけでは嫌だということなら、ちゃんと尊重してやりたい。

「ただ一つ条件がある」

「何？」

「絶対に無事でいてくれ」

だが勿論僕の願いも叶ってもらはなくては困る。火音には傷付いてほしくない。

「当然、さっきも言ったでしょ帰ったら二人で、いやヘル達も入れて四人でご飯食べよう」

「そうだな」

「さ、相手をこれ以上待たせる訳にはいかないし、やるよ」

「ああ」

先輩が今更気を利かせてさっきのように待ってくれたとは思わないが、偶然出来たこの時間に感謝しよう。おかげで意志を固められた。

「全く、手がかかる所有者ね。一回の戦闘中に何回迷う気なのかしら？」

「大丈夫だよ、もう決めた」

「そう、それは重畳」

「僕達も『遊戯』をはじめよう」

「ええ、そうね」

相手にばかりいい顔はさせられない。幕を上げよう、演目名は反撃だ。これで『終幕』にする。

「『天翔け守護する光の徒』」

何か一つの巨大な生物にも見える腕の大群に火音が翼を叩き込む。速度は限界を突破した神速。生まれる衝撃波は直接攻撃を受けなかったものすらも刻んで、潰して、破壊する。

「今っ！」

光が開いた道を駆けるのは風。僕達を抱えているとは思えない速度。

「天、どうすれば勝てると思う」

「何？無策だったの？使えないわね」

「無い訳じゃないんだ。今の状態では恐らく相手の『人形』は堅すぎるし、『拘束』が厄介だ」

直線距離なら数秒とかからず相手に辿り着けるはずだが、腕が邪魔になりなかなか前に進めない。

景色が霞む速度の中で、語る。

「そこから先は言わなくてもわかるわ」

「そうか」

「でもあなた、私にわざわざそんなこと言っつてことはまだ迷ってるんでしょっ？」

「まあね」

「本当に蒼は大馬鹿ね。さっきは決めたとか言ったくせに」

そう言われると何も言い返せない。舌の根も乾かぬうちというのはこういうことだろう。

「あなたの好きにすればいいわ。私にはほとんど戦闘力は無いし、手を下すのは何があってもあなた」

「投げやりだね」

「そうね。だってあなたがどうやって敵を倒そうが私はあなたから離れないわ。だからそんな私に無関係な心底どうでもいいことについて聞かれても当然のように他人事だし、投げやりよ」

天の言葉はまだ続く。

「それはあなたの妹だって同じはずよ。むしろ私が心配なのはあなたが死ぬことね。ようやく見付けた所有者だし、私はあなたのこと嫌いじゃないわ」

「なるほど、先輩の気持ちが少しわかった気がするよ」

誰かに側にいてもらうというのはここまで甘美な感覚なのか。安心感が違っし、生きる活力が湧いてくる。

だからこそ逆に見放され、去って行った場合の絶望は計り知れない。

「でもそれじゃ駄目なんだよ」

その感情は容易に相手への甘えに変わる。でもそれじゃあ相手も自分も不幸になってしまう。

「まあよくわからないけど、相手に変な同情は掛けないことね」

「わかってるよ」

「二人とも、このままじゃ埒が明かないから無理矢理突っ切るぞ。気をつける」

「了解」

更に『加速』。今までは大振りに避けていた『拘束』の腕を紙一重で躲し続ける。時には掠ることすら厭わない、直進を最大の目的に置いた走行。

もう何回も言ってる気がするがまた言おう。ここから先が最終決戦。僕はこれを終わらせて、日常に帰る。

策はある。準備は今から少しすれば終了だ。人事は尽くした、後は何処かにいるかも知れない神にでも祈ろう。

「よし、抜けた！」

林立する腕の向こう、先輩とその『人形』が待ち受ける。

「来ちゃったかあ」

「ええ、あなたを倒す為に」

言葉と共に一閃。しかし『人形』に弾かれる。

「ほら、また効かなくなっちゃったよ？どうするの？」

こちらに対しては『拘束』を展開すらしてこない。火音と比べて僕が驚異にならないからというよりは、あまりにも堅い故に一方的に僕をいたぶればいいということだろう。

先程の状況の再現。いや、敵の強さは先程の比ではない。

「策はありますよ」

ただ、僕達はさつきもその防御を破っている。それなのに未だにあるその驕りはこちらにとっては有利だ。

「へえ、どんなの？」

「こんなのです、ヘル！」

この作戦で一番のネックはどう先輩に近付くかなのだが、そういう意味ではこちらには最高の機動力がついている。

「『コウソク』」

さすがに危険と感じたか？でも遅い、この暴風相手では先手ですら遅い。後手に回れば速さ比べにすらならない。

一瞬で先輩の目の前へ。

そのまま、抱き着く。

「え？え？あつ……」

戸惑っていた先輩から力が抜けていくのがわかる。

戦場には不釣り合いな光景。しかし先輩も『人形』も攻撃を加えてこない。

「僕の能力の元は、この眼に映る日常を汚す存在を認めないという意味です」

過去の記憶、自分を形成する記録、言わばより処とする日常を持たない故の願い。

「だからこの能力は常に広範囲に作用する。でもそれじゃ駄目だった」

僕の『蒼空』じゃあなたの汚れを落とすきれいななら。

「それなら、あなただけを見ればいい」

視界にあなたしか入れない。あなたのことだけを思う。

「そんな屁理屈で私が……」

「でも現にこうして上手くいつている」

僕の能力の本来の効果範囲は視界内でもなんでもない。さすがに全世界とは言わないが、自分の周辺のある一定の範囲なら全てに作用する能力だ。

でもそれを捻曲げる。能力を使う自分自身を騙してそういうものだと思ひ込む。

「大した発想だけど、君にとっての日常はその程度なんだ。私を倒す為に、一時的に対象を私に移せるような」

「違いますよ」

「え？」

「あなたは僕の日常の一つでしたよ。だからこそ取り返そうとこんなに躍起になっている。でも無理だった」

無理だったからこそせめて。

「あなたを見ていますよ。あなたを倒すしかないから、僕があなたを見ています。あなたを僕が抱きしめましょう。それしか出来ないから」

先輩を倒す為以外に、これは言ってしまうえば贖罪。

「そう、かあ……」

「そうです」

「それなら、悪くない終わり方かなあ」

その時の表情は久しぶりに見る普通の笑顔。僕の日常の一つで、失いたくなかったもの。

「じゃあ、よろしくね」

「わかりました」

そして、終幕。

第一部 三章、その五（後書き）

はい、今回は割と早めに続きをうpすることができました。
でも今回も、三日で続き書くぞ 一週間 十日 二週間 二十日と
どんどん先延ばしにしてみましたのです。

本当にすいませんでした。

さて、今回は終章や間章も連続投稿しているので本編に纏わる話は
そちらの後書きでさせていただきます。

第一部 終章

「平和だね」

「一応だけど、そうね」

時刻は昼休み、場所は部室。先輩との戦いが終わり僕はまた平穏な日々に戻っていた。

「それであの後妹さんとはどうなったのかしら？」

「結局腕切り魔は先輩だった訳だし、誤解も解けたから仲直りしたよ。『遊戯』の件は、まあ互いに互いをサポートしていこうって決着したかな」

「あなたを守りたい妹さんと妹さんを守りたいあなた、互いが互いの願いを踏みにじりながら協力するのも悲惨な話ね」

「キツイなあ。確かにそうなんだけど」

『遊戯』に参加することで僕達兄妹の関係が酷く歪なものになってしまったのは事実だろう。ただ、そんなものはそれが表面化しただけで昔から歪みは抱えていた。

守りたい日常の裏にそんな汚いものがあつたなんて知らなかったけど、それでも知らないままではよりはずよかった。

だから、少しずつその溝を埋めていければいいと思う。

「でも、願いを叶えたいあまりそれと逆のことをしてしまうのはしかたないのかもしれないわね」

「どういうこと？」

「あなた達兄妹だけじゃないってことよ。あの先輩も、私達を倒す為に自分の両腕を失っているわ。それじゃ相手に抱かれても自分からは相手を抱きしめられないじゃない。全く、馬鹿なことね」

「僕は、先輩の気持ちはわからないでもないけどね」

どうしようも無いくらい大切なものがあつて、それをどうしても守れなくなってしまうたらどんな方法にも手を出してしまう。それこそ矛盾も無意味も理不尽も関係無く、ただただなんとかしよう

して。

「そう考えると、『遊戯』は最悪のシステムなのかもね」

一見有効な解決策を提示はするけど、そのルールに従えば多くのものを失う。

「ええ、考案者は精神が腐りきってるわね」

「天の親ともいえる存在なの？」

「生憎見たことも無い糞野郎を親と呼ぶ感性は持ち合わせていないわ」

そうだった、天は創られた時から一人で、製作者も他の『人形』も家族じゃない。

「でも、僕はそいつを少しは尊敬するかな」

腐りきった人だとは思うけど。

「変態の先人としてかしら？」

「違うよ、そうじゃなくて」

手の腕を取りながら。

「僕の日常に、新しい風を入れてくれたから」

『遊戯』が無ければ天にもヘルにも会えなかったし、火音の成長も知らなかった。

「その製作者が作ったんじゃない部分を触りながら言われてもセクハラにしか聞こえないわね」

先輩を倒したことで天はその腕を得ている。以前から見た目は人間のそれと大差無かったが、今は肌触りすら人間のものだ。

いや、あれはまさしく人間の腕なのだろう。小さな天の体には長過ぎる、先輩の腕。

「いや、そうじゃなくて……」

「大変、御任君が天ちゃんにセクハラしてる」

「何しに来たんですか？淡雪先輩」

相変わらず最悪のタイミングで来る人だ。

「どうして部長代理の私が部室に來ただけで怒られなきゃいけないの？」

「先輩がいきなり僕にとって不名誉な嘘をつくからです」

それ以外にも、言ってしまうえば気まずいのだ。

あの戦いの後、先輩には思いつきり打たれた。曰く、「死んででもこれで許す」だそうだ。意味がわからない。

「今日はあなたに紹介する人がいるからね。場を和ます為のウィットに富んだジョークよ」

「その紹介されることを僕は知りませんでしたけど」

「伝えてないからね」

「そもそもどうやって僕の場所を知りました」

「占いよ」

「便利ですね」

先輩の普通の占いが当たる訳が無いからたぶん予知の方だろう。

「それに、たぶん誰を紹介するか伝えたらあなた逃げるでしょ？入って」

「はい、はい」と

その声を示す相手は。

「ツケが回ってきたわね。蒼」

「手伝ってくれるかな？天」

「お断りよ」

近くにあつた本に手を伸ばす天。頼りにならない『人形』様だ。

入って来た人を見上げる。袖がだばだばな入院服。当然だ、入れるべき中身が無いんだから。

「あ、やっぱり腕は目立つか。でも、気にしないで、つてのも難しいし……まあ、小賀浦祈咲です。よろしく」

「あなた達に何があつたかは知らないけど、無かつたことにするのは許さないよ。だから病院から無理矢理抜け出してもらつたの」

淡雪先輩が言う。そうだ、僕は結局彼女を。

「じゃあ、よろしくね」

「わかりました」

抱きしめたままの先輩の首に力を込める。
崩れ落ちる先輩。

それを背に、『人形』に剣を振り下ろす。

バラバラになった先輩の『人形』、その残骸の中から先輩の『軍勢』が消えても唯一残っていた腕がついに消え去る。

「自分の体に他人の腕が付いてるっていうのは変な気分ね」

腕の移動先は天。『遊戯』の勝利者への報酬。これを全ての敵に行えば天は完全な人となる。

「そのうち慣れるさ。それはもう天のものなんだから」

一瞬の間。

「終わったよ」

終わった。感慨を込めて呟く。

「終わったわ。でもいいの？彼女は死んでないわよ」

そう、先輩はまだ生きています。僕の攻撃はあくまで先輩の意識を奪っただけで命までは奪っていません。

「殺すつもりなんだと思ってた」

「僕も最初はそうだったよ。でも……」

「最後の笑顔かしら？まだ、『日常』側の人間だと

「そうだね」

まだ遅くないんじゃないか、そう思ってしまった。

「全く、本当に情けない所有者ね」

「いや、先輩を倒したのは僕の功績じゃないか」

「一か八かでの能力の応用。あれは自分でも称賛したい。」

「馬鹿じゃないの？あんなの効く訳ないじゃない」

「え？いや、なら……」

「意図的に手を抜かれた訳でも無いわ。あの状況でそんなことする程甘い相手じゃなかった」

ならどうということだろう。僕が抱きしめたあの瞬間、確かに先輩から力は抜けた。

「あの『軍勢』の本質は抱き合いたい、抱いてほしいという願い。」

手を結ぶとか手を組むって単語から派生する他人の力を借りる強化能力はあくまで副次的なものでしかないわ」

なんとなく話が読めてきた。僕が小賀浦先輩にしたことはなんだ？
「あなたは彼女を抱きしめた。その瞬間彼女の願いは叶ってしまった、渴望は満たされてしまった」

「だから『軍勢』が機能しなくなった」

「そういうこと」

僕の『蒼空』が強化されたのではなく、先輩の『軍勢』が弱体化したということ。

「だったら……」

僕がしたことは最低なんじゃないか？

「結局僕は先輩を殺さなかった。先輩を抱き続けることを、背負い続けることを放棄した」

それは先輩への最悪の裏切りになるんじゃないか？

「その台詞こそ彼女への冒瀆ね。あなた以外に彼女を背負う人間がない？ 凄まじい思い上がりで、最高にくだらなジョークだわ。生きている限りチャンスはある、彼女は美人だし出会いなんて掃いて捨てる程あるはずよ」

でも、実際に先輩は抱かれないという願いを抱き『遊戯』に頼る程追い詰められてしまった。

「それに、彼女は気が付かなかったみたいだけど、全員が全員彼女から離れていった訳ではないわ。恋愛に限定するからいけないのよ。あの部長さんと彼女は友人なんですよ？」

「ああ、そうだね」

そうだ、僕も言ったじゃないか先輩は僕の日常で大切な人だった。彼女を思う人は、たくさんいたのだろう。

「まあ彼女は『遊戯』に纏わる記憶を失う訳だし、新しく関係でも築けばいいんじゃないかしら？ その方がやっぱり蒼らしいわ」

「たしかに、そうしようか」

殺人なんて非日常を犯すよりはまた新しい日常を作っていく。そ

こちらの方がよっぽど健全だし、前向きだ。

そつだ、あの時決めたじゃないか。

「小賀浦先輩ですか、はじめまして」

挨拶はそれで構わない。

「御任蒼です。よろしくお願ひします」

これからまた『日常』^{ものがたり}がはじまるのだから。

第一部 終章（後書き）

はい、幻想世界の人形遊戯第一部完結です。

更新遅い中ここまで付き合ってください。た方本当にありがとうございます。

第一部にサブタイトルを付けるとしたら『邂逅』でしょうか？

蒼が出会う天達のような新たな『日常』や、自分を改めて見直すことによる自分との出会いとかまあそんな感じですか。

まあ実は今回の第一部は壮大なプロローグのようなものと私自身は考えてます。

ここで小話、『人形』の能力は実はすべて二字熟語になるようにしてるんですよ。個人的に最も好きな能力をいつ皆様にお見せできるかわかりませんが、頑張ります。

次の間章は厳密には一部でも二部でもない、名前のままの非常に短い『間』となっております。

間章その1

私は不安だわ。

馬鹿蒼は気楽に構えてるけど、不確定要素が多過ぎてこのままだと睡眠不足になりそうね。

まずは御任火音の件、あれは兄思いの妹の勘違い故の暴走だと片付けるには異常過ぎる。それに、彼女は何故か全ての責任を私に押し付けてきた。

何かがおかしい。理屈が通ってるようで通っていない。言ってしまえば屁理屈。

次に白神宮淡雪、友人が両手と記憶を失っているにも関わらず平然としている。さらに普通に考えれば犯人の筆頭である蒼にも今まで通り接している。それが普通ならあまりにも気味が悪い。

最後にあの黒衣の男。あれは、何か？

『人形』でも人間でもない何か。あんな化け物放置するには危険過ぎるし、関わるのはもっと危険。

この『遊戯』はまだあまりにも、危険過ぎる。

「この『遊戯』はまだ面白くなる」

開けた空間にその男は立っていた。長い髪と服は黒、肌はそれに反するように白い。

「かの少年は第一段階を抜け天使を味方につけた。非常に順調、そして素晴らしい成果だ」

普通に話しているはずなのに言葉は絡み付くような響きを孕む。

「さあ、第一部は終幕だ。次に進もう。まだまだ『遊戯』ものがたりは終わらない」

笑みを湛えて男は消える。後には何も、残らない。

間章その1（後書き）

さて、三連投稿もこれで最後です。

次の第二部では名前だけ出ていたある人が出ます。

相変わらず更新は遅いですが、これからも宜しくお願いいたします。

第二部序章その1

どうしてこうなったかはわからない。いや、正確に言うならばあらかじめこうなることはわかっていた。

ならばどうして対処出来なかったか。それはやはり僕が甘かったのだろう。

あの戦いを乗り越えたのに、むしろ大きな転換点であった先輩との戦いが終わったからこそその油断。

僕は日常に帰ったのだと、平和に暮らせるのだとそう楽観していた訳ではない。『遊戯』はまだ続いている、戦いはいずれおこる。でも、まだ大丈夫だろうと思っていた。

そんな僕の希望を多分に孕んだ予想は完璧に打ち碎かれる。それもまた、『日常』側に属していたものの手で。

「先輩、その子『人形』ですよね」

『遊戯』（ものがたり）は再び動き出す。

「とりあえず、二学期後半の活動予定はこんな感じ」

「あの、淡雪先輩」

「どうしたの？御任君」

「どうしたもこうしたも、そのホワイトボード何も書いてないじゃないですか」

「うん、だから簡単に言うなら特に予定無し」

なんと突っ込めばいいのかわからない。まあオカルト研究会なんて胡散臭い部活ですべきことは何かなんて聞かれても答えられないけど。

「げんなりしてるね。試験の結果でも酷かったの？」

「いつも授業サボってる先輩と一緒にしないでくださいよ。げんなりというかなんというか、わかってましたけどやる気の無い部活だなあって」

「それは、中間試験も終わって二学期後半の活動を定める大事な部活にも出ない部員に言うべき」

「まあ、それもそうですけどね」

僕が入部した五月末の時点では数人の部員はいたはずなのだが、最近は何も見ない。

「二学期になってからちゃんと出てたのは私達以外だと出雲君くらい、その出雲君も最近は何も見ないし。たぶん天ちゃんの方が出席率高い」

「私は蒼に連れてこられてるだけよ」

いつ襲われるかわからない状況で天一人を家に残しておく訳にはいかないのだからしかたない。火音は自分が学校に行っている間へルに街中をぶらぶらさせているようだがそれはヘルの逃げ足の速さがあるから出来ることだろう。

「人が一人増えるだけで結構変わるからいいの」
「そう」

会話が無い。天曰く、不用意に仲良くなって人じゃないことを悟られたくないそうだが僕にはただ単に天が先輩を苦手なように見える。

あの天に苦手なんてものがあつたことが驚きだが、事実天は会話に参加しない。先輩自体が結構な変わり者だから苦手を感じるのかわからないでもないのだけど、たまに妙な無言状態が生まれるのは勘弁してほしいところである。

「前から気になってたんですけどこんな活動でよく部活としての申請通りますね」

無言状態を打ち砕くべく無難な話題を振る。

「前年度は結構真面目に活動していたから」

「それ下手すると今年度は通りませんよね」

今年やったことと言えば部室に集まって話してるくらいだ。いくら部屋の有り余ってるこの学校とはいえそんな部活の存続を許す程甘くないだろう。

「なるようになる」

「なるようになったら通らないんですよ」　もしかしてこの人来年度は自分がいないからって僕達に丸投げするつもりなんだろうか。

「せめて何か活動しませんか」

部活を潰した要因だなんてOBの方に白い眼で見られるのは勘弁してほしい。

「何かって、何？」

「そういうのは普通部長の先輩が考えるんですけどね」

「責任の丸投げはよくない、皆で作り上げるからこそその部活」

「この部活の現状からは想像も出来ない程の正論ありがとうござい
ます」

我ながらよくこんな部活に入る気になったものだ。高校生になっ
たんだからという理由で火音に勧められ、暇潰しにもなるからと部
活に入ったのだが、よりもよってこんな胡散臭い部活を選んだ自
分のセンスに感動する。

「嫌味を言うなんて酷い御任君」

「言わざるを得ない状況にしたのはあなたです。まあ、案は無い訳
じゃないですけど」

「聞かせて」

「オカルト研究部らしく都市伝説とか噂の調査ってのはどうでしょ
う？」

腕切り魔事件の時は出雲と他の部員数名が事件を調査していたら
しいし、それをきちんとした部の活動としてやるのはなかなかいい
案だと思う。

「悪くないけど、何かいい噂知ってるの？」

「前の腕切り魔事件じゃ駄目なんですか？出雲達も調べてみたい
ですし」

「というか僕はそうしてめんどくさい作業を彼等に押し付け、楽を
するつもりだったのだけねど。」

「ダメ。最近事件が起きてないし、扱うには話が重過ぎる」

「まあ、たしかにそうですけど」

十人強という死者の数、そして腕を切断して持ち去るという残忍な手法で名を上げた犯人は未だに捕まっていない。

「ただ、僕はその犯人を知っている。」

「知っているも何も僕はその犯人と戦って意図的に逃がしている。」

彼女を、小賀浦先輩を殺さなかったことは後悔していない。けれど、時々考えてしまう。殺人には被害者が、遺族がいる。その人達の日常を破壊したのは先輩だし、それを僕は勝手な鼻窟目だらけの判断で許してしまった。

「この眼に映る日常を守りはしたけれど、起こった悲劇は無くせないし僕の知らない悲劇は確実に生まれている。」

「守りきれないし、救いきれないし、無くしきれない。この世界に溢れる悲劇に、貴い日常を侵食する惨劇に僕はあまりにも無力だ。」

「御任君、またぼーっとしてる」

あの瞬間の先輩の満たされた言葉を僕は裏切った。結局は、先輩の思いも被害者の思いも僕は踏みにじっている。

「御任君、御任君」

「これでよかったと信じている。でもそれはあくまで希望で、事実じゃないかもしれない。」

「御任君！」

「って、なんで急に叩いてくるんですか！」

頬に衝撃を感じて視線を上げたら無表情のまま淡雪先輩がお怒りになっていた。

「御任君は急にとという言葉の意味をちゃんと調べるべき。私は何回も呼んだ」

「そうなのか、天？」

「ええ、そうね。相変わらず間の抜けた顔で宙を凝視していて大変気色悪かったわ」

「それはすいませんでしたね……」

「公正を期す為に天に聞いたのだが、間違이었다。」

「御任君の悪い癖、どうせまた鬱な暗い思考をダラダラ繰り広げていたんでしょ」

「まあ、否定はしませんが……」
「というか出来ないけど。」

「長々と考えても誰も得をしない。というか目の前にいる私を無視するのは失礼」

「そうですね、すみません」

確かに、今更考えても仕方のないことだ。それより、次に繋げよう。どう足掻いても変えられない過去で最善を目指すよりも、次善に全力を尽くそう。

「わかったなら結構。それで、結局部活動はどうするの?」

「ああ、じゃあ何かいいネタ無いか探してきます」

面倒ではあるけどたまには部活に打ち込むのも高校生らしくて悪くない。

「そう、じゃあ私も探してみる」

「んじゃ、今日はもう帰りますか」

「うん」

「さつきはこの間の戦いのことを考えていたのかしら?」

「そうだね」

先輩と別れ家に向かう道、くだらない世間話の中に天が話を挿込んでくる。

「自分で話題を振って鬱になるなんて馬鹿丸出しね」

「酷いな」

「だってそうじゃない。全く、相変わらずねちっこい男」

「そう言われると何も言えないんだけどね」

さつきと同じく否定出来ない。

「何よその締まりの無い答えは」

「大丈夫だよ」

『遊戯』の時にこれじゃ駄目なのはわかってる。僕がしっかりし

なくちゃいけない。

「何が大丈夫なのかしら？ここで急に真面目な顔になるから心配なのよ。あなたは何でもかんでも背負い込もうとする。だからつまらなくてくだらない考えで時間を潰してしまうんだわ」

「そんなつもりは無いんだけど」

「蒼に無くても端から見てたら明らかにそうよ」

「ごめん」

「どうして謝るの？私は非常に心配なのよ。『遊戯』のパートナーとしても私個人としてもね。『遊戯』に参加するようなやつはだいたい自分が自分を最優先で行動しているわ。そんなのと関わって起こったこと全部背負おうなんて自殺行為以外の何物でもない」

「私は、もう一人になりたくない。絶対に離さない、手を離してほしくない」

先輩の言葉が蘇る。

「それに、『遊戯』で起きたことは全部あなたと私の連帯責任よ。勝手にあなただけで済まそうとしないで」

ああ、まただ。素直に嬉しいと思える。また救われた。

「天、ありがとう」

「ええ、どういたしまして」

瞬間。

「素晴らしいコンビ愛っすね、先輩」

わざとらしい拍手と共に軽薄な声が響く。

「もしかして」

声のした方を向く。でも、そこに誰がいるかなんてもう予想はついている。

「ところでちょっとお話があるんですけど。先輩、その子『人形』ですよね」

「出雲、悠夜……」

予想と寸分も違う無い姿で僕と同学年で唯一のオカルト研究会の部員、出雲悠夜がそこには立っていた。

第二部序章その1（後書き）

お久しぶりです。試験で赤点を量産させていただきましたミナミナミです。

今回も短めなうえにかなり遅い投稿となって今し非常に申し訳ないです。

でもまあなんとか2010年の間に投稿することができました。

折角の機会なんで今年を振り返りたいと思います。

このサイトで小説の連載をはじめさせていただいて、ツイッターもはじめているんな人と出会いました。

周りでデビューする方がいたり人気のある方がいたりして、正直嫉妬しつつも刺激を受けられたのは非常にありがたいです。

相変わらずの更新の遅さですが、来年もこんな私にお付き合いいただけるとうれしいです。

来年も、残り少ない今年も、感想、罵倒、叱咤激励、応援、新規読者さん、もうなんでもお待ちしております。

ではよいお年を！

第二部序章その2

「久しぶりっすね、先輩」

「久しぶりだと思っなら少しは部活に出てくれ、淡雪先輩が心配してるよ。それと僕達は同年代だ、変な呼び方はするな」

いつも通りのペースを崩される出雲の会話。だけど何かが決定的に違う。

「いやいや？俺的に蒼君は先輩キャラなんで？」

「だったらもう少し敬語を使ってくれ」

「どうも敬語は苦手なもので、すいませんね」

神経を逆撫でしてくる台詞。腹が立つ、でも冷静でいなくちゃいけない、

「私を無視しないでくれるかしら？」

「どうも、お嬢ちゃん。そのゴスロリは蒼の趣味か？お揃いの眼帯まで付けちゃって。幼女を囲うのはともかく、無駄遣いしてる妹さんに怒られちゃうぜ？」

「出雲、いい加減にしろよ」

何がしたい。何が狙いだ。

「恐い、恐い。相変わらずシスコンしてるね蒼君は」

「だから何が」

「妹さん、『遊戯』の参加者なんだろ？」

「……」

その展開くらいなら予想していた。僕についてある程度知ってるならば火音が僕のアキレス腱となることも知ってるはずだ。だから。

「おいおい、無言でそんな物騒な物構えしないでくれよ」

天に『複写』してもらった武器を手に取る。アイコンタクトだけでこのような意思疎通が出来るようになってきた。

「『人形』に『遊戯』という単語を出して更に妹について言及した

時点で君は敵だよ」

「可愛い顔して頑固だねえ、蒼君は。少しは頭柔らかくしようぜ」
「黙れ」

会話をしていたにしては不自然な程に距離が離れているが、そんなものが人間離れしたレベルまで強化されている『遊戯』の所有者には関係無い。

距離を詰める。腹立たしい笑みの絶えない出雲の体にクレイモアを叩き込む。

「両者止まってください」

「なっ……」

僕と出雲の間に少女が割り込む。勢いよく振った大剣はその重さもありません。

ズブゥ

嫌な感触。途中で止めようとした為か少女の体を完全に切断はない。血が吹き出る、内臓がこぼれる。少女は。

「問題ありません。この程度の傷ならすぐに回復します。しかし邪魔なので剣は抜いてください」

口の端から血を流しながら少女が言う。白い長髪を頭頂部で結わえた少女というよりは幼女に近い外見。なまじ元が美しいだけに今の見た目は醜悪で、不気味だ。

気分の悪さに押されるようにして剣を抜く。彼女の言葉通り徐々に、だが確実に傷が癒えていく。

「悠夜さん、勝手な行動は慎んでください」

自分の引き起こしている異常を気にもとめずに話をする少女。この場は確実に『日常』から乖離した。

「蒼君がどの程度のものなのか気になったんでね。別にいいじゃないか、減るもんじゃないし」

「と、いう訳らしいです。私達としてはあなた方と無益な戦闘を行うつもりはありません。何せ非常に相性が悪い。ここは互いに自制して引くべきかと」

僕の緊張をよそに話が進む。展開が早過ぎてついていけない。たしかに基本的に戦うつもりのない僕としては相手が引き上げてくれるならそれに越したことはないが、火音についての懸念が残る以上このまま帰す訳にもいかない。

「随分と勝手ね、ハル」

「お久しぶりです、天。互いに無事ここまでこれでよかったですね」「心にも無いことを言うわね。笑えないわよ」

この二人、知り合いなのか。仲がいいとはとても言えないようだが、今まで天涯孤独の身だったと言っていた天に『人形』の知り合いがいたことに驚く。

「それは失礼しました。しかし、私としてはあなたと再会出来たことは純粹に喜ばしいです」

「それは『人形』としてかしら？」

「他に何が？人間の物であるあなたの腕は『遊戯』がつつがなく進行している証拠。そしてその残った相手が顔見知りならば一応喜ぶべきことでしょう」

「相変わらずね、それは純粹に喜ばしいとは言わないのよ」

「そうなのですか、勉強になりました」

会話が噛み合っていない。強烈に感じる違和感。『人形』の所有者のように日常から掛け離れた異端とは違う。歯車が一つ足りないような、実は互いに抱いている前提が違うようなそんな違和感。

「ハル、だっけ？」

「はい、御任蒼。正式な作品名はハルツトウンですがハルで構いません」

「君達が敵じゃないという保証が無い。そもそも、『遊戯』は全員が敵のバトルロワイヤル。僕達にしる君達にしる戦わない理由が無い」

僕達の場合『遊戯』の参加理由が火音を守る為なので戦わない理由にはなるが、相手はそんなことない。自分のパートナーの『人形』を最後まで勝ち残らせて願いを叶えてもらう、それが『遊戯』のス

タンダード。

「だから固いつて。余計な詮索は無しにしようぜ、互いに敵同士なんだからよ」

出雲の言葉を黙殺しハルを見つめる。

「悠夜さん、わざわざ相手に誤解を与えるようなことを言わないでください、馬鹿ですか」

無表情をほんの僅かに崩して眉をひそめたハルが言う。

「あなた方の目的は概ね把握しています。こちらもまたそれと同じように特殊なケースであるというだけです」

「信用出来ない」

「信用していただけるとありがたいです」

「それは無理な相談だよ」

「まあ普通はそうでしょうね。なら、交換条件なんかはいかがでしょうか？」

「条件？」

「たいしたことないものですが、私達が知っている『遊戯』についての情報をお教えます」

ハルはそれが何の情報かは言っていない。本人が言うような価値の低い情報ならまだマシで、既知の情報、もっと悪ければガセネタを言われる可能性だってある。

「情報の内容を聞いてから検討する」

「わかりました」

まさか受けるとは思わなかった。口ではああ言いながら余程情報の内容に自信があるのか、それとも何か策があるのか。

「ちょっと待てよハル。それじゃあこっちが不利だ。こんな奴に媚びる必要は無いんじゃないの？」

「あなたの失態を挽回する為にやっているんですよ。なんなら悠夜さんがここで切腹でもしていただけるのですか？」

「そいつはいろいろと無理な相談だな」

「ええ、私としても悠夜さんに死なれてしまうのは非常にめんどく

さく、悲しいですからね。さて、お待たせしてすみませんでした、御任蒼」

「いや、構わない」

話が遅れるのは構わないからその気味の悪い違和感をバラ撒くのをやめてくれ。

「私達が知ってる情報というのはこうです。この街には私達、あなた方、後はあなたの妹さん方以外の『遊戯』参加者が潜伏しています」

「それだけ？」

「ええ、それだけです」

「そうか、わかった。君達を信じよう、停戦協定ってことでいいのかな？」

「はい、あなたとあなたの妹さんには手を出さないことを誓います」

「それはありがたいね」

「こちらこそありがとうございました」

歩き出す出雲とハルの身長差の際立つ後ろ姿を見送る。いや、見送るといふよりも監視する。信じるだの協定だの言いながら、まだ相手に対して警戒心を捨てられない。染まってきている、『遊戯』という非日常のルールに。

「本人の言う通りしたいしたことない情報だったわね。あんなので信用に足りたの？」

「だからこそ信用出来たって感じかな」

「どういふことかしら？」

「質問に質問で返すようで悪いけど、ハルって実はいいやつだろ？」
天とハルは旧知の間柄であるようなので問う。

「私は自分の質問に答えてもらえないのは嫌いだわ」

「それは失礼。まあ単純な話、あんな微妙な情報で許してもらえろと思っただからかな。嘘の情報を言うならもつと有意義に聞こえる情報を言うだろうし、どうしても信用してほしくて苦し紛れに自分の知ってる情報を言ってみてたように感じたから」

「だからいいやつですって？」

「うん、根は優しいのかなあなんて」

拭いきれない違和感があったものの、ハルから敵意とか悪意のよ
うなものを感じなかった。

「だから相手を信用するって……全くあなたの方がよっぽどいい人
いえ、馬鹿なお人よしね。ハルに善良とか優しいそういう単語は当
て嵌まらないわ。ただ気味が悪い程に純粹で、単純で、無感情で、
人形なだけよ」

「じゃあ僕の人を見る目が無かったのかな。独断で逃がしちゃって
ゴメンね」

あの場の雰囲気呑まれてしまったというのもあるだろう、今
後を左右する大事な場面であったのに天の意見を聞いていなかった。
「別に、前も言ったけど私は蒼の意見に基本的には従うし、自分か
らは戦わないというスタンスの私達にとってもあの提案はありがた
かったわ。それに、私としてはあなたが無条件にハル達を逃がさな
かったことの方が驚きよ」

「どうして？」

「あの男、出雲悠夜と言ったかしら？蒼と淡雪と同じ部活の男、あ
れはあなたの言う『日常』に属するものじゃないの？」

「だから僕が信じるよ」

「ええ、あなたは自分の身内には甘いから」

否定出来ない、むしろ否定したらそれは僕のアイデンティティを
崩壊させることになる。

「まあ、そうなんだけどね。出雲は少し特殊だから、天はあいつを
見てどう感じた？」

「気持ち悪いわね、見ててイライラするわ」

「手厳しいね」

「普通よ。何の脈絡も無く蒼のことを先輩と呼んだりして、しかも
チャラチャラした服装で、人を小馬鹿にしたような話し方で」

「それは普通に天が出雲のことを嫌いなんじゃ……」

なんとなくは予想していたが、妙に真面目なところがある天には髪を茶色に染め、制服を着崩した出雲の服装は拒絶反応が出るのだらう。

「話は最後まで聞きなさい。軽薄な言動はたしかに不快だけど、私のが気持ち悪いって言ったのはそのことじゃないわ」

「じゃあ何なの？」

「それを地でやってるんじゃないことよ。浮いてるのよ、あの男。安定感が無い、人と話している気がしない。ペースを乱されるといっつか、不安定な向こうにこっちまで引きずられる感じとでも言うのかしら。とにかく気味悪いわ」

ペースを乱される、それは僕も出雲に対して抱いていた感想。

「まあ、概ね間違ってるんじゃないというか同意するよ。よくわからないんだよね、出雲は。もちろん友人の一人だとは思ってるんだけど」

信用出来るかと言われたら出来ない。

「癖があるんだよ、あいつは。おいそれと心を許すのに抵抗がある」「ええ、そうみたいね。停戦協定を結んだ今でも信用は出来ないわよ。それに、ハルの話を信じるならまだ『人形』はいる」

「気が抜けない、か」

「そういうことよ」

出雲悠夜にハルツトウン、そして正体不明の敵、不安要素を抱えたまま帰路につく。

いつ終わるかもわからない『遊戯』、僕達はどうすればいいのだらうか。

第二部序章その2（後書き）

お久しぶりです。

卒論という壁を乗り越え僕は復活しました。

今回は新キャラが喋ってるだけですw

というかそもそも、これは一章にするはずだったのが何故か序章の続きっぽい話になってしまいました。しかも、そのせいで繋ぎがやや不自然なのでそのうち改訂版出すかもです。

さて、新キャラが出てきて盛り上がってきた（？）ので、勢いに乗っていきたいと思います！

宜しくお願いいたします。

それでは、また

第二部一章その一

「なあ圭吾」

四時間目の終了を告げる鐘が鳴り、教室はにわかにはざわめきだす。その喧騒に合わせるように、圭吾に声をかける。

「何？」

「最近この街で有名になってる占い師の話って知ってる？」

「いや、知らないな。でも、何か占ってもらっんなら蒼には部長さんがいるじゃないか」

別に占ってほしい訳じゃない。そんな噂を気にかける理由は別にある。

「もしかして、部長さんには相談出来ないようなことなのかな？」

「例えば？」

僕が理由を説明する前に圭吾が検討違いな方向に話を進めているが、合わせてみる。時間はあるんだ、回り道を楽しむくらいはいいだろう。

「恋愛、とか」

「無いね」

恋愛、たぶん一番僕と無縁なことだろう。日常を愛してはいるけれど、その中で更に何か一つを選んで平和な日々を波風を立てる必要は無い。

「学生だっというのに枯れてるね。そんなんでも楽しいかい？」

「楽しいさ」

代わり映えしない日が延々と流れていくのは、平和ボケしてしまふような世界は楽しい。だいたい、こんな悲劇だらけの悲惨な世の中で無事に生きていけること自体が、素晴らしくて、珍しいことだ。「そもそも、圭吾だっという話はあまり聞かないけど。僕に言うなら自分はどうなのさ」

「楽しいに決まってるじゃないか。蒼じゃないけど、僕はこの世界

が好きだよ」

「本当に僕みたいなのを言うんだな」

いつも爽やかに当たり障り無い、軽い話をしている圭吾にしては珍しい。

「まあ、たまにはね」

「そうか」

「で、結局聞いた理由は何だったの？」

「ああ、それは」

話す為に昨夜のことを思い出す。

「ただいま」

「お兄ちゃん、おかえりー。遅かったね、何かあったの？」

「ちよつとね。長くなるから中で話そう」

悠夜については火音に話すかは迷ったのだが、一緒に戦っていく以上話すべきだろう。

僕が火音を守る為に『遊戯』に参加したというのは事実だし、今もその気持ちは変わらない。ただ、僕はあの火音の告白を聞いてしまっている。だから、並びたい。一緒に戦って、共に日常を築きたい。

リビングを抜け、ダイニングにあるテーブルに座る。

「話っているのは『遊戯』についてなんだけど」

「っ！」

引き締まる火音の表情。

「お兄ちゃん、それならヘルも呼んでいい？」

「あ、そうだね。そうするべきだ」

火音のコンビである最速の『人形』も『遊戯』を共に戦っていく仲間である以上聞いた方がいい。

「今の今まで存在を忘れてたくせによく言っわね」

「それは……ごめんなさいとしか言えないよ」

「じゃあちよつと呼んでくるね！」

火音がヘルを連れて二階から下りてきたところで、かい摘まみながら事情を説明する。しかし、どうしてたまたまに苦笑いをされたり、ため息をつかれていいのかわからない。

「やっぱりお兄ちゃんって……」

「真正正銘の馬鹿ね」

「馬鹿だな」

天どころかヘルにまで罵られる。

「妹であるあなたには同情するわ」

「だよねえ。もう、しつかりしてよ」

「わかつたから、勘弁してくれ」

長引きそうになる話を断ち切る。あの場で天に散々言われて、反省点は身に染みているのだ、これ以上はやめてほしい。

「とにかく、一時的に停戦には漕ぎ着けたから火音達からも攻撃しないでくれ」

「だけどさあ。信用出来るのか、そいつ？」

腕を組んだヘルが言う。

「蒼のとんでも理論はともかくとして、約束した以上ハルは従うはずよ」

「いや、そいつじゃなくて所有者の方」

「私個人としては出来ないわね」

「それならなんで見逃したんだよ！」

テールに手を付き身を乗り出すヘルを見据えたまま天が言う。

「蒼が決めたからよ」

「所有者に任せキリか？」

「あの蒼に？ 私が？ もちろん私個人の考えはあるわよ。なるべくハルとは戦いたくない」

「どういうことだよ」

やはり、天はハルについて詳しいようだ。そうして相手について知ったうえで、ハルとは戦いたくないと言う。そこまで厄介な相手

なのか。

「ヘル、あなたが最速の『人形』であるなら、ハルは最堅の『人形』よ」

「丈夫なだけならこの間のやつだってそうだったじゃないか」

「そうね、そして私達は危うくあれに負けかけたわ」

「それは……」

「ねえ」

黙り込むヘルの代わりに火音が言葉を発する。

「そのハルって『人形』もお兄ちゃん先輩みたいに防御力を上げる能力なの？」

「違うわ」

「じゃあなんだよ、回りくどいなあ」

「イライラさせたならすまなかつたわね。単刀直入に言うなら、彼女ハルトウンは『心臓の人形』。心臓と血液を司り、『再生』を駆使する不滅の『人形』よ」

不滅、その言葉の凄まじさに誰も何も言えない。

「でも、僕の『蒼空』なら」

「ええ、あれを使つたうえでハルを細切れにして、更にその上からローラーか何かですり潰せば死ぬんじゃないかしら？」

必死に言い返すも間髪入れずに絶望的な答えが返ってくる

「そんな、馬鹿な……」

天の言うことが本当だとしよう。弱体化してそれなら、どうやってたら死ぬんだ。

「もちろん、それはあなたの能力が今のままの場合よ。他の『人形』を倒して私を人間に近付けたら、あなたの能力自体が進化すればもつと簡単にいけるわ」

「簡単って……」

僕の感覚からすれば不可能に近いことを言われている気がする。

「ええ、これでも簡単な方よ。『蒼空』なんて規格外な能力を持つ蒼だからこそそのレベル。あなたは何か勘違いしてるようだけど、所

有者か『人形』かなんて関係無く他者を強制弱体化する能力、これをチートと言わずとして何がチートなの？」

「まあ、問題は火力不足だけだな」

横からヘルに口を出され天が少し不機嫌になるのがわかる。

「それも誰かと組めば解決するわ」

「でも、『遊戯』は基本的に個人戦だろ？」

自身の願いを叶える為に『人形』と共有した人体のパーツを奪い合う。一時的な共闘ですら珍しいんじゃないだろうか。

「あ、だからこそお兄ちゃんは強いのか！」

僕の疑問に対して、最近はあまり見ない手の平に拳をたたき付ける方法で、ひらめきを表す火音。本人は自分のそういう部分が幼いと言いが、邪気の無い仕草はむしろ可愛いと思う。

「そういうこと。最強クラスの能力を持ち、なおかつ他人と組むことで自身の弱点をカバー出来る。さっきのハルの倒し方だってそう。あれくらいなら出来る所有者はたくさんいるわ。そいつらと協力すればいいのよ」

「ううん、なんかよくわからないけど褒めてくれてるならありがとう」

「ただ、それで調子に乗ったらすぐに死ぬわよ」

「それはわかってる」

この間だつてギリギリだったのだ、『遊戯』は舐めてかかれるよ
うなものではない。

「話が逸れたわね。とにかく、ハルだけで十分面倒なのに、能力不明な所有者がいる状態で戦うなんて嫌ということよ」

「待てよ。それこそおかしいじゃないか」

「何がかしら？」

さつきからヘルが妙に突っ掛かってくる。まあ、ヘルは自分の所有者である火音をかなり大切に思ってくれているようだし、その火音に参加する戦いに納得いかない部分があるのが嫌なのだろう。

僕としてもそれは非常にありがたい。天の作戦や読みを信用して

ない訳ではないが、別の視点というのは必要だ。それに、一見すると直情的なヘルだが、戦闘は理詰めで行うということは敵対している。だからこそ知っている。

「その『心臓の人形』と蒼は相性がいいんだろ？」

「ええ、そうね」

「だったらそいつが力をつける前に……」

「倒すのかしら？信用しにくいとは言ってるもののあれは蒼の友人なのよ。ましてやハルの共有部員は心臓、血管、血液。無くなったら確実に死ぬわ」

「それは……」

そう、どのみち僕には悠夜と戦うという選択肢はあっても、その戦いで悠夜やハルを殺すという選択肢は無い。

「この間のように『人形』だけを破壊することで、最悪の中の最善を得る方法は使えないわ」

それは本来僕の事情、それを天は真摯に説明してくれ、火音やヘルもその面倒な前提を受け入れてくれる。ありがたい、だけど、いいのだろうか。

「それにさつきあなたも言ってたけど、火力不足よ」

「私や火音がいるじゃないか」

火力不足と言われたのが嫌だったのか、頬を膨らませて言うヘル。火音に似たのか元からか、この『人形』もこういう稚気に溢れた行動が多い。

「でもヘル、天さんの言う通りだよ。私じゃさつき天さんが言ったみたいな破壊は出来ない」

「別にあなた達が弱いと言ってる訳じゃないの。あなた達は速さに重点を置いた能力よ。あくまでも攻撃は副次的なものだから、破壊には向かないというだけ」

「むう……」

「ねえ」

未だに膨れるヘルに声を掛ける。

「ヘル達の能力は凄いよ。小賀浦先輩の時もあの速さがあつたから勝てた。ただ攻撃力が高いだけのやつより、よっぽど汎用性が高いしね」

おそろく、攻撃や防御に長けたやつなんていくらでもいる。その中で、速度。これは物凄い強みだ。

「ほら、お兄ちゃんもそう言うてくれてるんだから、元気出すの。自分は人にいろいろ言うくせに自分は言われるの嫌なんて、子供なんだから」

「なっ、ちっ、違うっ！」

「ええ？ ヘルは子供だよ」

「火音には言われたくないっ！」

「ほら、そういうところが子供」

「だから違うっ！」

「あなた達二人ともよ。ほら、まだ話はあるの」
火音とヘルが二人でじゃれだすのを、天が手を叩いて音で制止する。

「僕としてはまだ見ててもよかつただけ」

「シスコンのあなたならそうでしょうね」

「話を続けてください……」

そういう意味ではなく、無邪気な人を見るのは楽しいという意味だったのだけ。

「まあ話はまだあるとは言っても、後は皆の反論の有無を聞くだけよ。ハルと出雲悠夜のペアには手を出さない。問題無いかしら？」

「まあ、しかたないか」

「大丈夫だよ。もーまんたい！」

「僕が提案したんだからあるはずないよ」

「やっぱりだ。皆受け入れてくれる。だけど、それでいいのか。天と火音は僕を信じてくれる、ヘルは最終的には火音に従う。僕の意見が総意となる。」

背負うと決めた、守ると決めた。だからこれくらいはやらなきや

駄目、むしろまだ軽い部類に入る。だけど、恐い。僕の些細な失敗で全てが壊れるのが。

「じゃあ、終わりでいいわね」

「待ってくれ」

聞きたい、本当のところどうなのか。

「どうしたの？ お兄ちゃん」

これは責任逃れなのかもしれない、赦しを請いたいのかもしれない。いや、単純に、弱さだ。何かあった時に全てが自分に降り懸かるのが嫌なだけ。背負うと決めたのに、背負いたくないと思っている。

それじゃ、駄目だろう。

この質問は僕の胸の内にしまうべきだ。

「うわっ！」

なんでもない、呼び止めてごめん、そう言おうと顔を上げたら目の前に火音の顔があったのだ、驚きもする。

「お兄ちゃん、大丈夫？ 天さんが話してる間もあんまり喋らなかつたし。もしかして何か隠してるの？」

「いや、そんなことは……」

「じゃあなんで呼び止めたの？ ねえ、お兄ちゃん。私心配だよ……お兄ちゃんはいつも一人でなんとかしようとする。言ったでしょ、私はそれが嫌なの。大事に思ってくれるのは嬉しいけど、嫌だよ……」

一人で背負い込んでほしくない。それは、無理だ。いや、火音の言い分はわかる。無理はしない、一人で無理なら誰かを頼る。少しずつやっていこうと思う。ただ、今は僕の矜持の問題だ。

「ねえ、何か言って」

まずい、眼前にある火音の瞳が潤みはじめている。

たぶん、今の火音はなんでもないじゃ納得しないだろう。何か、何か無いのか。

「先輩が」

閃いた。これなら、いける。

「先輩つて？」

「淡雪先輩」

「オカルト研の部長代理とかいう？」

オカルト研の名前が出た途端に火音の眉が訝しげにひそめられる。火音はオカルト研にあまりいい印象を抱いてないらしい。まあ、当然だろう。僕だって火音がそんな胡散臭い部活に入るのは嫌だ。

「正確には部活代理だけど。あれは自称で部長は実際に淡雪先輩だから」

「ふうん、変な人だね。それで、その先輩がどうしたの？」

「オカルト研の活動で必要だから、何かいい都市伝説を探してこいつて。だから火音が何か知ってるか聞こうとしたんだ」

「それ、本当？」

「ええ、本当よ」

思わぬ方向からの助け船。僕の内心を把握したわけではないだろうが、答えに窮しているのを察してくれたのだろう。

「天さんが言うなら本当かあ」

「僕のことには信じてくれないんだ……」

「お兄ちゃんは普段の行動を省みたらいいと思うよ」

「それは、何も言えない……」

普段から隠し事や拳動不審な行動が多いというのは否めない。

「でも、よかった。心配しんだよ？」

「うん、ごめん」

まだ全部を話してなくてごめん。

「じゃあ、都市伝説、だっけ？」

「そう、何かいいの知らない？」

「あ、それなら」

「で、妹さんから占い師の話聞いたけど知らなかったから僕に確

認をとつたと」

「そういうこと」

淡雪先輩の思い付きと、火音から聞いた話を圭吾に伝える。当然『遊戯』についての箇所は省いたので、思い出した部分のほとんどは意味が無かった。

「結局圭吾は知らなかったけどな」

「その手の噂は女の人の方が知ってるんじゃないかなあ。クラスメイトの誰かに聞いてみたら？」

「それは嫌だ」

嫌だというか、日常云々と言っているが僕はクラス内での友人は少ない方であり、クラスメイトに突然噂について質問するなんて、気まずくてとても出来ない。

「まあ、蒼は変な人にしか好かれなからねえ」

「失礼だな。というか圭吾はどうなんだよ」

「さあ？ どうだと思っ？」

「確定、変な人だ」

結局、クラスで占い師に関する情報を得ることは出来なかった。

第二部一章その一（後書き）

こんにちは、今回は割と早めの更新となりました。

というか前半は話があんまり進行しないから速く更新しないと飽きる（殴

さてさて、今回の話は圭吾と火音がなんか久しぶりに出てる気がします。

なんか一部の終盤は天と蒼が大活躍してましたからね。
というか天は作者のお気に入りなのでw

無駄話はこちらまでにして、次も早く更新できるように頑張ります。
それではまた次回。

第二部一章その二

「巷で有名な占い師って、もしかして私のこと？」

「勝手に言っただけです。僕は何も言いませんから」

放課後、部室で天と淡雪先輩に合流する。火音から聞いた話を伝え終わった最初の反応がこれだ。呆れて物も言えない。いや、言うてはいるけど。

「御任君、それはそれでボケに対するツツコミになる」

「ボケてる自覚はあつたんですね」

「まあね」

真面目に活動をすると言いながら、結局は無駄話に繋がってしまったのは、しかたないことなのだろう。相変わらずの緊張感の無さに多少はあつたやる気がどんどん無くなっていくのを感じる。

「でも、何処かのマンションに住んでいて無償で占ってくれる占い師、その人に占ってもらったことは覚えているのに何処にいたのかわからない。御任君にしてはいい話を見付けてきた。いかにも都市伝説って感じで調べ甲斐がある。偉い、偉い」

この人なりに褒めてるのだろうが、前半で違和感を感じさせない程自然に悪口を言われているので、喜ぶ気がおきない。

「火音に教えてもらっただけですから」

「そう、妹さんにありがとっつて伝えておいて」

「わかりました」

ただ、火音は淡雪先輩に感謝されてもあまり喜びはしないだろうけど。

「あの、先輩」

「何？ 御任君」

「実際のところどう思います？ その噂」

「どうも何も、眉唾もの。所詮噂だし」

「いや、そうじゃなくて。仮にそういう占い師がいたとして、その

占いは当たると思えますか？」

占いとは何か、僕としてはどうもそこら辺が理解出来ない。信じる信じない以前に、占いそのものに対する認識が曖昧だ。

「前も話したような気がするけど、一般で言う占いと私が考える占いは違うの」

「占いは何が起るかを当てるんじゃないで、行動の指針でしかないってやつですか？」

「そう、その人の抱えた問題やトラウマを当ててる人とかいるけど、そんなものは必要無い。道に立ってる方向を示す標識みたいなもの、ただどっちに行くとかどんな風になるのかの概要を示す。その人の事情や思考とかを鑑みる必要は無いし、行き先の善悪は占われた側に任せるというのが私の考え方」

なるほど、完璧に理解したとは言い難いけど、なんとなくなら理解した。

「あれ、でもそれだと小賀浦先輩の件は……」

あれは普通にどっちが良いとか悪いとか言ってたような気がする。珍しくカツコイイことを言ってたから一瞬尊敬したのに、実は行動を伴っていないオチだろうか。

「祈咲は、ただの占いじゃなくて友達へのアドバイスというか相談も含んでたから……」

先輩の声が萎む。

本人がはつきり言った訳ではないが、先輩は自身の助言を失敗だと考えているらしい。あの後先輩の『予知』がそう出たし、小賀浦先輩は腕を失っているのだからそれはしかたないことだろう。

それに、淡雪先輩は知らないことだが、実際問題先輩の助言が裏目に出て、小賀浦先輩は腕切り魔としての犯行回数を増やしている。ただ、先輩に責任があるかと言えばそれは違う。友達を思っている行動だし、最終的には自分の両腕を犠牲にしてまで僕達に勝とうとした小賀浦先輩は、どんなことを言われても結局ああしていたはずだ。

「まあとにかく、調べるんですよ？」

少し強引かもしれないけど話題を打ち切る。あれは『遊戯』に参加する人間の問題だ。淡雪先輩が気に病むことではない。

「勿論」

「なら、淡雪先輩の指示に任せます。どうします？」

「まずは聞き込みとネットの情報漁りからする。御任君は聞き込みお願い」

聞き込みと聞いた瞬間から嫌な予感はしていたが、やはり僕が辛い方が。

「別に御任君に友達が少ないのは知ってる。だから、妹さんの学校で聞いて」

「サラリと酷いと言いますね」

「だって事実だから」

プレッシャーに負けて誰にも噂について質問出来なかった僕には、先輩の発言にハッキリと反論する術は無い。

「というか、なんでわざわざ火音の学校で聞き込みするんですか。」

僕がネットで調べて、先輩がこの学校で聞く方が楽だと思っただけです。

主に僕が。

「情報をくれたのは妹さんなんですよ？ 妹さんの学校固有の噂かもしれない。それに、手が空いたら私もこっちで聞いてみるから」

「わかりました」

しかたない、おそらくそれが一番妥当だ。

「でも、天はどうするんですか？」

「別に私はあなたについていくつもりよ」

「いや、まあ、そうなるんだろうけど……」

知らない人に都市伝説の聞き込み。しかも女子校で相手は中学生でこちらは男。それだけでも不審者扱いされる要素たっぷりなのに、そこに見た目は幼いゴスロリの少女を連れて歩くとなると、不安以外に何も生まれえないというのが正直なところだ。

「なあ、天。淡雪先輩とじゃ駄目かな？」

「嫌よ」

「バツサリだね。いくら私でも微妙にシヨック」

横で先輩が自分の発言を補強するかのようになり、肩を落としている。「それは、申し訳なかつたわ。ただ、逆に聞くわよ。蒼は私というのが嫌なの？」

「嫌ではないけど不都合というか……」

火音に言えば案内してくれるのかもしれないが、火音の嫌いなオカ研絡みの話だし、何よりそれによって学内で火音に変なレッテルを貼られると困る。だから自力でやるしかないのだが、その際やはり天は不安要素だ。

「なるほど」

何かを納得したように頷く先輩。いつもふざけている人だが、決して頭が悪い訳ではないので、僕の事情を察してくれたのだろう。

「私に考えがある」

電車を乗り継ぎ着いた火音の学校付近の駅から、火音の学校を指す。

「やっぱり、この辺りは街中が綺麗だ」

僕の家がある辺りも整備は進んでいて汚いどころか綺麗な部類に入るが、高級住宅街と称されるこの辺りに比べると見劣りする。

「そうね、ゴミゴミした日本にしてはマシかしら」

まあヨーロッパの方などにもいたらしい天からすればそうだろう。親が仕事で海外を飛び回っているのに対し、国内から一步も出たことがない僕にはわからないが、日本の街並みが汚いという話はよく聞く。

「中途半端に他国のものを取り込んで、合理化して、もともと持ってた美的感覚を損なう。本当に馬鹿ね」

いつもより多少は服装が景観に溶け込んでいる天が吐き捨てる。

「いやでも、都会の建造物はそれはそれで綺麗じゃないか」

「蒼程度の評価が正しいとは限らないけど」

必死のフオローも軽くあしらわれる。学校を出た辺りから天の機嫌が非常に悪い。いや、原因はわかりきっているのだが、未だに解決に至っていない。

どんなに話し掛けてもさっきのようには嫌味たっぷりに返されてしまい、僕の硝子のハートが砕けそうだ。

「あのさ、天」

「何かしら？」

視線すら向けて貰えずに投げ掛けられる冷たい言葉、和解の取っ掛かりがまるで見えない。

「天はそんなに先輩が嫌い？」

「なら蒼はそんなに私が嫌いかしら」

「うっ……」

先程のはあれは勘違いというかすれ違いであり、天のが怒っているのは不条理以外の何物でもないのだが、それでもやはり気圧されてしまう。

「僕のさっきのはそういう意味じゃなくて……」

「わかってるわよ」

「え？」

「別に、蒼がどういいうつもりでああ言ったかくらいはわかってるわ」「じゃあ、なんで……」

ますます意味がわからない。僕の意図がわかっているなら怒る必要は無いはずだ。

「それは……私じゃ、妹さんには……」

天の声が尻すぼみになり何を言ってるかわからない。

「天、聞こえないんだけど」

「別に、なんでもないわ。怒っていたのは私の我が儘で、八つ当たりでしかないのよ。本当に、ごめんなさい……」

あまりにも不自然な対応。許してくれるのはありがたいがどうしても違和感が拭えない。

「いや、でも……」

「お願い、自分でも今物凄く情けないのよ」

「わかったよ。ただ、あまり深く考えすぎないようにね」

「まさかあなたにそれを言われるなんてね」

たしかに、いつもは僕が天から言われていることだ。

「それで？ 結局、さっきの質問はどうなの？」

天は八つ当たりだと言うが、天が嫌悪に近い形で淡雪先輩を避けているのは事実だ。

「あの人は……前にも言ったけど自分でもよくわからないわ。ただ、なんとなく苦手なのよ。近寄りたいたいというか」

「そうなんだ」

僕は単に先輩のあの独特のテンションや言い回しが苦手なだけかと思っていたのだが、思ったより根は深いようだ。

「本当にいろいろごめんなさいね」

「いや、いいよそんな。天らしくもない」

「あなたはいつたいどういう目で私を見ているのかしら」

「さあ、どうなんだろうね」

「嫌味っぽいわよ」

「天には言われたくないな」

軽口を言い合い互いに微笑む。なんとかあの妙な空気を解消出来たようだ。

「さて、ここだよ」

どうやらかなりいいタイミングだったらしい。

「かなり大きいわね」

「だよね……」

目の前には火音の通う私立桜坂女学院の巨大な門がそびえ立っていた。

第二部一章その二（後書き）

どうも、いろいろ大変な昨今ですが皆さま大丈夫でしょうか？

私自身は、特に被害も無く無事です。

皆さまいろいろと大変な中で、もしこの小説から何かを感じてくれる方がいらしたら大変嬉しいです。

さて、今回もまたあんまり話進んでないですね、つか天が若干キヤラほづk（ゲフンゲフン

まあ、そんな感じの今回ですが今後ともよろしくお願いします。

あ、たぶん更新ペース少し速めます

第二部一章その三

私立桜坂女学院、火音が通う学校であり、僕が通う公立高校なんかとは比べものにならないような名門校。

私立の中高一貫校なのでそれなりに高い学費がかかるはずだが、うちの両親は家にいない代わりに稼ぎは悪くないので問題無い。

「で？ どうするのかしら？」

「どうしようか」

資金が潤沢な私立校でかつ結構なお嬢様学校だ。門のところには当然のように警備員がいて僕が入れるような雰囲気ではない。

「生徒に話を聞く以前にどう学校に入るかね」

「だよねえ……」

生徒に不審者扱いされるも何も、これではその生徒に会う前に門前払いになってしまう。

「まあ、火音は部活で中にいるだろうからいざとなったら力を借りれるけど」

「あなたがそれが嫌なことくらいわかってるわ」

しかし他に策が無いのも事実。それに、下手に学院前で長居しても警備員に目を付けられるだけだし、どうするべきか。

「ねえ、蒼」

「なに？」

「こつちに向かって来る二人組が見えるかしら。彼女達が門を出たところで声をかけるわ」

天が指差した先には、背が高く茶色い短髪にした子と、黒髪を後ろで小さく束ねた小柄な子の二人組。

「先輩の言ってた方法？ 大丈夫かなあ」

「別に着眼点自体は悪くないわ」

「まあそうだけどさ……」

「来たわね、行ってくる」

門を出て僕達と反対方向に歩き出した二人組に、天が声をかける。これが淡雪先輩の提案した方法。男の僕では怪しまれるが、女性でしかも幼い見た目の天ならば警戒されないという理屈だ。さらに淡雪先輩が言うには、天のミステリアスな雰囲気は他者を圧倒し、多少の違和感は納得させることが出来るらしい。

「そんなに上手くいくとは思えないんだけど」

まあ、天の容姿やオーラが現実離れしていて気圧されるというのはわかる。だからといって初対面の相手の、しかも非常に胡散臭い話に食いつく人はいないはずだ。

「蒼、話を聞かせてくれるそうよ」

食いつく人はいるようだ。

「あ、この子のお兄さんなんですよね。妹さん、お人形みたいで可愛いですね」

天と共にこちらに歩いてきた、黒髪の少女が微笑みかけてくる。

「どうやら僕と天は兄妹という設定にしたらしい。」

「それはどうも」

実際は妹どころか人ではない本物の人形な訳だが。

ただ、この女子生徒がわからないのも無理は無い。天にしるヘルにしる、『人形』はどれも皆異様なまでに精巧に造られていて、最初に人形だとわかったのが自分でも不思議なくらいだ。それに、未だに淡雪先輩も気付いていないとなると、相当なことが無い限りバシることは無いだろう。

「ちよつと、お兄ちゃん」

僕の思考を遮る強烈な違和感。

「は？ お兄ちゃん？」

「血縁上の兄を私がお兄ちゃんと呼ぶことに何か問題があるのかしら」

「こちらを睨む天の目には悟れの文字。」

「ああ、そうでしたね。えっと、すいません少しぼんやりしてて」

「全く、使えない兄ね。この二人が例の噂について教えてくれるそ

うよ」

兄妹という設定とはいえ、天からお兄ちゃんと呼ばれることに慣れない。というか、口調を直さずに僕の呼び方だけ変えてもあまり意味は無い気がする。

「妹さん、こんな小さいのに占いに興味があるなんて凄いですね」

「この服もゴスロリって言うの？ 凄いですね、いいですね」

目の前でキャピキャピと会話している女子生徒達を見る限り、違和感を感じてないようだが、こんなぎこちない演技で大丈夫だろうか。

「服装で思っただんですけど、その眼帯もしかしてお揃いですか？

妹の調べ物に付き合ったりして、兄弟の仲いいんですね」

「いや、これは……」

しまった。僕の場合この眼帯の下には何も無いので、これを外すという選択肢が無い。そのせいで、一般的な服装に眼帯は非常に浮くことを忘れていた。

そもそも、自然な状況設定にする為に僕との関係を兄妹にしたようだが、打ち合わせも何も無い思い付きなので既にボロが出ている。

「兄は病気よ。私は、趣味」

「あの、すいません。噂について何か知ってらっしゃるなら、速く教えてくださいませんか……」

天の答えに続くようにフォローを入れる。

話が長引くのは避けたいし、僕の呼び方が安定しないことや、口調が硬く敬語が使えていないことから察するに、天はかなり緊張しているようだ。このまま無駄話を続けても何の得も無い。

「あ、そういえば話すんでしたね」

「でも、私達はその噂に詳しい訳じゃないんです」

どういうことだろう。一発目から何か知っている人を引くなんて随分と幸先がいいと思っていたのだが、違うのだろうか。

「私達の先輩でその噂について調べてる人がいるから、その人を紹介しますね」

結局当たりではあるらしい。

雑多な食べ物に人の臭いが混ざった香りと、ガヤガヤと統一性の無い会話が体を包む。

桜坂女学校近くのファミレス、そこで先程の二人組の黒髪の方と共に、噂に詳しい先輩とやらを待っていた。

「先輩部活中みたいで、ちょっと時間かかります。すみません」

「いやいや、むしろわざわざ迎えに行かせちゃってすみません」

ただ、僕が女性二人を連れている状況になり周囲の客からの視線が痛い。

「学校的には大丈夫なんですか？」

「どういう意味です？」

ストローに口を付けた少女が言う。

「いや、僕達みたいなのについて来ちゃって大丈夫なのかなって、有名な学校である分、そういうことに関する管理や教育は厳しいだろう。それなのに知らない人間とこうして話しているというのは、厳罰物ではないだろうか。」

「たぶん大丈夫だと思います」

「随分と軽いですね」

別に火音もお高く止まった感じではないし、お嬢様学校とは言っても生徒は割と普通の人なのだろう。

「でも、本当にありがとうございます」

僕達に協力すると相手に迷惑がかかるかもしれないが、協力してもらわないと困るのも事実だ。

「そんな、私もその噂は気になってから大丈夫ですよ」

「どういう意味ですか？」

「ええと……」

話すことを整理するように軽く視線を上に向ける少女。

「先輩連れて来たし、まとめて話した方が速いんじゃない？」

「あ、お帰りなさい」

「お疲れ様です」

ちようどいいタイミングでもう片方の子が戻って来る。

「先輩、この人達はその噂について聞きたいって人です」

「う、うん……」

妙に歯切れの悪い言葉の聞こえた方へ目を向けると。

「あつ！」

火音がいた。

いや、これはあまりにも出来過ぎた展開じゃないか。僕にその占い師の噂を教えたのは火音だし、火音の通う学校に来たのだから遭遇してもおかしくはない。だけど、それにしただって酷い偶然だ。

「御任先輩、こちらがえつと……」

「蒼と天です」

火音の知り合いの手前、名字を言う訳にはいかないので名前だけ名乗る。

「え？」

「お、同じ読みで字だけ違うんですよ……」

「へえ、変わってますね」

兄妹設定にした弊害がここでも出ている。本来的には僕と火音が兄妹なのでここでそれを明かすべきなのだろうが、天と僕が兄妹ということにしてしまった為、それが出来ない。

「ねえ、二人とも」

蚊の鳴くような声で火音が言う。

「なんですか、先輩？」

それにしても、小柄な部類に入るであろう黒髪の子よりも小さい火音が先輩と呼ばれているのは、なかなかシユールな光景だ。

「実は私、この二人と知り合いなんだ。だからちよつと三人だけで話したいんだけど……」

いつも快活な火音らしからぬ遠慮がちな態度。僕に到っては未だに混乱から抜け出せず、固まったままなんだから火音はマシな方だろう。

「ええ、私働き損じゃないですかあ。私も先輩の話聞きたかったなあ」

「でも先輩も事情あるみたいだししかたないよ、ね？」

「テールブルのうえで脱力したように伸びる茶髪の子の頭を、黒髪の方が撫でて宥める。」

「実際彼女は火音を探して走り回ったのだから骨折り損のくたびれ儲け、無駄に体力を消費しただけだ。」

「しょうがないかあ……わかりました。じゃあ先輩方、お疲れ様でした」

「うん、お疲れ様」

「お疲れ様です」

席を立つ二人を手を振り送り出す。

「なんか、悪いことしちゃったね」

いきなり知らない人間に話し掛けられて戸惑っただろうし、そのうえよくわからないままに解散だ。

「もお……お兄ちゃんのせいだよ。最後の別れ方も不自然だったし、明日またフォローしておかないと」

「それはごめん」

火音に迷惑をかけない為の行動だったのに、結局火音の負担が増えただけだ。

「私からも謝るわ」

ファミレスに入って以降ずっと無言を貫いていた天が口を開く。

「今回の件がややこしくなったのは私のせいでもあるもの」

「そんな、天さんは何も悪くないですって。全部お兄ちゃんに押し付けちゃえばいいんです。ね？」

「それは……そうね、それがいいわね」

「そーらーさん、そこで納得されても困るんですけど」

人が真面目に反省している横であなたは一体何をしているんだ。「で、反省会は終わったみたいだから聞くけど、火音が例の噂に詳

しいってどういうこと？」

火音はその手の話題にはあまり興味を示さないタイプのはずなので、自分から進んで調べていたというのが意外だ。

「あの子達もせっかちなんだよねえ……確かに私はその占い師の噂について調べてたけど、それは今日からだよ？」

「どついう意味かしら？」

「うん、噂自体は前から知ってたの。それで、昨日それをお兄ちゃんに話して、お兄ちゃんがその噂を調べるなら手伝おうと思って」

「それなら言ってくればよかったのに」

「だってお兄ちゃんをビツクリさせたかつたんだもん！」

なるほど、それに自分の嫌っているオカルト研の活動を自分から手伝うというのも癪だったのだろう。

「わかった。要は、火音が今日から調べていたのをあの後輩二人が前から調べているんだと勘違いして、僕に紹介したと」

「そうそう、そういうこと」

「ってことはもしかして」

「うん、実は私もいい情報は特に持ってないんだ」

「やっぱりか……」

この手の噂は広範囲に広がるせいで、元を突き止めるのは難しい。「大丈夫、私がちゃんと調べておくから。任せておいて、お兄ちゃん」

「ん、わかった。ありがとう」

「火音に迷惑掛けたくないとか言っておきながら随分あっさり承諾するのね」

「まあね」

事実、昔の僕なら断ったかもしれない。ただ、火音にも火音なりの考えや意地があることを知ってしまった。

「もう調べ始めてるんじゃないかたない。それに、火音が調べた方が確実なのは自明の理だ」

「そう、なら別にいいけど」

口に出さない本音まで読み取ったか、天の口が小さく笑みの形を

作る。

「よし、じゃあ期待しといてっ!」

「了解。さて、二人ともなんか食べる?」

「え? いいの!」

「別に私は……」

自分達もファミレス内の喧騒の一部となる、占いなんかに頼る必要も無く、こうして僕達の平和な日常は過ぎ去って行く。

それが、楽しい。

いいや、私は楽しくない。

そこはまだ、物語の序盤。

これから劇的に、鮮烈にクライマックスに向かって行く物語を彩る為の、つかの間の平和。

見せてくれ、喜劇を。

既に幕は上がった。後はただ、進んでいくのみだ。
そつだろっ、御任蒼。

第二部一章その三（後書き）

はい、どうもミナミミナミです。

いきなりで申し訳ありませんが、なんとというか、小説書くのって難しいですよ。

この小説についていただく感想の大半が、前半のテンポの悪さや、誤字脱字、文法的なミス、風景や動作などの描写の少なさに関するものです。それらは自分でも自覚のある欠点であり、非常に耳の痛い話です。

しかし、自覚しているのにまだ改善されない。

やはりそこはまだ自分の力量不足なのでしょう。

自分としてはこの小説のキャラやストーリー、世界観には愛着があります。

なのでもっと力をつけてからリメイクしたいと考えています。

長々とすいません。

リメイクするまではこのままでという訳ではなく、この小説を更新していきながらもっといい作品を書けるようにしていただきたいです。

第二部も一章がこれで終わり、悠夜なども絡んできて盛り上がりつつあると思います。さらに、第二部はこの作品通しての転換点というかこれが終わったら半分という位置づけです。

まだまだな俺ですが、皆さん今後もしもご指導ご鞭撻のほどを宜しくお願ひします。

第二部 二章 その一

「火音、そろそろ到着するみたいですよ」

メールを送信し終わった携帯を閉じ、淡雪先輩に視線を向ける。

「そう、よかった」

「よかったというか、僕達にだって予定はあるんですから、今回みたいな急な話はやめてくださいね」

「だって、妹さんに調査をお願いするなら一回会っておきたいから」「それはたしかにそうですけど……」

火音に会いたいという先輩の発言によって本日急遽顔合わせが行われることになり、火音はそれを快諾してくれたのだが、自分よりも他人を優先する癖のある火音のことだ、多少以上の無理をしてきている可能性が高い。

「とにかく、こういうのは今回だけですからね」

まあ火音を心配している僕が占い師の噂の調査を火音に任せているせいで、誰よりも火音の時間を潰してしまっているという辺りが皮肉だけ。

「どうせ御任君になんてろくな用事は無いでしょ。でも、急に妹さん呼び出したのは私が悪かった、ごめんなさい」

たしかに、今は『遊戯』に関して急を要する案件が無いため僕に用事は皆無だ。しかし何故、それを指摘されると一抹の寂しさを覚えるのか。

「それにしても、この部室に四人以上集まるのは久しぶり」

この話は終わりとばかりに、先輩が狭苦しい部室を見渡しながら言う。

「私にいたってはようやく二回目くらいかしら」

珍しく先輩の話に反応する天。まあ、非常に語調の強いものではあるのだけ。

「昔はもっといっぱい人がいたんだけど」

「昔は、でしょう」

苦笑しながらの先輩の言葉をバツサリと切り捨てる。

天なりに淡雪先輩と親密になるうとしていいのかもかもしれないが、これでは逆効果になっている気がするならない。

「でも、私は今の雰囲気も好き。昔の賑やかなのもいいけど、今みたいに御任君がいて、天ちゃんがいて、出雲君がいる。こんな日常が好き」

何処かぼんやりしていて、つかみどころのない先輩にしては珍しい力強い言葉。

「蒼みたいなことを言うのね」

「僕みたいなのを言うんですね」

奇しくも、それに対する反応が天と重なる。

「御任君と一緒にだなんて二人とも失礼」

「あなたが失礼です」

一瞬生まれたかのように感じた連帯感も、先輩の言葉によって消える。だがしかし、これが先輩の言ういつもの僕達らしいのかもしれない。

「全く……」

人数が少なくても十分以上に賑やかだ。

「んっ」

一段落ついたタイミングを見計らったかのように携帯のバイブが鳴り出す。

「火音着いたみたいなので、ちょっと迎えに行ってきます」

校則の緩いこの学校なら、火音の学校のように警備員に阻まれ入れないなんてこともないだろうが、頭まで緩いうちの生徒に火音が絡まれないとも限らない。

「淡雪先輩、とりあえず少しは部室片付けといてくださいよ」

「やだ、めんどくさい」

「あなたがいろいろ持ち込んでるんでしょうが」

もともとたいして広くない部室は、先輩の私物で場所の大半を占

領されている。火音をこんな汚い場所に来させる訳にはいかない。

「わかった、天ちゃんも一緒に」

「なんで私がやらなきゃいけないのかしら？」

「連帯責任」

「明らかにあなた一人の責任よね」

軽口を応酬する二人の声を背に受け部室を出る。あの分なら、僕がいなくても気まずくなることはないだろう。

「へえ、ここがお兄ちゃんの学校かあ」

「来たことなかったっけ？」

何の変哲もない廊下を、スキップでも始めそうな勢いで歩く火音。特に珍しくもない通路の何がそんなに楽しいのだろうか。

「去年私が文化祭来たいって言ったら駄目って言ったのお兄ちゃんじゃん」

「そうだったかな」

言われてみればたしかに、規模も小さく地味な文化祭に来ても意味ないだとかなんとか諭した記憶がある。実際は文化祭などによく出没するナンパを避けたかっただけなのだが。

「だから今日が始めて」

こちらを振り向き笑う火音、理由はともかくこの笑顔が見れたならよしとしよう。

「というか、道わからないのに僕の前を歩いちゃ駄目じゃないか」

「あつ、そうか」

「そうだよ」

我が妹ながらそそっかしい。だけどもあ、それを含めて火音であり、僕の大事な日常なのだが。

校内の様々な物に興味を示す火音に逐一説明するという、ちょっとした学校案内をしたせいで、部室に着く頃にはそれなりの時間が経過していた。

「結構遅くなっちゃったかな」

「ごめんねお兄ちゃん、私のせいだ」

「別にいいよ。久しぶり、というか放課後の学校をこんなにじつくり眺めるのは初めてだから、僕としても楽しかったし」

「そこが普段過ごす場所となると人間あまり気にしないものだ。それは慣れ、慣れていくからにはだいたいの雰囲気は覚えているし、どんなものかは理解出来ているが、以外と些細な変化に気が付かない。」

「自分が当たり前だと思っているものがその当たり前のままそこにある。それは幻想で、人間自分が見たくないものは見ないまま、平凡に、平穩に、平然と勘違いしながら生きていくんじゃないかな」
僕の蒼空、その根源である日常の異物を認めないというのもそういうことだ。そんなものは無いと信じる。だから無くなる。

「相変わらずお兄ちゃんは中二病というか。急に難しいこと言い出すよね」

「それが僕だから。さて、着いたよ」

様々な部室の立ち並ぶエリア、そのなかでも比較的奥まったところに才力研の部室はある。

「ここにその部長さんがいるんだよね」

「別に緊張しなくても大丈夫だから」

あの人相手にそういう固い気持ちで会っても拍子抜けするだけだ。

「そういう意味の緊張じゃないんだけどなあ……」

「ん、何か言った？」

「ううん、なんでもない」

首をちぎれそうなくらい左右に振る火音、不自然過ぎる程に不自然リアクション。

「何かあるんだったら隠さないで、僕が協力するから」

協力するどころか、全身全霊全てを注ぎ込んでも構わない。

『遊戯』で共闘する仲間だとかそれ以前に、僕は火音の兄だ。妹

の相談に乗るのが兄の存在意義であり、僕にはその義務がある。

「はあ、やっぱり目下の一番の敵はお兄ちゃんだよ」

僕の言葉を受け、キョトンとし、溜め息をつき、苦笑いをするという一連の動作を流れるようにしながら火音が言う。

「いや、それはどういう……」

協力すると言ったのに敵だなんて、もしかしてそこまで込み合った複雑な事情があるのだろうか。

「絶対お兄ちゃんにはわからないからいいの。部長さんとか天さん待ってるんでしょ、早く行こうよ」

「え、いや、だから」

「失礼します」

強引に会話を打ち切り、そそくさと部室の扉に向かった火音は礼儀正しくノック、そしてやや上擦った挨拶と共にそれを押し込む。

「ようこそ妹さん、オカルトけ……え？」

開いた扉から待ち侘びていたとばかりに飛び出してきた先輩の言葉は途切れ、代わりに漏れるのは呆けたような言葉。

「ねえ御任君、私は妹さんと呼んでほしいって言った」

「いや、呼んでますけど」

「嘘」

「なんですかその謎の否定」

僕はどうして火音に会ったことすらない先輩に、火音との血の繋がりを否定されているのだろうか。

「だって御任君の妹がこんなに可愛いだなんて、生物学上あっちゃ駄目」

「散々な言い草ですね」

たしかに火音は身内の鼻屑目を除いても可愛いし、僕が俗に言うイケメンかと聞かれれば返答に困るが、だからってこうもいきなり非難される筋合いは無い。

「二割は冗談だから」

「だったら八割の本音はしまつて二割の言葉で生きてください。わ

わざわざ来てもらったんですから、さつさと本題入りますよ」

「そうね、時間は有効に扱うべきだわ。何処かの誰かみたいに入人迎えに行くのに膨大な時間を使うだなんてあってはいけないもの」
先輩に向けての言葉のはずが、ソファアの奥に座っている天が反応する。

「やっぱり怒ってる？」

長時間待たせてしまった訳であり、淡雪先輩はともかく天の機嫌を損ねてしまっていることは予想していた。

「ええ、怒ってるわよ。私は、無駄に時間を使われて、とても怒っているわ。さて、蒼。どうしてくれようかしら？」

「いや、その……」

この場合どう弁解するにしろ責任は僕にある訳であり完全な言い逃れは出来ない。

「と、言いたいところだけど。別にいいわ、許してあげる」

さもしかたないと言うように肩をすくめながら天が言う。

「今日は火音もいるし、ここで私が蒼に怒っても逆に彼女の時間を無駄にするだけだわ。私は、そんな何処かのマヌケみたいなことをするのは御免よ」

別にいいと言いながらも、僕に対する毒を忘れない辺りが非常に天らしい。

「その代わり、ここで浪費された時間は後で必ず埋め合わせしてもらうわよ」

不機嫌な表情から一転、微笑を浮かべた天からの命令。

「構わないよ」

それくらいなら、いつでも、どこでも。

「ねえ、御任君」

「何ですか？」

「いつまで皆で突っ立ってるの？」

しまった、先輩や天にツッコムことに気をとられすぎた。

「御任君が相変わらずでごめんなさい。ここに座って。えと……」

ソファーへの着席を勧めていた淡雪先輩が発言に詰まる。

「あ、火音です。御任火音」

「火音さん、よろしく。私は白神宮淡雪」

「はい、よろしく願います」

いつもの笑顔とはやや違う、公用の笑顔でお辞儀をする火音。我が妹ながら素晴らしい。よく僕の悪影響を受けなかったものだ。

「さて、それじゃようやく本題に入れるね」

今回は火音の話を聞くのがメインなので、テーブルを挟み火音と僕達三人が向かい合う形に座る。

「なんかあんまり好きじゃないな、この座り方」

「え？　なんで、普通じゃない？」

火音に問い掛けられ始めて気が付く。これはあの瞬間を彷彿とさせるのだ、小賀浦先輩と僕がこの部室で始めて出会った瞬間を。

「さあ、なんでだろう」

はぐらかす。というより、別にわざわざこんなことを言って場の空気を壊す必要も無い。

「それじゃあ、お願いしてもいい？」

先輩が火音を促す。

「わかりました。ええと、何から話せばいいのかなあ。えっとですね」

悩むようなそぶりをしながらも、話す声はちょうどいい速さと音量を保つ。

「噂の内容は、皆さんの知ってるとおりなんです。なんでも解決してくれる占い師がいる、だけど相談が終わるとその人がいたマンションや占い師の顔を覚えていない」

僕や天以外に、年上でかつ身内ではない淡雪先輩がいるからか、普段はあまり聞かない敬語で話す火音。

「ありがちな話ね」

「私もそう思います」

天の横槍にも特に不快感を覚えた様子はなく、むしろ肯定してか

ら続ける。

「実際そういう噂はよくあるから、この噂もその系統かと思ったんです。だけど、ちょっと変なんですよ」

「変？」

僕は仮にもオカルト研なので都市伝説などにも多少は明るい。それらにはある一定のパターンのようなものが存在しているのも知っている。

「こういう噂にありがちなそこから派生した話とかが無くて、流れてる噂の内容がだいたい同じなんです。この一週間私はいろんな人に聞き込みをしました。噂自体はかなり広まってるんですけど、どの話も要約するとさっきの内容になるようなものばかりで」

「かなり広く知れ渡ってるにも関わらず、内容に変化が無い」

そんなことがありえるのだろうか。口伝えという方法をとる以上、噂は大勢に広まる過程で姿を変えていくものだ。

それは解釈の違いであつたり、話をより強烈で面白くしようとす意識的な介入から起きるが、理由はなんであれ噂は変遷し亜流が生まれる。

それが無い。だとしたらその理由は何か。

「先輩、どう思います？」

「まだわからない。ねえ、火音さん、噂の発信源や実際にその占い師に会った人ってわかる？」

さすが淡雪先輩、普段のやる気の無さと裏腹にこの手の話題への対応力は凄まじいものがある。

「ごめんなさい、わからないです。噂が広まり過ぎちゃってますし、逆に会ったって人は人数が多過ぎて……」

情報を得られなかったことに関して、必要の無い責任を感じているのだろう。唇を噛み俯く姿は、誰が見ても悔しがっているようにしか見えない。

「それならしかたない。じゃあ火音さん、次は噂に本当に関わってそんな人を探すことを中心に調査をお願い」

「はい、わかりました」

沈黙、火音が頷いたことで話が終わったかのような雰囲気の流れるが誰も口を開かない。

「別にこれだけわかれば問題無い」

「気まずい無音の中、先輩が唐突に口を開く。」

「あなたは自分の仕事を誇るべき。何処かの無能なんかとは比べものにならない」

「だからどうしてあなた達は何かある度に僕をけなすんですか」

「しかたない」

「しかたなくないです」

「もはや固定化したいつものやり取り。」

「ははっ」

しかし今日はいつもは無いものがある。

体を震わす火音、押さえた口からはしかし止めきれない笑い声が漏れる。

「ほら、見なさい蒼。火音もあややってあなたの無能っぷりを笑っているわよ」

さらに天も参戦。

「いやいや、普通に楽しそうに笑ってますから。火音はあなた達みたいな挨拶がった性格じゃないので、そういう笑いじゃないですからね」

僕も若干オーバーなりアクションで答える。皆の気遣いがあるがたい。

「はあ、全く……」

ため息をつくのが、僕の口許にも隠しきれない笑みが浮かぶ。

「ふふっ」

誰かが漏らした声を皮切りに、決壊。

火音や先輩どころか、天ですら声を出して笑う。

しばらくは四人で、隣の部室から苦情が来てもおかしくなくらい笑い続けた。

全員で爆笑した後、もう終わりという先輩の一言で解散した帰り道。

「はぁ、まだお腹痛いよ」

先程の余韻がまだ残っているのだろう、酷使した腹部をさすりながら火音が言う。

「でも、楽しかった」

「そうだね」

僕に、天、火音、淡雪先輩、普段はありえない組み合わせながら楽しかった。日常の変化もああいう変化であれば問題無い、むしろ歓迎しよう。

「天があんなに笑ってるのは始めて見たかも」

「うるさいわね。あれは皆に合わせただけよ」

照れ隠しにか顔を背けたまま天が言う。

特別な意味など無い、他愛ない会話。

沈み行く太陽に照らされた赤い道を僕らは歩く。

「綺麗な夕焼けだね」

はしゃぐ火音に合わせるように長く伸びた影は動き回る。

平坦な道、真っすぐ続く道の先、光量が落ちてもなお目を焼く紅い太陽。

そしてそれを背に受けこちらに向かう、人影。

「相変わらず平和ボケか、蒼君よお」

逆光で顔は見えない。しかし、声でわかる。

「人を待ち伏せするのがそんなに好きなのか、悠夜」

前回に続き今回も帰り道で現れるとなると、もはや趣味なのかと勘繰るレベルだ。

「はっ、愛の告白でも期待してんのか？ だとしたら残念、俺はお前みたいなのよなよした奴に興味はねえ」

「僕としてはそのつもりは無いんだけど」

「嘘つけ、大ありだろうが。だってお前、『遊戯』関連だと思いな

がらわざと目をつぶってるよな」

遠くで車のクラクションの音が鳴る。会社から帰る人だろうか。

ああ、僕も早く帰りたい。この場にいたくない。

「お兄ちゃん……」

「大丈夫だよ」

僕の服の裾を掴んでくる火音の頭を撫でてやる。出来れば火音にはこの男と関わってほしくなかった。

「平和ボケだけじゃなくてロリコンも相変わらずか」

「さつきから何を言ってるのかよくわからないな」

「じゃあわかるように言つてやるよ」

少しずつこちらとの距離を詰めてくる悠夜。ようやく見えたその顔に浮かぶのは、猛々しい笑み。牙を剥くかのように歯を覗かせ、笑いながら言う。

「俺はお前の能力自体は評価してんだ。妙に勘のいいお前が、あんなだけの材料、そしてトドメに俺の忠告まであつて気が付かない訳が無い」

人通りの無い道、冬が近づき冷たくなってきた風が僕を叩く。

「常識では説明出来ない超常現象、普段の生活に混じるとどうしようもない違和感。そういう場合は『遊戯』を疑うべきだってことくらいわかるよな」

たしかに、火音の話聞きながら『人形』や所有者の能力かもしれないと考えたのは事実だ。

「だけど、あれは単なる女子校の噂だ。ありがちな都市伝説にすぎない」

「この街にはあと一組『人形』と所有者のペアがいるって俺からの情報があつてもか？」

「まだお前の情報が正しいと決まった訳じゃない」

『遊戯』の関与を疑うのはまだ早い、早いはずだ。

「おいおい、いくら俺とお前間に絶対的な情報量の差があるとはいえ、情けないぜ蒼君」

違つ、僕は冷静に判断しただけだ。

「蒼、行きましょう。こんな奴の言葉に耳を貸す必要は無いわ」
今まで火音と共に状況を見ていた天に手を引かれる。

「本当に情けねえな。まあ、お前はそうやって夢見てればいいさ」
天に引つ張られるがままに前に進む僕とすれ違い様に一言。

「この件は俺が片付ける、手は出すな」

今までの軽薄な雰囲気など微塵も無い、ただ低い、獣の唸り声。

「まっ、手出すなんて言うまでもなく蒼君は腰抜けか」

僕の背中に投げ掛けられる声には、再び軽薄さが戻っていた。

第二部二章その一（後書き）

はい、お久しぶりです。

全開早めの更新をするとか言ってた気がしますが……
言い訳をしますと、スランプでした。
もう書けない書けない。

ただ、そのスランプで学んだことは多かったと思います。
今回更新した分も、その教訓を自分なりに生かしたと思います。
具体的に言うならば、少ない少ないと言われ続けてきた空間や情景
の描写を増やしてみました。

今までの自分の文から少しは変化したと思います。
その良し悪しはまだわかりませんが、ともかくそれに関して皆様
から意見を頂けたらなと考えております。

それでは、また次回お会いしましょう。

第二部 二章 その二

「どういつつもり？」

鳥の鳴き声が響き、太陽は地上を照らし、冷たく澄んだ空気が漂う典型的なまでの清々しい朝であるにも関わらず、隣にいる天はこちらを射殺さんばかりの目付きで睨んでくる。

「何が？」

どういつつもりも何も、僕としては睨まれるようなことをしているつもりは無いのでむしろこちらが聞きたいくらいだ。

「だからどうして私は半ば強引、いえ十割方強引にあなたと外出させられているのかと聞いているのよ」

「ああ、なんだ」

そんなことが。

「いや、無理矢理連れて来たのは謝るよ」

休日だというのに天が朝から暇そうにしていたので連れ出したのだが、用件も言わなかったのは些か性急過ぎたかもしれない。

「あなた、私が朝から暇だと思ってたわね」

「はい、思っていました」

どうしてバれているのか。そして前にもこんなことがあった気がする。

「馬鹿ね、かまをかけただけよ。引つ掛かるなんて本当に馬鹿。まったく、別に蒼と出掛けるのは嫌じゃないけど、理由くらいは言ってもらわないと困るわ」

「うん、やっぱりそうだよ。ごめん、ごめん」

再度の謝罪、話しながらも歩みは止めない。朝露だろうか、微妙に濡れて輝く道を先に進む。

「それで、結局私はなんで連れ出されたのかしら？」

「ほら、この間約束した埋め合わせだよ」

「へえ、自分から言い出すなんて随分殊勝なこと。なら当然、ちや

んとしたプランを用意しているのよね」

「無いよ」

今もとりあえず駅に向かってはいるが、何かはつきりとした考えがある訳ではない。人や店の多い場所に行けば何かしらあるだろうという雑な予測に基づいた行動だ。

「寝ぼけてるのか私をおちよくってるのか、どちらとして扱ってほしい？」

可愛らしく小首を傾げてはいるが、天の目は笑っていない。これではどちらに転んだにせよ、天から小言を喰らうのは決定事項しているに等しい。

「どっちも勘弁してよ。僕はいたって真面目だ。とにかく、今日は精一杯楽しめばいいじゃないか」

「その為に計画を練るべきと主張しているのよ」

「ああ、うん、そうか……」

「蒼……？」

疑問を表すジェスチャーとして傾げられていた天の首が、そのまま訝しげに傾げられる。

「蒼、今日のあなた何か変」

「そんなことはないと思うよ」

僕はこんなにも通りで、何もおかしくないところはない。

「そうね、あなたが変なのはいつものことだわ」

「酷いなあ。そんなこと言ったら」

「ただ」

僕の言葉を遮りながら続ける。

「今はいつも通りだと変なのよ」

「それは……」

違う、何もかもがいつも通りだ。別に何もおかしくない、今日も僕の周りは平和だ。

「私のパートナーは随分な臆病者でね。大好きな日常の中に少しでも変なところがあるとすぐにうるさく騒ぎ立てるの」

「だからさつきから何を言ってるのか……」

「いつもみたいに、僕の日常を守って盛り上がらないか聞いているよ。もしかしてあなた、今更逃げるつもり？ 本当に呆れるわね、呆れ返るわ。精神的に不安定になった蒼がみつともないのはそれこそいつものことだけど、今日のあなたは輪をかけて醜いわよ」

「違う、違うんだ。否定しようにも声は出さず、朝の冷たい空気の中、同じように冷え切った天の音が響く。」

「何がそんなに応えたの？ お友達に馬鹿にされたのがそんなに悔しかった？ それとも戦うのが嫌になったのかしら？ 何にせよ、馬鹿馬鹿しい」

平坦な口調から一転、吐き捨てるような天の言葉。辺りの鳥が一斉に飛び立ったのはその罵声に驚いたからか。

「違う、逃げじゃない」

「違うわ、言い訳なんて出来ない。あなたのやっていることは正真正銘の逃げじゃない」

同じ言葉なのに、孕む意味がこつも食い違う。天の言っている言葉が理解出来ない。それも天が言うように僕が逃げているからだともいえるだろうか。

「合理的な判断だ。関わるなと言われたから関わらない、無用な争いはしない」

頭に血が上る。筋の通った言葉を発しているが、思考は白熱し上手くまとまらない。

「少しは頭を使ったわね。ただ蒼、あの男に任せる意味をわかって言ってるの？」

「任せる、意味？」

「ええ、そうよ。この街の『人形』を倒すのを全てあの男に任せるということは、あの男の戦力を上げること」

『人形』を倒した分だけ『人形』は人に近付き、強くなる。それが『遊戯』のルール。

「今の私達とあの男が戦った場合、おそらく私達に分があるわ。だ

けど、このままあいつが力を付けたらどうなると思う？」

無限に等しい再生能力を持つという『心臓の人形』、そして今だに詳細不明な悠夜の能力。それが強化されてしまったら。

「あなた、火音を守るんでしょ。だったら、今日の前の脅威だけじゃなくて将来の危険も摘み取るべきよ」

「でもそれじゃあ火音が……」

それでは結局火音を戦いに巻き込むことになる。

「平気に決まってるじゃない。だって彼女に降り懸かる火の粉は、全部あなたが処理してくれるもの。それが、兄の役目なんじゃないのかしら？」

相変わらず僕は何も言えない。まだ時間も早く、人通りの無い静かな道で天だけが言葉を発する。

「勿論、私も蒼に協力するわよ。だから蒼、振り払える火の粉を気にするよりも、対抗出来ない火事を避けるべきだよ」

再び火の例え、言っていることはわかる。むしろ、苦し紛れの僕の屁理屈よりもよっぽど理屈が通っているくらいだ。

「日常を守ると言うなら、守ってみせなさい。逃げて目を逸らすだけじゃなくて、正面から叩き潰すべきよ。私のパートナーなら二組を同時に相手にするくらい、出来るわよね？」

「はあ……」

何て無茶を言うんだ。でも。

「出来るよ」

認めよう、たしかに天の言う通り逃げている。

悠夜の指摘は正しい。火音の話聞いた時に、『遊戯』絡みだということ疑った。だが、無意識とはいえそれを忘れた。あつてほしくない事柄を無理矢理意識から追いやった。情けない、ただけでなく悠夜にまで見透かされていたのだから。

「うん、たしかにそれは逃げだ」

逃げていたことを指摘され、逃げていたという事実から逃げた。

「ようやく認めたわね。全く、私にあんなに喋らせるなんて、使え

ない所有者。慣れないことをしたせいで喉が痛いわ」

人形である天が喉を痛めるのかなんて無粋なツツコミはしない。

「ごめんね。だから、やるよ」

何度この言葉を吐いただろう、何度挫折しただろう。その度に目の前の少女は僕に付き合ってくれた。

「別に、私の為に動く必要は無いのよ。あなたは、あなたのやりた
いようにやりなさい」

「そうだね」

気が付けば日は高く上り、影は短くなっている。

「さて、中断しちゃったけどどっか行こうか」

「あら、それは続けるのね」

「まあね」

前回の埋め合わせだけじゃなく、今回含めて今までの諸々に対する恩返しだ。

「でも何のプランも無い蒼に私を満足させられるかしら」

「それを言われると……」

しかたない、火音にでもオススメの場所を聞いてみよう。

「ちよつと待ってて」

「携帯つてやつね。随分と便利になったものだわ」

「お年寄りみたいだよ、天」

「あなたの三十倍以上は生きてる自信があるのだけど？」

軽口の応酬をしながら、鞆にしまっていた携帯を探す。

「ああ、あつた」

指先に当たる固い感触。それを掴もうとした瞬間、手に伝わる振
動。

「火音？」

あまりにもタイミングの良すぎる電話に驚きながらも通話を開始
する。

火音に何の連絡も無く外出したことがまずかったのか、それとも
何かお使用の依頼か。

「お兄ちゃん、今時間ある？ 例の占い師に会ったって人が見付か
ったの」

「どうやら、そんな生温いものではないらしい。」

第二部二章その二（後書き）

なんか繋ぎ回みたいなの雰囲気は漂っていますが、更新しました。

はい、たぶんこっから話進んでいきます。

次回の更新は……

あの、テストがるので……

はい、言い訳です。

頑張って更新しますね。

これからも応援よろしくお願いします

第二部 二章 その三

「お兄ちゃん、こつちこつち！」

入店音を鳴り響かせながらドアを開け、辺りを見回した僕に聞き慣れた声が掛けられる。

前にも来た桜坂女学院近くのファミレス。それなりに繁盛した店内の窓際の席から、こちらに手を振る火音。

「すみません。お待たせしました」

「いえ、むしろ予想していたより早くいらしたのでビックリです」

火音の横に座る女性が柔和な笑みを浮かべて言う。背が高く、長い黒髪をそのまま流した女性。しかし同じ色の髪でも、纏う空気は、天の他者を寄せ付けない神秘的なそれとも、この間の火音の後輩の利発的な物とも違う。儂げで、今にも壊れてしまいそうな、透明感のある黒。例えるならそう、小賀浦先輩のような。

「違う」

小さく呟き不吉な考えを追い払う。『遊戯』絡みの可能性があるからといって、変に身構え過ぎだ。

「どうかいたしましたか？」

「ああ、いえ、なんでもありません」

疑問の声と共に浮かぶ微笑み。改めて見詰めたその表情からは、初めに感じた病的とすら言える弱々しさは感じられない。普通の、何の変哲も無い綺麗な女性。僕が普段関わるのが個性的過ぎる面々であるが故に、彼女のおっとりとした物腰に過剰反応してしまったのだろう。

そう、やはり僕の勘違い。

「ええと、あなたが占い師に会ったことのある方、でいいんですよね？」

「はい、そうです」

「その、お名前は……」

「坂萩美華といます。陸上部で火音さんの先輩をやらせていただいてました」

火音の先輩だということは、この間の二人の先輩でもあるということだ。後々伝わる可能性を考えると、天との兄妹演技をやっておくべきだったのかもしれない。

「ちよつといいかしら？ どうして過去形なの？」

僕が聞き流していた部分に食い尽く天。その質問を受け、火音の顔に焦りが浮かぶ。

「あの、えと、あ、それは……」

「怪我をしてしまったんです」

恐らく、何かフォローをしようとしたのであろう火音のことなどにせず、サラリと告げられた言葉。しかし、陸上部という前提条件を含めればその事実も、重い。

「すいません……」

質問をした訳ではない僕ですら、責任を感じずにはいられない。「気にしないでください。私の中では、もうケリの付いたことですから」

坂萩さんは語る、本当に何でもないかのよう。

僕は最初この人を弱いと思った。だけど、もしかすると、こんな風に現実を受け入れ大事な物を捨てられるこの人は、僕なんかよりよっぽど強いのもしれない。

彼女と僕の性質は真逆だ。僕は自分の、例え世界に反したとしても大切な日常を守りたいという願いを否定する気はない。だけど、それがただの子供のわがままであることも承知している。

「凄いですね」

「何がですか？」

「いえ、すいません。気にしないでください」

僕はこの人に出会えたことを感謝すべきだろう。自分が成し得なかった妥協を、称賛されるべき冷静な対応をした彼女から、自分の愚かさを学べたことを。

「火音さんから聞いていましたが、やっぱり変わった人ですね」

「僕は別に普通の一般的な一般人ですよ」

「その言い回しが既に独特よ」

「そうそう、お兄ちゃんは何んて言うのかなあ。とにかく変な人だよ」

「君達には言われたくない」

僕に変人と言う前に、自分達を振り返るべきだ。

「はあ、とにかく、無駄話は置いていて、話を聞かせていただけませんか？」

「あら、無駄話とは随分な言い草ね」

「いや、今は無駄だからね。ああ、もう、すみません、坂萩さん…」

「…」
こちらの頼みで時間を取らせているのに、話題がブレてしまつて一向に本題に入らない。

「いえ、大丈夫ですよ。むしろ見ていても面白いです」

そう言う彼女の笑み中に苦笑が混じっているように感じてしまうのは、僕に負い目があるからなのだろうか。

「ほら蒼、あなたの頭の中身が愉快と言われてるわよ」

「その言い方が僕に不愉快」

「だ、そうよ。坂萩さん」

「そつちにふらないで！」

僕と天の応酬にしばしポカンとしていた坂萩さん。その口元が不意に緩まる。

「ふふっ」

一度決壊するととまらないらしく、口を押さえて必死に笑いを堪えようとすると、指の間から漏れ聞こえる声と体の奮えはなくならない。

「本当に、面白い方ですね」

「ええ、弄っていて飽きないわ」

その言葉に再び笑い合う女性陣。全く、僕の事情も考えてほしい、

このままでは心が折れる。

「とにかく、話を聞かせてください」

こういう風にふざけあうのはファミレスでの過ごし方としては正しいのだろうが、僕達の目的は違う。

「あつ、すいません。つい、楽しくて」

原因は主にこちら側にあるのに、わざわざ頭を下げ謝罪する坂菼さん。そこから上げた顔に浮かぶのは、打って変わって真面目な表情。

「そうですね、何から話しましょうか」

軽く眉を寄せ、考え込むように、何かを思い出すように、言葉を紡ぐ。

「何でも構いませんよ」

それが例の占い師に、ひいては『遊戯』に繋がるなら。

おそらく二つは何処かで繋がっている。出雲のこともあるし、そうなのだろう。

だったら、やってやろうじゃないか。手を出すなど言うならば、手を出してやろう。あんな風に煽られ、馬鹿にされて引き下がる訳にはいかない。例えどんなに馬鹿な願いでも、僕は自分の日常を守る。

「そうですね……なら少し、昔の話からさせてください」

僕の言葉を受け、そう前置きした坂菼さんは語り出す。

「先程少し言いましたが、私は怪我で陸上をやめてしまったんです。内容に反して相変わらず表情に悲壮感はない。

「正直に言えば、そこまで真面目に陸上をやった訳ではありませんでした。でも」

でも、いざ失うと急に辛くなってしまった。そう話す彼女の顔は、一瞬だけ、一瞬だけとても歪んで見えて。

「馬鹿な話ですよ。なんとなく続けていたそれが無くなったら急に惜しくなるなんて」

無意識にか故意にか、取り繕うように再び笑顔を浮かべる。

彼女はずっと笑っている。ここに来てから、僕は笑顔以外の彼女の表情をほとんど見ていない。明らかに、それは異質だ。

「でも」

自嘲、のような笑みから一転。

「今は違います。占い師さんに相談して、私は救われました」

嬉しそうな、今私は幸せだと言わんばかりの満面の笑み。

「悔やむことはなかったんですよ。たしかに、陸上を失ったことは悲しいことです。でも人は悲しくても、どうにでも出来る。そんなことにも気が付かないでウジウジ悩んでた私は、やっぱり馬鹿でした」

再びの自嘲。

訂正が必要かもしれない、たしかに彼女は笑い以外の表情を作っていない。だけど、笑みの種類はそれこそコロコロと変えている。下手すれば平均よりよっぽど表情豊かだ。

僕を感じたようにこれが異常なのか、それとも彼女の性質上他人に笑顔で接することが癖になっているだけなのか判別出来ない。

「エピソードはわかったわ。だからその占い師の人についてもっと詳しく話してくれないかしら？ 例えば、何処でその噂を知ったかとか」

なかなか自分の知りたい情報が得られず、痺れを切らしたのだから、不愉快さを滲ませた天が言う。

「あ、そうですね。すいません」

「別に構わないから、早くして貰えると助かるわね」

棘だらけの発言にも表情を変化させない坂菥さんと、頬杖を付き相手を睨むような目付きの天。わかってはいたが、対称的な二人だ。「噂を聞いたのは、学校の雑談だったと思います」

「馬鹿なことを言わないで。あの噂には占い師の居場所や、占いの詳細は一切無かった」

「そ、天さん、落ち着いてください。私の調査のミスかもしれないじゃないですか」

声を荒げる天と、それを宥める火音。うるさいファミレスでさえ響く音量に、周囲から奇異の目が向けられる。

「失礼、ちょっと取り乱したわ。でもね、私は火音の能力のことを、どこかの無能な兄のそれと違って信用しているのよ。それに、たまたまあなただけ違う噂を聞いたって、そんな都合のいいことがあると思う？」

「そんな都合のいいことがあったから、坂萩さんは占い師と出会えたのかも知れない」

坂萩さんが他の生徒と同じように、人から聞いただけの噂を広めているのなら、彼女の知る噂と、出回っているその内容が違うのはおかしい。しかし、彼女は実際に占い師に会っている。

「天、クールダウン。落ち着いて」

天を擁護したいところだが、今の天が冷静じゃないのは事実だ。何がそこまで天を苛立たせるのかはわからない。しかし、いつもの天なら絶対に僕レベルの思考なら到達する。

「悪かったわ」

そつぽを向き、悔しそうにはあるが謝罪する天。自分の精神状態が普段と違うことくらい、多少冷静になればわかるのだろう。

「坂萩さん、つまりあなたは噂を聞いて、占い師に会いに行ったんですよね」

「ええ、そうです」

「なら、その場所はわかりますか？」

普通の人と、坂萩さんの間に存在する占い師との面識の有無という相違点。ならば、占い師に会った時の記憶を保持している可能性も十分ある。

「ごめんなさい。それが、覚えてないんです」

「そう、です、か……」

「はい、これくらいしか話せなくて、すいません」

「いや、でも、美華先輩の話は役に立ったよね、お兄ちゃん？」

「え、あ、う、うん、はい、かなり」

意気消沈する坂菼さんへのフォローに慌てて乗る。実際、彼女の話から得られた物はある。

「でも、肝心の所を覚えてなくて……」

「それは……」

一瞬の沈黙。しかしそれが両者に漂う気まずい空気を決定的な物とする。

結局、火音による必死のフォローも虚しく、賑わうファミレスに似つかわしくない沈んだ空気のまま話し合いは終了した。

第二部二章その三（後書き）

久しぶりの更新ですね。

いろいろとごたごたしてスランプでした。
今回もスランプから脱したとは言いきれません。

しかし、これからも続けていきますので、宜しくお願いします。

第二部 二章 その三

「これといって有益な情報は手に入らなかったわね」

気まずい空気に耐え兼ねたのか、実際に予定があつたのかはわからないが、坂萩さんが帰つたのを機に天が話題を変える。

「そうかな？ 僕としては、多少新しい情報が手に入っただけよかつたと思うけど」

実際、期待を持ち過ぎていた反動でがっかりしているだけで、得た情報は大きい。

「まあ、力み過ぎてた部分はあるんじゃないかな」

「そうだね！ リラックスだよお兄ちゃん」

オーバー過ぎる身振りを交えて火音が反応する。元気があり余っているように見える火音と、リラックスという単語程ミスマッチな組み合わせも無いと思うが、そこは彼女なりの気遣いなのだろう。

「それで、一番リラックスしなくちゃいけない人はどうなんだい？」

「ノーコメントよ」

わざとらしく紅茶を啜り、視線を逸らす天に話題を向ける。

「天はもう少し客観的に自分を見れると思つてただけだなあ」

今の僕はニヤニヤと底意地の悪い笑みを浮かべているに違いない。坂萩さんではないが、様々な状況で使える笑顔という表情はかなり便利だ。

「蒼、意外にいやらしいのね」

「普段の意趣返しかな」

「そう、覚えておきなさい」

「楽しみにしておくよ」

呪い殺してやると言わんばかりの視線を受け流す。さすがに天のこういつた態度にも慣れてきた。

「はあ……私の負けよ。たしかに、冷静じゃなかったわ。我ながらどうかしてたわね」

さっきの会話の中で、既に自分の非を認めている天をさらに追及するのはどうかと思ったのだが、そこは天も会話を盛り上げる為と察してくれたようだ。一通り会話に付き合ってくれる。

「でも、どうしたんですか？ 天さんがあんなに取り乱すなんて珍しいですよね」

「そこは僕も気になるな」

再度この話題を振ったのは何も話の流れからというだけではない。先程聞きそびれた挙動不審な理由、珍しい事態だけにいやがおうでも気になってしまっ。

「その、なんとというか……」

あの天が、俯き言葉を詰まらせる。下手すると取り乱すこと以上に貴重な光景だ。ここまで来ると単なる興味以上に心配になってくる。

「本当に、今日は変だよ？ 大丈夫？」

「うるさいわね。私にだって気を遣う時くらいあるのよ」

「普段そうじゃない自覚があるなら改善してほしいな」

「その言葉で、私もあなたよりはデリカシーがあるのを実感出来たわ。ありがとう」

「いや、そんなことは」

「ちよつと、お兄ちゃん。このままだとまた聞けなくなっちゃうよ」
弁明しようとした僕を遮るように身を乗り出した火音に窘められる。

「まあ……どうして二人が話すと変な方向に進んでくかなあ」

呆れたように言われても、僕にそんなつもりは無いのだから困る。

「私のせいじゃないわよ」

「僕のせいじゃないよ」

「物凄く説得力無いのわかってる？ 二人とも」

たしかに我ながら狙ったかのようなタイミングだが、狙ってないんだからしかたない。世の中には図らずとも息が合う人種がいるらしいが、僕に限ってそれはないからこれは偶然だ。

「なんかお兄ちゃんが何考えてるのかだいたい読めちゃうなあ」

「同感ね」

「そこを否定しておけばいいのにしないなんて、やっぱり仲よしだよね」

「なっ……！ それはっ、蒼が単純だからっ！」

火音に追い詰められた天が、なんとかしろというような視線を向けてくる。

しかし助けようにも、無力な僕はさっきの自分もあんな楽しそうな表情だったのだろうか、思考を逃がして現実逃避することくらいしか出来ない。あそこまで絶好調な火音相手に、いくら抵抗しても無駄だ。

「はあ、やめましょう……何か言う程、墓穴がどんどん深くなっていく気がするもの。意外に黒いのは、流石蒼の妹ってことかしら？」

天もそれを悟ったようで、降参の意を示すように体から力を抜く。

「お兄ちゃんと一緒にされるのは心外だよ」

「結局火音も天みたいなことを言うのか……」

「えへへ……」

僕や天の言葉を受け、はにかんだり、可愛らしく怒って見せる火音は今まで通りだ。だけど、前はあんな風に他人をからかったりはしなかった。その変化を僕は好ましく思う。『遊戯』は最低の、最悪の状況だけど、その中ですら人は変わる。それはとても、尊いことのはずだ。

「それで、結局随分話が逸れてしまった訳だけど、話すわよ」

「うう、結局私も遮っちゃったね。ごめんなさい」

頭を下げる火音を一瞥して、天は更に言葉を紡ぐ。

「端的に言っつて、苦手なのよ」

そこで貯めるように言葉を区切ったのは単に息継ぎか、言いづらかったのか。

「彼女の、坂萩美華の笑みが、他人におもねる為でないことくらいわかるわ。彼女なりの気遣いなんでしょうね。ただ、よくわからない

いけど、苦手なのよ」

「苦手って、それだけ？」

たしかに僕も坂萩さんの笑顔には違和感を感じたし、ほんの一瞬とは言え狂的だとすら思った。だが、あれはあくまで個人の性質の域を出ないし、僕の感想も考え過ぎだ。

あくまでも個人の感情に過ぎないそれに、天が振り回されるとは考えにくい。

「理由は、自分でもわからないわ。ただ、やりにくくて、どこことなく気持ち悪かったの。その程度のこと取り乱したことは本当に反省してるわ、ごめんなさいね。火音も、先輩を悪く言ってしまったって……」

深く頭を下げる天。本当にそれこそ、今日の彼女は変を取り越して気持ち悪いくらいだ。

「そ、そんな、大丈夫ですよ。さっきお兄ちゃんが言ってたみたいに、やっぱり天さんにも焦りがあったんだと思います」

「となるとやっぱり、僕のせいかな」

目下最大の懸案は、一応停戦条約に持ち込んだとは言え目に見える脅威である悠夜達だ。それに、関わるなど言われた事件に首を突っ込めば、敵と見做されてもおかしくない。

「別に、あのチャラチャラした男が不快なのは蒼のせいじゃないわ」

「そうか、よかったよ」

「まあ、蒼は蒼でへたれ過ぎて不快だけれど」

「そこで持ち上げて落としますか……」

なんとというか、人に精神的ダメージを与える方法を熟知している気がする。

「うんうん、やっぱり天さんはそういう方がいいよね。大変な時

こそ、冷静に、だよっ！」

「ええ、そうね、鬱憤は全部蒼にぶつけるとするわ」

「そうそう、それがいいよ」

納得したかのように頷く天に相槌を打つ火音。何やら不吉な話の

流れになっっているが、僕の耐久力がそこまで高くない以上やめてもらわないと困る。

「いや、もっと別の方法で解消してください。火音も話逸れるから止めてくれ」

「ええ、私はこういう風に話すの好きだけどなあ」

口を尖らす姿は自分の妹ながら可愛いが、言ってる内容は可愛くないのがどうしようもない。

そもそも、話が進まないと言っていたが、それも会話に燃料を投下したかっただけなのではないか。本当に、最近の火音は変わった。「む、お兄ちゃんなんで笑顔？　もしかして……そういうのが好き？」

「違います」

前言撤回、変わらない方がいいかもしれない。

「なるほど、これが火音の気持ちね。横にいる人間を無視して盛り上がるのはやめてくれないかしら？」

「ごめん、ごめん。それじゃあ今度こそ本題に入りたいんだけど」

「ええ、早くしてちょうだい」

「お兄ちゃんは話長いのが玉に傷だよな」

遅れた原因は確実にこの二人にあると思うのだが、したり顔で頷いている目の前の二人にそれを言えばまた話が逸れる。それを見越して言わないのが大人の対応だ。

「ああ後、ヘルは呼ばなくて大丈夫かな？」

これからの行動にも繋がる大事な話だ。一人だけ除け者にも出来ない。

「あ、なら、ちょっと待ってね」

そう言いながら火音を取り出すのは、女の子らしいピンク色の携帯。

「メールしたら来ると思うから」

テキパキと文字を打ち込む火音を見ると、そういうところはちゃんと現代の女子学生なんだなんて感想も浮かぶ。しかしそれ以上

に気になる案件が一つ。

「ヘルって携帯持つてるんだ……」

「うん、あるといろいろ便利だしね。むしろお兄ちゃん、天さんに持たせてないの!？」

「え? うん、まあ……」

リアクションの大きい火音にしても珍しく、大きく身を乗り出しての質問にたじろぐ。

「うわぁ……」

明らかに非難を滲ませた声を火音が漏らすが、今の答えの何処に、冷たい目で見られる要素があるのか全くわからない。

「お兄ちゃん、天さんは火音以上に守ってあげなきゃダメなんだからね。それに女の子に携帯も持たせないなんて」

「いえ、あの、火音、私は別に」

「天さんは黙っててください!」

当事者である天にすら噛み付きながら、火音の説教は続く。

「お兄ちゃん、昔からお兄ちゃんは女の子に対しての対応がなっていないよ!」

「は、はぁ……」

天が一人でいるのは危険だから、連絡手段とした携帯を持たせる理由が必要なのはわかる。それに気が付かなかったのは僕の落ち度だ。しかし、火音が怒っているのはそこではないらしい。

「はぁ、絶対わかってないでしょその態度」

いつのまにか立ち上がって力説している火音に違うと言いたいが、たしかにわかってない以上返す言葉が無い。

「もういいわ、火音。蒼には一生理解出来ないから」

「でも……」

「それに、蒼のそういう部分は嫌いじゃないわよ」

「天さんがそう言うなら」

何やらよくわからないが、天の助けでこの状況を打開出来たらしい。

結局火音が何故怒ったかは不明がだ、もしかしたら僕にも話が逸れる責任はあったのかもしれない。

「よし、じゃあ今度こそ本題に」

「さつきから何度目かしらねその台詞」
「からかうような天の言葉を黙殺する。」

「坂萩さんは、例の占い師にあつたと考えて問題無いかな？」

坂萩さんの話を元に仮説を立てるにしても、まずその内容を信じなければ始まらない。

「ええ、それが妥当ね。異論は無いわ」

「私も無いよ」

同意する両者。しかしその内、天だけが続けて言葉を紡ぐ。

「ただ、少し変ね」

「どういう意味ですか？」

火音の言葉を受け、思案するかのように口許に手を当てたまま沈黙する天。そして数瞬の間の後、会話が再開される。

「中途半端というのかしら？ 記憶が曖昧過ぎるのよね」

「それ自体は問題無いんじゃないか？」

逆に、淀みなく情報を提供されても胡散臭いだけだ。

「少し考えてほしいのだけど、あの性格で、自分の持つ情報が曖昧なのに、情報提供しようと思つのかしら？」

「それは……」

違う、そう言いたいのに何故か言葉が出て来ない。

そんな僕を追撃するかのように、静かな天の声は止まらない。

「積極性と、持っているカードが釣り合わないのよ。それに、学校内で噂の内容が変わらないのも、内部に大元がいるなら、何もおかしくないわよね」

「噂を流し、それに修正を加えてるやつがいるって言いたいのか」

「ええ、そうよ」

一理ある。むしろそれ以外の方法を思い付かない。だけど、その理論だつて穴だらけだ。

「で、でも、先輩は」

「わかってる。別に私は彼女を責めるつもりはないもの」

弁解するかのような火音の言葉を遮り、宥めながらも追及はやめない。

「何も所有者本人であるとは言わないわ。でも、『遊戯』参加者は物理法則や常識なんて軽々と超越してくる化け物ばかりよ。最悪、洗脳って可能性もある」

坂萩さんが無理矢理協力させられた。天としては火音を納得させる為に言ったのかもしれないが、なるほどたしかにありそうな話だ。しかし。

「無いな」

キツパリと僕が断言したのが意外だったのか、天と火音の視線が集まる。

「学内で噂をコントロールする。たしかに有効な手段だけど、それを人力でやるなんてそれこそ無理な話だよ」

人の口に戸は立てられない。噂を撒くのにこれほど都合のいい生き物もないが、同時に同じ話は飽きられるのも事実だ。

「何らかの能力だと考えるなら、それこそ噂の広まり方自体が能力と見るべきだ。中高一貫、千人は軽く越える生徒に対して情報統制するのは、人数的にも、能力的にも不可能に近い」

仮に坂萩さんが操られていたとしても、同じような人間を複数用意しなくてはいけない。人間の洗脳なんて大掛かりなことを、そう大人数に出来るものなのか。

「そうね……」

僕の言葉と、それに納得したかのような天を見て露骨に緊張を解く火音。彼女をさらに安心させるように、僕の考えを話す。

「もちろん、天の言ったなことが事実かもしれないし、僕の理論も穴だらけだ。でも、そうだったとしても、敵が僕達に接触してくる意味は無い」

今の僕達は敵について何も知らない。向こうはそれを見てこちら

を嘲笑つていれればいいだけの話なのに、わざわざ自分の手の内を見せる必要性は皆無だ。

「何にしても、今は情報不足過ぎる。一旦落ち着こう」

下手な憶測で動くよりも、今はしっかり情報を集めて、目の前の課題をクリアしていった方がいい。

「結局、手詰まりといったところかしら」

「そう言われると何も言えないんだけどね」

的を射すぎている天の言葉に、苦笑以外返せないのが恥ずかしいところだ。

「まあ、やつぱり私は焦っていたということね」

「あ、じゃあ私、何か冷たいもの持って来ますよ」

「いや、それは」

「いいからいいから、任せてください」

天の制止を振り切り、コップを持って立ち上がった火音が、僕の横を通りながら小さく呟く。

「ありがとうね、お兄ちゃん」

火音の為にやったことではない。『日常』を守りたい僕からしたら『遊戯』なんかで皆の関係が気まづくなるのが嫌なだけだ。単に、自分がやりたかったからに過ぎない。

「悪かったわね」

パタパタと走っていく火音の背を見ていると、横から声がかかる。

「本当に今日はらしくないよ」

「そう、なら、言わないわ」

性急過ぎたのは天だけじゃない。僕もそうだ、さつき僕達がした会話はやはり予想に塗れている以上、穴だらけで、欠陥品だ。

「はあ、にしてもここまで打つ手が無いか」

これなら何か知っている風な悠夜に直接聞くのがベストにすら思えて来る。

「焦るなど言ったあなたが勝手な行動を起こすなんて茶番は無いわよね」

「当然」

半眼で睨んで来る天、あまりにもいつも通りだ。緊迫した状況の
はずなのに、ここが日常だと錯覚してしまいそうになる。

「それにしても、遅いねヘル」

あの速さなら同じ市内での距離など無いも同然のはずなのに。

「どうせ家で惰眠でも貪ってるに違いないわ。携帯もかわいそうね」
天の手厳しい言葉、それに抗議しているのか同意しているのか、
主に置いていかれた携帯が鳴り響く。

「ヘルかな？ 天、ちよつと確認してくれないか」

さすがの僕も、女性への対応がなつてないと言われた直後に妹の
携帯を勝手に見る気にはならない。

「他人に頼んでる時点で同罪よ」

そう言いながらも、天はピンク色の携帯に手を伸ばす

少し後になつてから考えるなら、多少の勘違いなど恐れずに、僕
達は焦るべきだった。

今は異常の中にあり、ぬるま湯なんて何処にも無い。今自分がそ
のファミレスにいるのは何故かをもつとちゃんと考えるべきだった。
そうそう何度も大事なメールは無い？ 馬鹿げている。不意打ち、
番狂わせ、逆に平凡マンネリ当たり前。この『遊戯』は、人間を創
るなんてことを考える、性根の腐った糞野郎の筋書きに従っている
のだから。

「これは……」

厳しい表情の天から見せられた画面。そこには。

「助けて」

第二部二章その三（後書き）

どうもお久しぶりです。

なんか毎回、久しぶり 次回こそサクッと 久しぶりの無限ループ
してる気もしますが……

いやはや、これが死亡フラグか……

にしても一年以上連載してようやく気が付いたのですが、連載という形にするとどうしてもそれを意識した終わり方になってしまいませんよね。

人形遊戯はもともと公募用のネタだったのですが、連載にせずになんま繋げると本当に意味のわからない文章になるので諦めました。

という訳で今回のラストもあれです。

読んでいただければわかると思いますが、あれが来て、意味深なことと言って、次回衝撃の展開が！てきなことを臭わせます。

ちなみに次回も大して話進みません。

自分は話進めるのが遅いうえに書くの遅くてしかも一つの話が短いという。あほか状況な訳ですが。これはヤバイ、直したい。つか黒衣の男とか、悠夜とか、淡雪先輩とか皆覚えてんのかな……ハルは危うく作者が名前忘れかけました。

さてさて、こんな拙作ですが、何故か更新してないのに評価が伸びて100突破しました！誰だよ、一ヶ月以上更新されてない作品探し当てたへんた（ryもといスゲー人は。

本当にありがとうございます。まさか三ヶタにいくとは……

という訳でこれを記念して、第一回人気投票をします。

え？何？聞こえない？

人気投票をするぞおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！

はい、リピートアフターミー人気投票。

正直、10票来れば俺死んでもいいかなくらいの気持ちで行きます、
いえあ！

ルール説明としましては、一人三人、一位から三位までをブチ込んでください。あ、ちなみにこの話へのコメントとしてお願いします。その際、そのキャラが好きなの理由とか、そいつと絡んで欲しいキャラ上げてくれたらいいなあなんて。

現行キャラがかなり少なく、また、俺がめちゃうくちや好きな悠夜が大して活躍してないので、たぶん二部終了時にまた投票するかなあくらいの気持ちです。完全臆貞。

これで上位になったキャラの、短編書くような書かないような。いや、そこ、本編書けて石投げないで、頑張るから、本編も頑張るから。

はい、死亡フラグを立てつつ、また次回、お会いしましょう

第二部 二章 その四

「暇だなあ」

頬杖をつき、投げ出した足を揺らす。場所はビルの屋上、高所特有の強い風に髪が乱れるが、沈んだ気持ちを吹き飛ばすようなそれが今はありがたい。

「火音が忙しいのはわかるけどさ」

私の所有者、彼女にだって生活がある。私もそこでダダをこねる気は無い。

「はあ……『右眼』が羨ましい」

本人に言ったら激怒するだろうけど、あいつは所有者とベタベタし過ぎだ。

「考えてもしょうがないな、っと」

腕に力を込めて立ち上がる。うじうじするのは私らしくない。

「また散歩でもしよう」

屋上の縁に足を掛け、跳躍。

自分を支える物が無い浮遊感。動かし、火照った体に風が当たるのが気持ちいい。建物を、時には空気すら蹴って空中を移動する。

『人形』どころか所有者ですら敵わない運動能力を持つ私だから出来るこれは、ちょっととした自慢で、趣味だ。

「あの男なら、羨ましがるか」

火音の兄、御任蒼。空がどうこう言ってるあの変態なら、目の前に広がるこの青空を羨ましいと思うのだろうか。

「まあ見せてやらないけど」

迷惑をかけたのは悪いとは思っている。だけど、それとこれとは話が違う。火音をたぶらかすシスコンは許しておけない。

「でも、空が綺麗つてのはわかるかな」

高速で流れていく景色。それを目で追いながら思う。この透明な美しさだけは、否定出来ない。

「空つて、どこから空なんだろう……」

空は高くて遠いもの。本当にそうなのだろうか。

空も、地上も、同じ空間で繋がっている。見落としているだけで、美しい空の中に自分達はいるのかもしれない。

「これじゃそれこそあの変態みたいじゃないか」

私も、蒼やら『右眼』やらと関わるようになって毒されてきているのかもしれない。

「やめよう……」

私らしくもない、詩的な感傷に浸っていた。頬が熱くなるのは、本当に運動によるものだけか。

余計な考えを振り払うようにスピードを上げる。目にも留まらぬ勢いで移ろう視界、その中でそれに注目したのは、何か意味があった訳ではない。

「っ！」

空気を蹴つての無理な停止。それに伴い、体に殴り付けるような衝撃が走る。速いのは私の自慢だけど、こういう時に止まれないのは不便でしかたない。

「なんだろう？」

目についたのは無数の人。見下ろした先には黒山の人だかりが出てきている。

これだけ人が集まっている以上、何も無いなんてことはないはずだ。それに、わざわざ体を痛めてまで確認したんだから、つまらない結果に終わるのは勘弁してほしい。

人が集まる原因を探そうと目を凝らす。

そして、それと目が合った。

「っ……」

気持ち悪い、生理的な嫌悪感を感じざるをえない光景。どう落ちたらそうなるのか、背面から激突した肢体は、顔以外は原形をとどめていない。

そう、顔以外は。

魚のように濁った目も、何故かうつすらと笑っている口許も、飛び散る血との対比で病的に白く見える頬も、明らかに頭蓋は砕けているのに、張り付いたように顔だけは無傷。

私も『人形』として、いくつか悲惨な光景は見てきた。それこそ、戦場と言っていいものも。だが、あれはそういうものを通り越してただ気持ち悪い。

目なんて合うはずがない。私はビルの上から見下ろしている、距離的にもおかしいし、第一死人がこちらを見ているなんてありえない。だけど、目があったように感じた。

「あう……」

意図せず呻き声が零れる。人という形からあまりにも掛け離れたそれを直視出来ない。

「よお、大丈夫か」

逃げるように後退した私に、言葉とは裏腹に楽しげな声が掛けられる。

「お互い、差しで会うのは初めてか。よろしく頼むぜ」

以前と同じ、軽薄さを隠そうともしない声。不快なそれを浴びながら、思い出す。私は、見たことがある。あの顔を、あの人を。

「そう無視されると悲しいねえ」

無反応で立ち尽くす私に、再び掛けてられる声。しかし、私にはそれより確かめなければいけないことがある。

「下のは、お前がやったのか出雲悠夜」

「下の子？」

相変わらずの惚けるような口調。ここだけは『右眼』に同意だ。

この男ほどイライラさせられるやつもない。

「下の、火音が今会っているはずの人の死体だ！」

そうだ、見たことがある。前に火音と一緒に歩いていたのを見掛けた。後で聞いた時、火音は嬉しそうに先輩だと話していたのを覚えていた。そして、今日その人に占い師について聞きに行くと。

「答える、お前が殺したのか」

「知らねえよ」

振り向いた先に見えた顔は声色と同じくニヤニヤ笑っていて。

「許さない」

「いいから来いよ、餓鬼」

挑発するように手招きする相手に向かい、地を蹴り、駆ける。

「お兄ちゃん、この先右」

「わかった」

GPSを用いた火音の案内を頼りに狭い路地を疾走する。

「火音、あなただけが先に行った方が速いんじゃないかしら？」

天の言葉はもつともだ。速さという点で、僕は火音に劣るし、天を抱えながらはその差は歴然たるものとなる。

「それはそうなんだけど。でも、お兄ちゃんにいてほしいの」

「どうして？」

今とはにかく、ヘルを助けることが最優先だ。僕がいる必要性がわからない。

「私じゃたぶん勝てないから。ヘルを追い詰めるような相手に、私の能力じゃ勝てない」

ヘルの『加速』は逃げる為の異能。それを破るような相手に、いくら速さで競っても無駄ということか。

「それに、もうちよつとで追い付けるから」

何処か不安そうな火音の声。それも当然だ。言いたくはないが、僕達がたどり着くまでヘルが耐えられる保証は無い。

全員が同じ考えに至ったのだろう。自然と速度は速まり、重い空気が流れる。

「大丈夫よ。あの、速さしか取り柄が無いじゃじゃ馬が鬼ごっこで負けるはずないわ。それに、ヘルからのメールは漢字を使っていたじゃない。私を呼び出しておきながらそんな余裕まであるなんて、本当に何様のつもりかしら？」

しかし、天の一言でその空気は変わる。

「そうだね、そうだよね。ヘルなら大丈夫だよね」

泣き笑いのようになりながら頷く火音。本当に、普段は毒を吐くせに天はどうして要所要所でこんなに優しいのか。

「ありがとう」

「くだらないこと言っていないで、急ぐわよ」

再び加速、しかし先程の焦りとは違う、確固たる意志で駆け抜ける。

「この先の路地裏で追い付くよ。せーのっ！」

最後にトドメと言わんばかりの加速をし、掛け声に合わせて路地に飛び込む。

「『甘美なる悠久の蒼空』」

敵の能力がわからない以上、出し惜しみはしない。

「ヘルっ！」

「火音っ！」

抱き合う二人を視界の端に捕らえながら、僕の敵に注視する。

「お前かつ、悠夜」

「ああ、俺だぜ、蒼」

言葉を交わし、激突。

「火音、ヘルは？」

衝撃を利用して距離を取りながらヘルの安否を確認する。その際も、悠夜から視線は外さない。

「安心して気を失っちゃったみたいだけど、大丈夫」

「そうか、よかった」

一先ず第一段階はクリアといったところだろうか。残る課題は目の前のこの男だ。

「おいおい、四対一とか冗談キツイぜ蒼君よお」

「だったら大人しく投降しろ」

肩を竦め、相変わらず余裕といった体を崩さない悠夜を睨む。

「却下だ。むしろ、仲間がたくさんいなくちゃ喧嘩も出来ねえ腰抜け野郎は大丈夫なのか？」

悠夜のわかりやすい挑発、だが。

「火音、この勝負手を出すな」

いいだろう、やってやるうじやないか。

「お兄ちゃん!？」

「蒼っ!」

僕の背中に火音の困惑した声と、天の叱責が降り懸かる。

「大丈夫、何も考えてない訳じゃない」

前に出ようとすると二人に手振りで停止を伝えながらも、意識を、

肉体を、戦いにむけて研ぎ澄ましていく。

「何処にいるのかわからない悠夜の『人形』は警戒してなくちゃならない。それに、悠夜能力がわからない以上全員で向かうのは危険だ」

未知の異能で全滅だなんて笑えない。

「だから、さつさとはじめようか」

引き絞った弓を引くように、抑えていた体を解き放つ。

「『複写』」

体が動き出した瞬間、計ったように天の生み出した剣が手に納まる。

「いくぞ、悠夜」

何があつたかはわからない。何故ヘルが悠夜に襲われたのかも、

悠夜の目的が何かも僕は知らない。

それでも、ただ一つ言えるのは、僕の『蒼空』がまた危機に曝されているということ。そして、僕はそれを許すつもりはない。

「蒼にしては、男らしいじゃねえか」

いつもの軽薄な笑みとは違う、凄惨な、人を喰らう鬼のような笑みを浮かべた悠夜が答える。

「さあ、第二の遊戯。ここからが、本番だ」

黒い男が嗤う先、蒼空と血鬼があいまみえる。

第二部二章その四（後書き）

皆様、お久しぶりです。

今回は自分でも驚く、異例の速さの更新となりました。これを異例ではなく普通にしたいですね。むしろ自分は一回の更新での文章量が少ないので、これよりも速いくらいがいいのでしょうか。

量といえば、今回戦闘前で切れているのは戦闘も入れてしまつとそこそ長くなってしまつからです。自分は平均の更新が四千字なのですが、自分自身がその字数や更新というスタイルにとらわれ過ぎているような気がしております。

まあ何偉そうなこと言つてんだと言われそうですが。

そのため、更新を無視して長編をぶつ切りという形にするか、一回の更新を長くしようかとも思つております。

さて、内容は悠夜がそろそろ頑張ってきましたね。あいつは個人的お気に入りキャラなんで、皆様に気に入っていただけると嬉しいです。

そして、話の感想や批評などをいただけるのも嬉しいです。

今後もご指導ご鞭撻のほどお願いいたします。

それではまた次回

第二部 二章 その五

「さっきまでの威勢はどうした」

言葉と共に放たれる悠夜の拳を避けながら思う。自分は何をしているのかと。

たしかに悠夜の言うとおりだ。調子よく挑発に乗ったものの、それでいいのかわからない。

人格に多少以上の難はあるが、悠夜は友人だ。そんな友人に、僕は躊躇うことなく剣を振るっている。

小賀浦先輩の時にあった内臓を引きちぎるような不快感は無い。出会って一ヶ月も経っていなかった先輩に感じたそれが、より付き合いの長い悠夜に対して無い。それが、恐い。

「っ！」

避ける流れに身を任せ、手元の大剣を振り下ろす。僕が今攻撃している相手は『日常』だ。そんなあつてはならない『非日常』に、僕は染まってきたのか。

熱くなっているのかもしれない、だけどそんな一時の感情に身を任せて『蒼空』を汚していいのか。

「悠夜」

二人の間に距離が出来たのを見計らい、話を切り出す。

「やめにしよう」

『遊戯』への参加を拒み続ければ、強力な敵に襲われた時に対処出来ない。逆に、悠夜と戦うことになれば、小賀浦先輩のように殺さないという選択は不可能。

「元々協定を結んでいたんだ。戦う必要は無い」

悠夜との共闘、それが唯一にして最善の手。

「せっかくの盛り上がり所で、何を言うかと思えば」

僕の言葉に、悠夜はわざとらしくため息をつく。少くない傷から血を流しながらも、不敵で軽薄な態度を崩そうとしない。客観的

に見たら、そうとう腹の立つ奴だろう。

「ただ、それでこそ悠夜だ。天にも言ったじゃないか、苦手だが、友人だと。こんな男でも、『日常』の一部だ。心から大事だと言える。」

「そもそも、俺はお前達と馴れ合うつもりはなかったんだ。ハルが言うから従ったが、そんな温い道通ってどうする」

「そんな風に吐き捨てられなくてもわかる、僕だってそうだ。自分の願いの為なら、どんな険しい道でも通ってみせる。」

「『遊戯』だの『蒼空』だのどいつもこいつも、自分勝手にベラベラベラベラ、人をおもちゃか何かと思ってるのか知らねえけどよ」

「低く、低く、悠夜の語る言葉は、呪詛のように辺りに流れ出ていく。」

「踊れと言うなら、踊ってやるよ。ただし、踊る場所は俺が選ぶ。」

「どうせ神の人形になって遊ぶなら、荊の上でだ。蒼、お前の世界じや痛みが足りない」

「その宣言は、紛れも無い交渉決裂の合図で、僕に向けられた敵意のはずだ。だが、それ以上に感じた。」

「僕なんて矮小な存在に対してではない。『遊戯』全体への、そして神への宣戦布告。紅い血鬼が、世界に悲痛な叫びを響かせる。」

「それを受けて、僕は。」

「いいだろう」

「そこまで言われたら、受けるしかない。」

「僕の世界が温いだと」

「ああ、その通りだ。むしろ、それでいい。日常に痛みなんていらぬ、この『蒼空』を汚すものは、必要無い。」

「僕からしたらお前の方が理解出来ない」

「悠夜が何をしたいか、何を願っているか。そんなもの理解出来ないし、したくもない。」

「ここで流されるままに悠夜と戦うことも、形だけの停戦協定を結ぶことも、間違いだ。」

初めからわかっていたことじゃないか。『遊戯』は己の渴望の押し付け合い、僕と火音のような特殊な例でなければ、共闘は不可能
「無理矢理にでも従ってもらうぞ、悠夜」

「ようやくいい顔になったじゃねえか」

この期に及んでも余裕を崩さないふざけた男に、僕の願いをわか
らせる。

お前の言い分なんて知らない、いいから自分の願いに従え。自己
中心的なそれこそが『遊戯』のスタイル。

奇しくもそこは、悠夜と同じだ。従ってやる、『遊戯』のやり方
に。殺しもしないし、邪魔もさせない。

「悪いね、止めちゃって」

「おう、再戦だ」

さあ、また『遊戯』を始めよう。

再戦とは言ったものの、両者、向かい合ったまま動かない。正確
に言えば動けない。初動で先を越されれば不利になるし、下手に動
けばそれだけで詰む。空気の読み合い、互いが動くタイミングを計
る。

そしてその瞬間、呼吸が合った。

振り抜いた僕の剣と、悠夜の拳が空中でぶつかる。

「得物使ってそれって、ふざけてんのかよ」

「うるさい」

事実、剣は弾かれ僕の体勢は大きく崩れた。なんとか追撃は逃れ
たものの、あれを繰り返せばいずれ強烈な一撃を喰らうことになる。
武器のある僕は、剣で悠夜の攻撃を受けても自分にダメージは無
い。それに、攻撃範囲という点でも圧倒的にこちらに分がある。だ
けど、攻められない。

「悠夜も、調子いいこと言う割には逃げてばかりじゃないか」

「戦略的って言うてほしいね」

そう、今まで戦った火音や小賀浦先輩に比べて悠夜は基本的な能力

値で圧倒的に劣る。しかし、戦闘センスや技巧という点では一番だ。こちらの動きを先読みし、殺傷力の高い刃ではなく剣の横腹を叩いて攻撃をいなす。細かく立ち回る悠夜の前では、巨大な剣は小回りが利かず、逆にスキを生み出してしまう。

「能力を使う程でもねえな」

「くっ……」

そう、それに加えて悠夜のが未知数。ヘルを倒すほど強力でなおかつ詳細不明の異能というカードがある限り、僕は悠夜に下手な攻撃を出来ない。

「舐めるなっ！」

このままではジリ貧になってしまう。

悠夜の足元を狙いクレイモアを投擲する。なんでもいい、とにかく不利な流れを変えないといけない。

「はっ、あたらねえ」

武器を捨てるという苦渋の選択も、跳躍によってあっさりかわされてしまう。客観的に見て絶対的に不利な状況。

「跳んだな」

「だけど、それこそが僕の狙い。」

「『複写』を！」

「一々言う必要は無いわ」

僕の考えを読んでくれる天が頼もしい。この相棒がいる限り、僕に武器の制限は無い。少なくとも、刀剣の類であれば天はほぼ全てを作り出すことが出来る。

「どれだけ逃げるのが上手くても、空中では動けない」

細かい移動の出来ない場所に誘い出しそこを叩く。同じく回避に長けた戦闘スタイルでも、ヘルや火音のように純粹な速さでこり押しするタイプには効果が無いだろう。そもそも彼女達は空中での移動すら平然とやってのける。だが、身のこなし、立ち回りで敵の攻撃の合間を抜ける悠夜には、最良の方法だ。

「終わりだ！」

跳躍によつて追隨し、落下中の悠夜が通るであろう場所に剣を振る。道幅は狭く回避は不可能、タイミングは完璧、下からの攻撃なら手でいなすことも出来ない。これで、勝てる。

「勝手に終わらせてんじゃねえぞ！」

しかし、予期していた手応えの代わりに、鉄の塊が空を切る音だけが虚しく響く。

「蒼の考えることくらい見え見えなんだよ」

路地の壁、道幅が狭い故簡単に手が届くそこを悠夜は掴んでいた。突起物など何も無い、それは確認済みだ。では、どうして。

「簡単な話だ。無きや作ればいいんだよ」

壁を全力で殴り、自分の腕をめり込ませて体を支える。そんな馬鹿げた話があつていいのか。いや、僕もやろうと思えば出来るだろう、しかし僕では思いつかない。

「今度こそ、終わりだ」

先程の再現、だが配役は真逆。重力に引かれ、上昇を止める僕の体。さらにさっきの大振りな攻撃のせいで、振り抜いた姿勢のままとなり防御は不可能。恰好的でしかない、僕に悠夜の蹴りが迫る。「さあ、止めてみせろよ。蒼っ！」

終わりと言つたのに止めてみるだなんて、相変わらずふざけているとしか思えない。だからこそ、こんなやつに負ける訳にはいかないんだ。

「お兄ちゃん！」

火音の叫びが聞こえる。ああ、大丈夫だ、心配するな。僕は、僕の『空』を守る。

「ああああああああああああ」

口から溢れる叫びに意味など無い。いや、意味なんて無くていい、今は悠長に語る時間なんて無い。なんと少しでもこの攻撃を耐え抜くことだけを考える。

重いクレイモアを振つたことによつて生じた遠心力、収まりかけていたそれに身を任せる。わずかに残つた勢いと、筋力だけを使っ

たごり押しの姿勢変更。無茶な動きに筋肉が悲鳴を上げるが、そんなもの気にしない。

「広がれっ」

それと同時に、『蒼空』を全力展開。少しでも、ほんのわずかも受けるダメージを軽減することが最重要。

脳が焼き切れそうな極限の集中の中、蹴りが当たるまでの一秒にも満たない時間が永遠のように思える。

そして、衝撃。

「がぎっ……」

視界が明滅し、痛覚の許容量を超えたせいか、痛いのかすらよくわからない。あれだけ策を講じてこのダメージ。悠夜は基礎能力は低いと言ったのを訂正しよう。パワーだけなら火音に匹敵する。

「」

耳鳴りが酷い。誰か何か叫んでいるが、掻き消されてただの雑音となる。

起き上がりたくても起き上がれない。まるで地面に吸い込まれるように、重力を強く感じる。目に映る景色の中で、コンクリートの灰色が辺りを侵食するように広がっていく。五感全てが異常をきたす。

「でも」

この程度で。

僕の五感がなんだ。僕はただ、『空』が美しくあればそれでいい。

「へえ」

立った、立ったはずだ。平衡感覚も、足元の感触もおかしいが、僕は今立っている。

「悪いな、ちよいと能力使わしてもらったぜ」

ぼやけた視界で悠夜の表情を確認する術は無い。だけどわかる。

この男はまだ笑っている。この状況を楽しんでいる。

「副次的な物とはいえ、能力使わされて、しかも攻撃は頭に直撃。

それでいて死んでねえ、それどころか立ちやがる。やっぱり面白い

よお前」

「そうかよ」

なるほど、この感覚のおかしさは頭にダメージを負ったからか。たしかに、危険だ。だけど逆に、体感以上にまだ体は動くという意味にも取れる。

「天、武器を」

「馬鹿なことを言わないで」

腰の辺りに何か当たる感触。

「私が支えないと駄目な立つのがやっとのくせに。分をわきまえなさい」

思い切り不機嫌な顔をした天が、そこにいた。

「逃げるわよ」

言葉と同時に、荒々しく引かれた腕に痛みが走る。

「痛いよ天、僕は怪我人なんだから」

それだけ焦っているのはわかるが、本当に痛いんだから勘弁してほしい。

「なら戦うなんて言わないで」

「その通りだね」

だけど、逃げてはいけない。客観的に見れば、この状況では引くのが最善。でも、ここで負けたらそれは悠夜の願いに僕の願いが負けたことになる。

幸い、靄がかかったような感覚に反して頭だけはよくまわるようになってきた。むしろ、とりとめもない思考が止まらない。

「ねえ、蒼。あなた、もしかして笑っているの？」

単なる驚愕を超えて、不信感すら滲ませた口調で天が言う。ただ僕だつてびっくりだ。言われるまで気が付かなかったのだから。

僕が笑っている。趣味が悪い、戦いの最中に笑うなんてそれこそ悠夜みたいじゃないか。

「ははっ」

じゃあ今僕の口から零れるこれはなんだ。

認めよう、僕は今楽しい。非日常なんていらぬ、迷惑だし消えてほしいと思う。だが、こうして異常の中に身を置いている時にこそ日常の美しさを感じるのは事実だ。

自分は今、生きている。『空』のために生きている。深手を負って、今なお危機に曝されているからこそそう思う。

「わざわざ待っててくれてありがとうな、悠夜」
「だけどそれでも負けるつもりはない。」

「俺は空気の読める男だからな。ついでに教えてやるよ。思いの外頑張ったお前へのサーブスだ」

相対する悠夜の普段と変わり無い口調、しかし向こうめ内に秘めた歡喜は隠しきれない。その視線は一人にのみ注がれている。

「お前らが今日会った女子高生、俺が殺ったよ」

そう僕に向かっていると思っていた視線、それは僕を通り越し、後ろに注がれている。

「どういうこと……」

その視線の先、火音の呆然とした声が響く。

「なんで美華先輩が出て来るの」

その通りだ。前後の繋がりがわからない。お前は今まで僕と戦っていただろう。なんで火音に、そして坂萩さんに手を出す必要がある。

「言っただろ、俺が殺したからだ」

ああそうか、だからヘルは悠夜に向かっていた。僕の『空』は最初から汚されていて、勝手に盛り上がった僕の一人相撲。

「許さない」

そして、響いた怨嗟の声。今まで聞いたこともないような声色の火音の言葉と同時に、いやそれよりも速く、何かが通り過ぎた。

「くっ」

「きゅっ」

攪拌された空気が渦巻き、吹き付ける。その勢いが物語るのは、たしかに今高速で翔け抜けたものがあり、それを視認出来なかった

という事実。

「死ね」

一切の慈悲が消え去った端的な通告は、行動の後に行われる。超高速、その勢いの全てをぶつければ、人体が人体を貫通することくらい造作もない。

小柄な少女の腕が、男の胸を刺し貫いていた。そうした場合、男の口から溢れ重力に引かれた血液は、自然と少女の顔に降り注ぐ。

「火音、お前……」

「ごめんね、お兄ちゃん」

何を謝っているんだ。何に對して、何をしたことを。した側もされた側も用途のわからない謝罪、誰からも反応されないそれはただただ虚しくコンクリートに反響する。

「やめろ」

やめてくれ、なんだこれは。火音と悠夜、二つの日常の破壊が相乗効果を引き起こし醜悪さを増す。気持ち悪い、見たくない。けどそれ故に目が離せない。

おそらく、この光景を誰より真摯に、しかし誰よりも唾棄すべきものして見ているのは僕だ。だから、それに気が付いたのも僕だけだろう。

「

悠夜の口元が、何かを唱えるように、動いた。

「火音、離れる！」

「遅えんだよ」

自分の胸に突き刺さった腕を掴む人間。普通なら絶対に見ることの無い光景が、目の前に広がっている。

「なんで、私の攻撃は……」

「主従揃って同じ手に引つ掛かる、笑えないジョークだ。それとも一つ教えてやるよ。俺は死なねえ」

攻撃を受けた瞬間の拘束。僕もかつてヘル相手に使った方法で、実質あの二人に追い付く唯一の手段だ。

「『人形』と違って殺さないように手加減する必要も無い。全力でいく」

あの至近距離で直撃すれば、ダメージは僕の比ではない。まさに必殺の威力となる。そしてその拳が向く先は、火音。

「やめる、やめてくれ」

そんな結末認めない。神がそれを決めたというのなら、神を呪ってやる。世界がそれを定めたと言うならば、そんな世界否定してやる。だから、お願いだ。火音が死ぬなんてこと、起きていいはずがない。

『ならば力を貸してやろう。後悔は、しないかね？』

白熱する頭に声が響く。なんでもいい、この馬鹿げた劇を止められるなら。

「『崩落世界 摂理停止する永劫縛鎖』」
（ヘルヘイム・アームスヴァルトーニル）

最悪の結末に抗い、最悪の鎖が今その姿を現す。

その瞬間、出雲悠夜は停止した。

いや、厳密には時が止まった訳ではない。自身が全身全霊を込め放った拳、一秒とかがからず目標に当たるはずのそれが、いつか前に進まない。まるで、進むことを認められていないかのよう。

「あ？」

意味がわからない。これは、どういうことなのか。そして異常は続く。

火音とか言う蒼の妹の前、そこに愛しい妹を庇うように蒼がいた。「ありえねえだろ」

蒼はさっきまで自分一人では立つのもままならなかった。それがどうやって気付かせることもなく一瞬で移動する。

『遊戯』だとしても異常。能力だとするならば、それはまさしく規格外以外の何物でもない。

混乱する俺を嘲笑うように、停止が解けていく。そしてそうなれば、俺の攻撃は再開されるのが道理。止められていたことなど無か

ったかのように、それ以前の威力を維持した拳撃が走る。

「火音、無事で、よかった……」

二度目となる直撃を受け、意識を失う際でなお、微笑を浮かべ、妹の心配をする蒼の姿。重なる、全部、重なる。

「やめだ」

興が削がれた。

「待って、逃げるの？」

「逃げやしねえよ。だから蒼の治療でもしてやれ。下手すりゃ死ぬぞ」

実際殺すつもりだったのだ。庇われたことで意図しない位置に入り、威力が弱まったとは言え危ない状態であることに変わりはない。「見逃すんじゃねえ。今日はもう終わりだ」

不完全燃焼もいいところだが、諦めよう。あれを見せられれば、嫌にもなる。

困惑と憎悪が向けた背に突き刺さるが、気にするようなものでもない。

「その馬鹿に伝えとけ、次は無い」

「そうだ、次は無い。」

第二部二章その五（後書き）

皆様こんにちはミナミナミです。

今回は割と好き勝手やらせていただきました。自信を持って面白いと言えるかはわかりませんが、自分らしい文だとは思いますが、それを楽しんでいただけたら幸いです。

ちなみに、永劫縛鎖は今のところ段違いに強力な能力なのですが、まあそれを簡単に使い続けさせるつもりはないのでご安心を。

感想や、意見などいただければ嬉しいです。

今後もご指導ご鞭撻のほどをお願いいたします。

ではまた、次回お会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9771k/>

幻想世界の人形遊戯

2011年10月3日03時28分発行